

---

# とある科学の自由選択 《Freedom Select》

ウィルノ・ヘイム

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある科学の自由選択『Freedom Select』

### 【Zコード】

N4198X

### 【作者名】

ウィルノ・ヘイム

### 【あらすじ】

学園都市 最先端科学の集まつたその街でその少年は溜め息をついていた。彼の名は神命。学園都市の中に7人しかいない超能力者の第六位であり、世界第一位の原石もある。そんな彼を中心起こる様々な出来事や事件を乗り越え成長していく姿を綴つた話です。原作や超電磁砲の話に沿いつつ原作には大きな影響がないように改変していきたいと思っています。

作者は小説を書くのは初めてなので過度な期待はしないよ。よろしければ感想・助言等送ってください。不定期更新です。

## 第一話 始点と終点は紙一重

### 学園都市

東京都の西部に位置するその街は、東京都の3分の2の面積を占め、その人口は約230万人、その約8割が学生と言う学生の街。その内部は23の学区に分かれてい、学区ことに特徴が持っている。またその科学技術は学園都市外部と比べ20年から30年ほど進んでいると言われる最先端都市である。

そこで行われているのは、「記憶術」や「暗記術」という名目での学生達での超能力研究。そしてその過程で特殊な能力を得た学生は、七つの段階でその力の程度を区切られている。

- 無能力者《レベル0》 測定不能や効果の薄い力
- 低能力者《レベル1》 スプーンを曲げる程度の日常では役に立たない力
- 異能力者《レベル2》 レベル1とほとんど変わらない程度の力
- 強能力者《レベル3》 日常生活において活用可能で、便利と感じられる力
- 大能力者《レベル4》 軍隊において戦術的価値を得られる程の力
- 超能力者《レベル5》 単独で軍隊と戦える程の力

そして学園都市の目的とされ、未だ誰も到達した者がいない領域である

## 絶対能力者『レベル6』 神の領域の能力

学生達はそのレベルに見合つ環境を提供され、その力をより向上させるべく日々努力しているのである。

故に学園都市が彼らを評価する基準はその能力のレベルに因るところが大きく、レベルが低いと他にどんな特技を持つていようとその評価が上garことは稀にしかない。そしてその中にはそのことを不快に思う輩もいる訳で……

その少年は、ある裏路地を歩いていた。

ここは第十九学区　再開発に失敗し急速に寂れてしまった学区である。故に廃ビルや廃屋が多く、スキルアウトというやがレベルで構成された不良達の巣窟でもあり、あまり治安がいいとは言えない。

そんな学区の裏路地をその少年は歩いていた。当然そんな場所を歩いていれば不良に囲まれてしまつし、彼の体付きからして返り討ちにしてしまつなんてことできるとは思えない。

そして案の定、

「ねえ、君。こんな所一人で歩いてちゃダメでしょ」

「そうだよ。ここにはね、僕らみたいな恐い人達が沢山いるんだから、用心しなきゃ。と言つわけで、君には少しばかり痛い思いをしてもらつんだけど準備は出来るかな？」

とまあ、こんな感じに話しかけてくる訳だが、肝心の少年の方はと。いつとそんな言葉は気にも留めず真っ直ぐ道の真ん中を歩いていく。

「おー何とか言つたらどうなんだ?」

しかし少年は答えず不良のいる方へ向かっていく。

「うつやあ、少しばかりじや済みそうにねえなあ

そう言つて不良の一人が少年に殴りかかる。しかし、少年は身構えるどころか不良の事すら視界に入れようともしない。

そして不良の拳が少年に触れた時思わぬことが起つた。不良の拳が、腕が、体が、少年の体をすり抜けたのである。その出来事に不良は一瞬だけ呆然とした後に叫ぶ。

「てめえ、能力者だったのか。くそ、一体何だこりゃあ幻影か

マジでよひやくの少年は口を開いた。

「違えよ。幻影なんかじゃない、俺はちゃんとここにいる。だがお前は俺に触れられない。待ち合わせをしているんだ、邪魔しないでくれるか? 邪魔するんだつたらこいで全員殴り倒すがそれでもいいか?」

「くつ、威勢のいい餓鬼だな。お前にそんなことできるのかよ?」

少年は「うそやうそ」したような顔をし、はあとこう大きなため息をついた後、「やつぱりお前ら、俺の事知らないのか。情報開示してないだけ知名度は全然高くないみたいだな」と残念そうに呟く。

「うそやうそや、言つてんじゃねえぞ」

再び不良達が襲い掛かると少年は、

「つて言つたお前達が付けた『万物透過』つて言つ呼びぬけじうしたんだ。まあいか。そろそろ本格的に活動しようとしてた所だし。じゃまあお前達にはいいでしょ退場願おうか?」

そつ言つてその少年は不良の群れの中に突っ込んで行つた。

## 第一話 待ち合わせと唐突な遭遇

神命選は、第十九学区の裏路地に立っていた。もう少し正確に言うと、彼は裏路地に倒れている不良達の中心に立っていた。

「おいおこどうした。もう終わりか」

彼はまだ意識のある不良の一人に話しかける。

「まさかお前が本当にあの『万物透過』だったのか。た、助けてくれ。もうこんなことしねえよ。だ、だから……」

彼が怯えているのも無理はない。彼らの攻撃は一発も当たらなかつたのだ。いや当たらなかつたと言うよりはすり抜けた。まるで幽霊が壁を無視して進むように。そして此処からは一方的に殴り続け今に至る。

「なんだなんだ。俺のこと知つてんじゃねえか。まあ、それが俺の能力名つて訳じゃないんだが。大丈夫だ、別に殺すなんてことしねえよ。だがここで俺にこんなことしたつてことは、他の奴にもしたつてことだよなあ」

「わ、分かつてる。も、もう一切こんなことしない」

「うんうん。物分かりが良い奴で良かつた。おかげで自宅で出来る簡単人柱を作る羽目にならなくて良かつたよ」

そう言って彼は急いでその場を後にする。ある喫茶店で待ち合わせをしているのだ。不良に絡まれた所為で5分ほど時間に遅れてしまつた。よつて彼は少し急ぎ足でその喫茶店へ向かつてゐる。

喫茶店と言つても大通りに面し多くの客で賑わつてゐるような所ではない。こんな裏路地を通らないと行けない様な寂れてしまつた店だ。客の出入りはほとんどない。こんな店を経営してゐる店主はと言つてこの店の利益で生計を建ててゐる訳ではなくあくまで趣味である。まあ彼がこんな店を田舎してゐた訳ではないのだが……

神命はいつもカウンターの一番右端の席に座る。そじが彼の専用席のようなものになつてゐる。

「店主、こつもの紅茶を頼む」

彼がそつと店主は慣れた手つきで紅茶を用意する。

「また紅茶か? たまにはコーヒーとか飲んでみたらどうだ。一応こにはコーヒー中心の店つてことになつてるんだが」

「別にいいだろ? ここに来る客なんて俺以外に両手の指で数えるほどしかいないんだし。つて言つてあんな泥水誰が飲めるか。何でみんな物存在してんんだ」

何かこんな言葉を聽いたらビーバーの第一位が襲い掛かつてぐちゃぐちやじや済みそうになつことになつたが、気にしないでおく。

「あ、今おじさん傷ついたやつたなあ。今すぐ謝れ。全世界150億人の「コーヒー愛飲者に今すぐ謝れ」

「おい、何か世界人口が物凄いことになつてるんだが」

紅茶をすすりながら神命は言つ。その態度に店主は呆れた様に咳く。

「つたぐ、俺はコーヒー店がやりたくてこの店を開いたんだ。なに何で俺はこんな餓鬼に紅茶を淹れて、その上コーヒーを馬鹿にされなくちゃならんのだ……」

「いいじゃないか。どうせ話相手なんか俺くらいしかいないんだじ。はあ」

「どうした？ 溜め息なんかついて」

「あんたつてさあ、『6』で数字についてどう思つ？』

「どうしたんだ、突然」

『6』 素因数分解すると  $2 \times 3$  であり 1, 2, 3, 6 の素数を掛けると出来る数字。その数字は自然界の中にも多く現れており、蜂の巣や亀の甲羅等の六角形、いわゆるハニカム構造と言う奴だ。六角形はその他色々なところに現われる。例を挙げると味噌汁などの汁の対流などだ。（暇があったら一度よく見てほしい。少し感動する。）また素数と『6』を使って円周率を表現できるなど兎に角とても有り触れた数字である。そして何より……

「地味だと思わないか？」

「確かに少し地味つて印象が無くも無いな

「無くも無いじやなくてあるんだよ。なんかさあ、音楽とかのラン  
キングで第六位とか言われてもピンと来ないと困つて。第三位とか  
第五位とかまでなら曲名覚えてると困つんだけど第六位となると一  
気にぼやける様なきがするんだよね。第七位だつて『あ、七位だか  
ら覚えよ』とかなるだろ?でも六位つて地味だろ。覚えてもらえな  
いんだよ」

「何? 6に何か恨みでもあるの? 何で6でそんなに悩んでるの? 僕  
に相談してくれてもいいんだぜ」

ほんの少しだが店主が心配そうな顔をつくる。

何故彼がこの『6』と書つ数字を嫌つてゐるかと言つと彼が学園都  
市の超能力者の第六位であるからだ。彼が本当に『6』と書つ数字  
を嫌つてゐるかと言つとそうではないのだが、第六位と言つ称号を  
与えられた所為で低レベルの能力者に舐められるのが彼にとつて非  
常に不快なのだ。また自分が戦つた相手に自分がレベル5だと言つ  
ても「誰だつけ?」と言われる始末である。

「いやまあ、相談する程のことでもないんだがな。まあ気にしない  
でくれ。そう言えば、この店に高校一年生くらいの女が来なかつた  
か?待ち合わせをしてるんだが

店主との会話ですつかり忘れていたが彼はここに待ち合わせで來て  
いたのだ。

「いや見てないな。そもそもこいらをつりつり高校生なんてスキル  
アウトかお前ぐらいのもんだろ

「そうか」と神命は呟き紅茶を一気に飲み干す。その後、店主の「彼女が何かか?」という問い合わせに対しては華麗にスルーし代金を置いて店を出る。

（さて、何処から探そうか。あいつの居そうな場所って何処だったつけ）

そう思いながら店に入る前に殴り飛ばした不良達がこちらを見て苦笑しているのを他所に路地を抜け学区を移動する。

ここの第七学区のとある通りである。

いつもなら人通りもありそれなりに賑わっている筈なのだが、今日はいつもとは違う。この通りには『いそべ銀行』と言う銀行があるのだが昼間にも関わらずシャツターが閉まっている。しかもそのシ

ヤツターにはつい先ほど突然起きた銀行内部から爆発により強引に人一人が通れるほどの穴が開いてしまっている。

「初春、現場に着きましたの。ですが犯人には逃げられてしまったみたいですね」

突然空中に姿を現した少女の腕には緑の腕章が付けられている。

ジャッジメント  
風紀委員だ。風紀委員とは学生（レベルは問わない）によって形成され、学園都市の治安維持にあたる組織だ。風紀委員になるには「九枚の契約書にサイン」し、「十三種の適正試験」と「4ヶ月に及ぶ研修」を突破しなければならない。

そして今回この第七学区で起きた能力者による強盗事件を解決すべく彼女は駆けつけて来たのだ。

「初春、状況はどうなっていますの？」

「ちょっと待つてください、白井さん。今、情報が出ました。犯人は3人、その内の一人はレベル3相当の発火能力者バイロキネシストです。現在は銀行のシャツターを破壊して外部へ逃走、南東方向へ向かっている様です」

「分かりました。これからその犯人達を追いかけてサポートして下さいですの」

彼女に初春と呼ばれているこの少女、実は凄腕ハッカーで守護神ゴルキーパーと呼ばれそこらの監視カメラの映像を盗み見るのは超楽勝だったりする。

「白井さん、先ずはそこから通り沿いに南下して三つ田の角を右へ曲がって下下さい。そうしたひ……」

神命 選は第七学区に来ていた。

（おーおー、これだけ探してんのに居ないぞあいつ。携帯も通じないし拉致られでもしたのか）

ここに来るでに彼は結構な距離を歩いている。正直疲れているし面倒くさいと思つていいのだが。

（授業の時間もとっくに終わっているし、忘れて寮にでも帰つたのか？もういいや、さうに違いない。帰るか）

そう思つて通りを歩いていると、前からなんか知らないけどすごい形相で走つてくる3人組がいる。彼らの顔にはバンダナが巻かれており、手にはナイフを持っている者もあり、恐らく現金が入つているであろう大きな鞄を持った者もいる。

（ああ、ええとあれか。銀行強盗的な奴か。つたく不良に絡まる

わ強盗が現われるわ、今日は凶口か。それもこれも俺が第六位のレツテルを貼られているからだ……）

止めようか止めまいか迷つている彼に走りながら強盗の一人が叫んでくる。

因みに彼は考え方をしているとあまり周りの音や様子が入つて来なくなる。だが……

「てめえ邪魔だ、退けよ屑が。引っ込んでろ」

何故か知らないけどこの言葉だけははつきりと聞こえた、何故か知らないけど。要するに頭にカチンと来たのだ。

「てめえ聞こえなかつたのか。早く退けつて言つてん」

その言葉を言い切る前に彼の体は3メートル程後ろへ吹っ飛んだ。神命が一瞬にして彼の前に移動し思いつきり腹部を殴つたのだ。それでも3メートルは飛ぶことは無いと思うが。

「く、くそ。いつたい何が……」

もう一人の男が叫び直後ナイフを振り回していく。しかし神命は動じない。動じないと言つより動かない。ただ……

「拒絶」

と呴くだけ。

がやはり男の体は神命の体をすり抜け体勢が崩れる。そこへすかさず蹴りを入れ気絶させる。気絶するような蹴りでは無いはずなのだが

が。

「お、お前はまさかどれだけ殴ろうとしても、拳銃で撃とうとして  
もその体を通り抜ける。故に現実味のある幽靈『万物透過リアリティゴースト』と呼ばれるあの……」

その言葉に神命は少し感動を覚える。そして思ひ、ああこいつだけ  
は生かしてやつてもいいか……

そう思ひ前にもう一方が余計な言葉を挟む。

「く、くわ。こんなとこりで終わるってのか。こんな、この程度の  
小説で、この程度の奴に……いや俺はここで止まる訳にはいかない。  
俺は原作で……数多の小説で……様々な奴の解説役を務めてきたん  
だ。こんなとこりで俺は立ち止まる訳にはいかないんだああああ  
ああ」

よく分からぬ事を男が叫んだ。

（ああ駄目だこいつ、俺だけでなく作者まで侮辱した。こりやあ…  
…）

男が手を前に掲げると手のひらに火の球が発生した。それを男は選  
に向かって投げつけてくる。

狙いは正確だった。

しかし彼はこいつ駄目だけ。

「炎を選択、その軌道を操作」

すると彼の体に近づくにつれ横へそれでいく。そして彼の横を通り過ぎたと思ったら火の玉は彼を中心として半円を描きシターンして男の元へ向かっていく。

「な、何い！」

そう叫ぶ強盗の腹部に投げる前より明らかに加速した火の玉が直撃し後ろへ吹っ飛ぶ。

「『万物透過』<sup>ジアリティゴースト</sup>がこんな力使うとは聞いてないぞ……」

それだけ呟くとその男の意識も遠のいていく。

「はあ、もう終わりかよ。どうしようこいつら、何か一方的すぎて俺が悪者みたいになってる気がする」

そう言つと神命は男達の体を近くの路地に投げ込む。

（現金はどうしようか。これくらいは風紀委員の支部にでも持つて行つた方がいいな）

そう思つて彼は鞄（何か黒地にP U Aと書かれている）を拾い上げると足を近くの風紀委員の支部へと向ける。

「（つて言つたさつきの強盗俺の事知つていたのに襲つて來たな。やつぱり第六位と言つレッテルが……上位陣でも潰していつた方が手つ取り早く……）

等とぼやいでいると、後ろの路地から一人の少女が飛び出してきた。

「ここでもう一度だけ言つておこづ、彼は考え方をしているとあまり周りの音や様子が入つて来なくなる。例えば、このくらい考え込んでいる」と。

「それで初春、犯人が持つてゐる鞄は黒地にPU Aと書かれているのですね。分かりました……遭遇してしまいましたわ。これら捕縛します。至急応援を」

そう無線に叫ぶと彼女は腕章を付けている腕を前に突き出し腕章を見やすくもう一方の腕で吊り上げると

「ジャッジメントですの、大人しくお繩に……って聞いていますの？」

当然神命は反応しない。彼は今どうやって自分の名を広めて行こうか考えているのだ。反応している暇などない。

その姿を見た彼女は素早く走り彼に近づくと彼の背中に触れる。その瞬間立っていた筈の彼は地面と水平に空中に現われ地面に叩き付けられる。

「痛つてえ、何だ、また不良か？」

「ジャッジメントですの、大人しくお繩について下さいですの」

「お前風紀委員のくせに一般人に攻撃していいと思ってんのか。そもそも俺がなにしたってんだ。こりやあ氣絶だけじゃ割りに合わないぞ」

「あ、よやくお気つきになりましたの？強盗のへせに鈍いですわね。戦う気は満々みたいですねけど」

「お前そんなこと言つていいのか？俺本気でやりますよ~」

そつと神命は彼女に向かつて走り出し持つていた鞄で叩きつけよつとするが、一瞬で彼女の姿が消えた。

「やうか。お前、空間移動能力者だったのか」

「今頃、お気つきになりましたの？」

「ああまあ。なら」ちもそれに対応するだけだから

「只のレベル3の発火能力者に相手できるほど私は甘くありませんのよ」

「何言つてんだ？じゃあ、そろそろ本気でも出すか」

すると彼は呟く。

「空間移動能力者を選択、空間に固定。

空間移動によって移動した物体を拒絶、身体を透過」

その言葉を聞くと彼女はこれまでのと感じ素早く身構える。

「な、何ですか？あなた発火能力者ははずではなかつたのですか？」

その言葉に神命は反応せず一直線に走つて来る。

彼女はスカートの中に隠し持つていた金属矢を数本手に取り

「大人しくしなければこの金属矢を体内に直接テレポートさせるだけですの」

彼女の手にあった金属矢は消え走つて来る神命の体内に移動した筈だった。しかし彼女は彼の足元にカンと音を立て金属矢が落ちているのに気がついた。

（な、何ですか？確かに演算は合つていましたの。でも彼の体には傷一つないと言つ事は……彼の体をすり抜けた？となるとこれは少々厄介ですの）

そう思つて走つて来る彼の攻撃を避けようとテレポートしようとしましたが、

（テレポートが出来ませんの！？ま、まずい。このままでは……）

彼女の予想は的中した。拳が彼女の腹部に突き刺さり痛みが走る。しかし今回はさつきの強盗達とは違い体が吹つ飛ぶなんてことはなく、ただみぞおちにパンチが入つただけだった。それでも彼女を気絶させるには十分だったのかドサッと地面へ倒れこむ。

そこまで神命は我に返る。

「はあ、やつちやつたよ……こくじこくちから仕掛けた訳じゃない  
とはいえ、これはなあ……」

（どうじよつ、支部へ行くのに荷物が増えちやつたなあ）

などと考えていると、

「黒子！！」

叫び声がした。

「あんた、私の後輩に何してくれてんのよ！！」

そう言つてもう一人の少女が神命の方へ向かつてくる。

## 第一話 待ち合わせと唐突な遭遇（後書き）

選と強盗のやり取りで少し遊びすぎた。後悔はしていない。

## 第三話 電撃姫との対決

「あんた、私の後輩に何してくれてんのよ」

神命 選は、不意に後ろから声を掛けられた。

常盤台中学の制服を着たその少女。神命は彼女の名前を知っている。  
学園都市の7人のレベル5の第三位 超電磁砲の御坂美琴である。

「あんた一体何したのか分かってるんでしょうね？」

（何したって言われてもなあ。何か襲つて來たので返り討ちにしただけなんんですけど……なんてどうせ言つても信じないだらうな）

はあと大きな溜め息をつく神命。

「あんた、溜め息なんかついてないで何か答えなさいよ」

（つて言うかよく考えたら寧ろこの状況つて都合が良いんじゃないか？ここで第三位を倒したら……いやでもそんなことしたら今度こそ完璧に悪役だな）

神命はもう一度大きな溜め息をつく。

「何だ、こいつ第三位の知り合いなのか？」

「後輩だつて言つてゐるでしょ。それにしてもあんた、私がレベル5だつて知つてゐるのに随分と余裕かましてゐるのね」

「俺にとつてお前はさほじ脅威ではないからな

「へえ、私じゃ相手にもならないと?..」

「せうこうになるとみるな」

「じゃあ戦う気があるってことで相違ないのよね

「戦つてもあんまりメリットはなそつだけど

案外挑発に乗りやすいんだなあと思ひながらだるさうに神命は喋る。

「何だ、掛かつて来ないのか?..」

「言われなくとも!..」

その直後、御坂がビリビリと帶電したかと思つと勢いよく放たれた電撃の槍が神命に掛けて襲い掛かる。

しかし神命はとさうと相変わらずダルさうに頭を?..き立つてゐる。ただ「電撃を拒絶」と呟くだけで。

だがそれだけで異変は起つてゐる。電撃は彼に直撃せず、いや直撃はしたのだがそこに何もなかつたかの様に彼の後ろ通り抜ける。

その光景に御坂は一瞬啞然としたが再度電撃で複数の槍を形成し飛ばした。

そして彼に電撃の槍到達しようとした瞬間、彼は何かを呟く。直後、彼の体が大きくぶれ電撃の槍全ては外れていた。見るとさつき立っていた位置から10mほど離れた位置に彼は立っている。

（何なのあいつの能力、偏光能力か空間移動と思つたけどぶれる寸前に少し足を動かしていたからどちらかと言つと肉体強化っぽいわね。少し様子を見てじつくりと見極めてやる）  
トロシックスター

御坂は今度は彼に電撃を浴びせようとするが、それを遮る様に選がまた呟く。

「空気を選択、空間に固定。光を拒絶、身体を透過」

すると今度は彼の体の色が次第に薄れ完全に見えなくなってしまつた。まるで氣体が霧散するよつて。

（消えた！？見えなくなつたつてことはやつぱり透視能力クリアボイアンスか偏光能力みたいな視覚か光学操作系能力者の可能性が高いわね。これならさつきの現象も説明がつく！）

「ちよこまかと逃げ回つてじゃ勝負にならないでしょ。正々堂々と勝負したらどうなの。それともわざして逃げ回るじとが、さつきのあんたの余裕の源だつたの？」

すると頭上から声が聞こえてくる。

「いや別に逃げ回つてた訳じゃないんだが。少しは攻撃に転じて欲しいのか？」

神命は御坂の頭上でうつ伏せの様な状態で浮いていた。

「あなたの能力は相手の五感を狂わせて幻覚・幻聴を起こさせ自分の位置を誤認識させる能力。これでさつきあなたの体がぶれた様に見えたのも、霧散するよう消えたのも、今あなたが私の頭上に浮いているのも説明がつく。ならば私にだって対策はある。あなたが攻撃に転じようとしても、あなたの能力なら高が知れてるわ」

自信有り気に答える御坂だが、

「残念ながらそうじやないんだ。まあそう考えるのが普通だけど。因みにその対策つて一体どんな奴なんだ？」

「知つての通り私は発電能力者エレクトロマスターのレベル5。10億ボルトの出力を誇る電撃をはじめ強力な電磁波によるジャミングや電波傍受、磁力操作によって砂鉄を操ることが出来る。だから電磁波を使ってレーダーのようにして死角からの攻撃にも対応できる。あなたの攻撃は私には当たらないのよ」

「ああそういう使い方もあるのか、流石に発電能力者は応用性が高いな。まあ、こっちもそれに対応するだけなんだが。電磁波を拒絶」

その直後、彼女の視界からだけでなく感知していた電磁波ですら選の姿は消えてしまった。

（そんな……あいつこんなこと今まで対応できるの。一体どんな能力なのよ）

そんな彼女の思考を他所に再び地面の上に現わされた神命は喋り続け

る。

「んじゃ、そろそろ攻撃しますか。若干逃げ回るのも飽きてきたしな」

そう言つと彼は腕を空に向けて掲げる。

「光を選択、手の平の一点に圧縮」

すると彼の手のひらの先に黒い物体が現われた。黒と言つても色としての黒ではなく漆黒、光沢など全くなくただただ黒い。

「超電磁砲を撃つなら今だぞ。今なら隙だらけで当たるかもしれないし、出し惜しみするくらいなら撃つてしまつた方がいいんじゃないか」

彼の言葉に美琴は驚いていた。これまで何人の能力者と相手をしきたが、自ら超電磁砲を催促してきた相手などいなかつたからだ。

「どうした、撃たないのか? こつちは後十数秒で完成するんだが」

十数秒で完成すると彼は言つた。それが自分に残された猶予だと彼女は悟つた。しかし、たとえ超電磁砲を撃つたところで彼に当たるのか? 恐らくそれは”否”だ。彼の居場所すら正しいのかどうか分からぬし、たとえ見えている場所にいたとしてもすり抜けてしまうだろつ。

「ようやく完成したな。これ作るのに時間掛かるからあまり使いたくないんだよな」

そつ言いながら彼は掲げていた手を前は動かし黒い物体は球体から刀のような形へ姿を変えていく。

「どうだ？日光で作つた剣だ。見た目は黒くてあれだがそれは目に剣からの視覚情報が入つて来ないだけで中は、レーザーで構成されているから切れ味は抜群だぞ」

そつ言つて彼はそれを地面に突き刺すと地面のアスファルトはいと簡単に溶けていく。こんなものに触れたらいくら第三位の超能力者と言えどひとたまりもない。

「正直、俺より序列が高いからもう少しやつてくれると思つたけど、やはり相性的には最悪だからこんなものかな。どうする？降参するか？」

「わ、分かつたわよ。降参すればいいんでしょう」

「分かればいいんだ」

そう言つて彼は黒い剣を蒸発させる。そこへタイミング良く氣絶していた白井 黒子が目を覚ます。

「あれ、何でお姉さまがこんなところに？確かに私は連續発火強盗を追いかけて……つてそこにいる殿方が3人の強盗の一人ですの！」

「あんた、強盗だったの？」

御坂が神命に疑いの目を向ける。

「違う違う。俺はただ走ってきた強盗3人を返り討ちにして、現金の入った鞄を風紀委員の支部に届けようとしたら、そいつが俺を強盗と間違えて襲い掛かってきたんだよ。まあ、そいつも返り討ちにしたけど……ほら、そこの路地に3人捨ててあるから確認してみろ」「

白井が確認しに行くと確かに男が3人氣絶して倒れており神命の無実は証明され、男達は警備員達に補導されていった。

「黒子……ろくに確認もしないで攻撃を仕掛けたの？」

「だつて初春に聞いていた通りの特徴の鞄を持つていましたし、地味な外見と言つのも一致していたんですけど」

「おいつこいつ今さら」と地味つて言つたよな地味つて

神命にとつてこの言葉が今日最大の傷になつたことを彼女が知る由もなかつた。

「そういうえば、あんた私より序列が低いってことはレベル5なの？」

「ああ、第六位　　『フリーダムセレクト』の神命 選だ」

「第六位がこんなに強いなんて聞いたことないわ」

「序列が高いほど強くなる訳じゃないからな。あくまで能力研究の応用が生み出す利益が基準だから、ほらお前だつて『妹達』の件で……いやこれは流石に言わないほうが多いな。まあそういう訳だ」

「って言つた、結局あんたつて一体どんな能力なの？」

「それは私も聞きたいですわ。私のレポートも無効化されてしましましたし、正直検討がつきませんわ」

「詳しいことは言えないが俺の能力はは主に二つに分けられるんだ。先ずは『拒絶』。これは自分が触れたくないと思ったものをすり抜けることが出来る。使うには少し条件があるがすり抜けたい対象の形状や大きさ、性質などさえ把握していれば使うことができる。例えば無色の液体でも別に塩酸なのか硫酸なのかそれともただの水なのかは把握してなくともあの液体つてだけですり抜けられる。御坂の電撃を避けたのはこれだな」

「じゃあ私の金属矢を避けた原理もこれですわね」

「そうだ」

「ですが、これでは私のレポートを無効化したことについては説明できませんわね」

「それは二つ目の『選択』で説明できる。これは結構話すと長くなるんだが、簡単に言うと遠くにある物を近くに引き寄せたり、普段は触ることができない物触れることができたり、例えば気体とか光とかだな。後は物体の位置の固定だな、これは固体だけでなく気体にも使うことができる。対象物の座標を固定させるんだ。自分の足元にある空気を固定して乗ることが出来たり、空間移動能力者を今いる座標に固定して能力で移動できなくしたりできる」

「それで中に浮いたり黒子の能力を無効化したり出来た訳ね」

「主な説明はこんな所かな。はあ今日は結構疲れたな、そろそろ帰るとするか」

「またお会い出来たら良いですね」

「いやもう、こきなり襲われるのはお断りだけだな」

「そういつと彼は一人の前から急ぐよう立ち去ってしまった。

「それにしてもお姉さまが負けてしまつなんて、の方随分とお強いですね」

「べ、別に超電磁砲も撃たなかつたし、手加減してあげたのよ」

「まあ、お姉さまが御見栄を張るなんて珍しい」とです」と

「うるさいわね、うつむだつてプライドつてものがあるのよ、プライドつてものが」

そんな会話を交わしながら一人は人ごみの中へ消えていった。

## 第三話 電撃姫との対決（後書き）

三話目にしてようやく能力名が出来た。  
ぐだぐだにも程がある……

後もつと文章力を上げたい。

神命の能力はこれだけではありません

七年前、此処は学園都市のとある研究所のある一室。

薄暗くじめじめとしたその部屋には多くの子供達がいた。彼らの顔からは生氣というものがほとんどと言つてもいい程感じられない。彼らはある実験の被験者だった。しかし彼らは望んで実験に参加している訳ではない。彼らは『置き去り（チャイルドエラー）』だった。

『置き去り（チャイルドエラー）』 入学した生徒が都市内に住居を持つ事となる学園都市の制度を利用して、入学費のみ払つて子供を寮に入れその後に行方を眩ます行為、またはその子供の事を指す。

ここにはよくあることだった。

定期的に呼び出される彼らが次にこの部屋に戻つてくる時、その人数は明らかに変化している。しかし、それでもこの部屋から子供が居なくなることはない、絶対に。

この部屋には防音機能が施されているのか外部の音が入つてくることも、内部の音が漏れることもない。そんな中でも何か悲鳴のような声が聞こえるような気がする、聞こえるはずがないのに。

此処には死が溢れている。呼び出され部屋を出て通路を歩いている時、大きな袋を……そう丁度此処にいる子供達くらいの人間が入れそうなくらいの大きな袋が運ばれているのをよく見かける。その袋にはよく見ると赤いシミが付着していたり、生臭いような臭いがある。中を確認する必要はない。どうせ死が詰まっているだけだ。

そんな場所で生きている彼らの瞳の中には希望の文字はなかつた。

「私達……此処で死んで行くの？」

茶色の長い髪を持った、いつも物静かな少女が言った。やはりその少女の瞳にも輝きはなく濡れている。

それに対し少年の眼にはやる気や気迫の様なものは感じられない……しかし何処となく野望に満ち、少なくとも絶望に埋め尽くされている様には見えない。そんな瞳で彼は彼女を見返す。

「もう二度と外に出られないのかな？」

出ることは出来ない。

そんなことは有り得ない。

いずれ死ぬ、その時が来たら死ぬのだ。

少年は答えた。

「やうだうな。このままだとここにいる全員殺されや」

少女は彼の瞳を見つめながらもつ一度少年に呴いた。

「……怖くないの？」

「…………」

少年は少し考え込むよつて間を空けてから言った。

「そりや怖いや。だけどそつ想つても何も始まらない。こじで死にたくなれば、何か行動を起こすしかない」

「死ななくとも済む方法があるの？」

少女は呟く。

「分からぬ。だがこんな所で死にたくはない、死んでたまるか。俺はこじを脱出する。脱出して……それから奴らを、こじの町を出し抜く」

少年は自分の手を見つめてそつ言つた。

その言葉に少女は驚き顎を垂れていた液体を拭うと、ほんの少し希望を取り戻したかのようにその瞳を見開き少年に問つ。

「もし……もしそんな時が来たら、私も……連れて行つてくれる？」

そんな少女の問つに少年は「もちろんだ」と、そつ答えた。

「だから、そんなに泣くんじゃねえ。後これからはもう死ぬとかそうこじとを言つのは無しだ。言つただろ？死ぬつもりはないって。だからお前も生きる努力をしろ。そつすればこじから出しちゃる、絶対にだ」

「うん、分かつた」

少女は到底元気などとは言えないがそれでも希望には満ちた声で返事を返した。

七年前、ある少年と少女が交わした遠い昔の約束。

そんな約束を交わしたわずか数日後、この研究所は突如としてその姿を消した。

学園都市第六位の超能力者である神命 選は、第十八学区にある彼

の学生寮に帰つてきた。

彼も一応は学園都市からは学生と言つ扱いを受けており、書類上だけだがこの第十八学区存在する長点上機学園といつ学校に在籍していることになつていて。

長点上機学園とは能力開発において学園都市ナンバーワンを誇る高校であり、学園都市の「五本指」の一つに数えられる超エリート校だ。またこの学校の学生寮は学生寮とは思えないほど広さと高級感を兼ね備えセキュリティー等も万全である。

神命はそんな学生寮の3階に位置する自分の部屋の前にやつて来た。そして彼は鍵を取り出すこともなく自信の能力を使い部屋に入る。しかし、自分の他にも誰かがこの部屋にいることに気がついた。

彼はその能力故に開ける為の用途しか持たない鍵は持ち歩かない。正直このドアもコンクリートで塗り固めてしまつた方がより安全なんじやないか、そもそもドアなんて必要ないんじやないか等と考えてしまつほどだ。よつて彼はこの部屋の鍵をある少女に渡している。（強引に奪われたと言つても過言ではない）

そして案の定、彼の予想は的中する。

「選、遅かつたじやない」

部屋の奥から少女の声が聞こえてきた。

彼女の名前は月極つきぎめ、高嶺たかね、長点上機学園と同じく五本指に数えられる霧ヶ丘女学院に通つてゐる。

「何処へ行つてたのよ？探したのよ」

「それせいかの台詞だ。いろいろな連絡の一いつでも入れるだろ普通」

「だつて携帯に繋がらなかつたんだもん」

「つて言つからくら鍵を渡していくからつ何度も入つて来られるとなあ。お前は霧ヶ丘女学院の生徒だ。いくら俺が許可してるからつて少しあ遠慮したらどうなんだ？」

「いいじゃん別よ。此処のまつが広くて過ぐしやすいだから」

彼女とは一年ほど前からの付き合いだ。（断じて付き合つてると言つ意味ではない）七年ほど前とある研究所で出会い五年ほど離別していただが一年前に再開したのだった。彼女に鍵を預けっぱなしであるためこの部屋には入り放題で半自宅状態である。また彼女が在籍する霧ヶ丘女学院は長点上機学園と同じく第十八学区に存在するためここからでも余裕で通えたりする。

「まあいいけど。じゃあ俺疲れてるから寝るわ、おやすみ。帰るんだつたら帰るで戻りはきりんとしてこけよ」

そう言つて神命はベッドに横たわる。

「ちよつと、女のお子が部屋こいつの態度は何？何かこいつもつと氣を使いなさいよ」

しかしそんな言葉は気にせず夢の世界に旅立つ神命。

仕方なく彼女は彼の布団を綺麗に掛け直しふつぶつ呟きながらベッドに腰掛けそのまま横になってしまった。

#### 第四話 追憶と甦る約束（後書き）

今回はヒロイン登場回でした。  
彼女の能力は後ほど紹介します。

## 第五話 野望と計画

神命 選が時計を見たとき既に針は8時を回っていた。

ここは長点上機学園の学生寮。昨日、彼は学園都市中を歩き回り、一度も不良に絡まれてそれを返り討ちにした拳銃、何故か襲つてきた空間移動能力者と学園都市第三位の少女一人を相手取つて、またもこれを返り討ちにしてかなり疲労した後よつやくこの学生寮にたどり着いたのだ。

何故かその時誰かいたような気がするが帰つてからすぐに寝てしまつたためよく覚えていない。いたとしても今は8時20分、普通ならば学校はそろそろホームルームを始める頃であるから既に彼女はこの部屋にはいないだろう。

しかし今、彼はこんな事を気にかけている暇はない。これから彼は彼自身の名前を上げる為ある計画を実行に移さなければならぬからだ。

現在、彼はある目的の為に学園都市暗部に関する様々な情報を必要としており、まずはその情報の収集から始めようと彼は考えている。

そしてその方法なのだが、学園都市には「書庫」<sup>パンク</sup>と呼ばれる総合データベースが存在し、その内容にはこの都市の学生ほぼ全ての個人情報や暗部組織などに関する様々な情報が記録されてある。しかし、神命にはその情報を見る権限や、ハッキングすることが出来る能力

はない。ならば何処から情報を入手するか。学園都市には、表向きは全うに運営されている様に見えて、裏では公にすることの出来ないような非人道的な実験を行うと言う実験施設が数多く存在する。そしてそこには書庫にすら存在しない裏の情報が存在する。

つまりどうやって情報を入手するかと言つと、そういうった研究所に片つ端から侵入しそこにある情報を頂くのである。また彼の能力は隠密行動に特化しており、その計画を実行に移すには十分すぎると言つても過言ではない。

後はそこらで不良に襲われている一般人を助けたりや、能力者による無能力者狩りを妨害するなどして地道にポイントを稼ぐとしよう。

そんな訳で神命は、外出する準備を始める。服は昨日着たまま寝てしまつて今もそれを着たままだ。やろうと思えば能力で身体や服についた汚れを拒絶できそれでお仕舞いだが、気分的にそれはよくない為着替えを始める。着替え終わると彼は自身の能力の弱点を補うための道具を二つ用意する。

彼の能力名は自由選択フリーダムセレクトであり指定したものをすり抜けたり、引き寄せ、一定範囲内でその物体を操るなどがあるが、やはり欠点と言うものがある。

まず一つ目に遠距離の攻撃が出来ないことだ。彼は遠くにある物体を引き寄せることが出来るが、その範囲は彼を中心として半径が約32m程の球の内部である。だが、引き寄せた物体を操ることが出来る範囲は彼を中心としてわずか7m程にまでに限定されてしまう。その為いくら大量の水を操ろうが、周りの光を圧縮してそれを放とうがその範囲を抜けると能力の効力を失われ攻撃力は激減してしまう。そのため彼は、いつもハンドガンを持ち歩いている。しかし、

ほとんど使わずに済んでしまつし、弾丸も消耗品である為使用する場面は滅多にない。

一つ手に挙げられるのが、呼吸である。彼は指定したあらゆるものをする抜けることが出来るが、当然のことながらその中に空気はない。その為、分厚い壁を抜けるときや地中、水中での呼吸は不可能となる。よつて彼はいつも酸素ボンベを所持している。酸素ボンベと言つてもよくダイバーが背中に背負つているような巨大なものではなく、ペットボトル大のものに液体酸素が入つており呼吸する程度に気体へ戻して使うものだ。これ一本で、約30分の呼吸が可能であり普段彼はこれを一本持ち歩く。

そんな物の準備も済ませた神命は、早速寮を出て町へ繰り出す。途中でコンビニに立ち寄り今日の昼食を手に入れると、それを食べる為の場所を探す。

数分後、なかなかいい場所が見つからず歩き回つてみると幸か不幸か路地裏から悲鳴が聞こえてきた。恐らく不良が一般人相手に力ツアゲでもしているのだろう。

（おいおい、いくら何でも不良多すぎじゃね？）こんなに不良ばかり出てたら読者に飽きられるぞ……）

そんな神命の心の声も知らず、6人の不良のものと思われる声が聞こえてくる。

（仕方ない、助けに行くか……）

そう思つて彼は面倒くさそうに路地へ足を向ける。

「よし、財布も手に入れたし何かお財布ケータイなんかも手に入っちゃったよ。最近の携帯って便利だよなあ。番号さえ聞き出しちゃえば限度額なんか知つたこつちゃねえしな」

そう言わながら路地に座り込んでいる学生はそこらの建物の外に設置されているパイプに手を縛り付けられている。そこへまあタイミングよく神命が現われる訳だ。

「おいおい6人で一人を襲うとか近頃の不良はめつきり臆病になつたもんだなあ」

「あ？なんだてめえ、文句あんのか。お前一人で俺らに敵うつてのグルボア！？」

「あ～はいはい、そんのはもう聞き飽きたから簡単に済ませちゃいますので適当に掛かつて来てください」

やる気の全くない声で適当にあしらひ神命。

数分後6人全員を倒しきり、まあこんなもんかと思つて不良がもつていた財布や携帯などを縛られていた学生に返す。そして学生がお礼を言つて帰つて行き自分も帰ろうとしたその時だった。

「ふつ。やはり雑魚どもではこの程度が限界か」

暗闇の中から新たな気配。ザリツザリツといつ足音。そして近づいてくるこの町が生み出したモンスター。もう見るからにお前外国人用兵部隊として3ヶ国以上渡り歩いてきただろと突っ込みたくなるような巨漢むきむき人間兵器が、その姿を露にする。

「俺は内臓潰しの横須賀。あいつらを可愛がつてくれたようだな」

とこれまたそんなに偉そつならこんなとこひでカツアゲなんかやつてないで、俺の知らないどこかで世界を根底から覆すような計画でも練つていなさいよと突つ込みたくなる神命。

だがしかし、まずい所へ首を突つ込んでしまつたようだな。ここは後悔の通じない場所。対能力者のエキスペート、この内臓潰しの横須賀サマの前に立つちました以上、貴様はここで」

「あの～すいません。モツ鍋の何さんですって？」

「おーい、ちょっと待て。人の話は最後まで聞けつて。って言つが全然違うし！俺サマの名前は内臓潰しの横須賀だつて言つてるじゃん。だから、あの、何だ。どこまで話したつけ？ そうそう、こほん。内臓潰しの横須賀サマの前に立つちました以上、貴様はここでブギユルワ！？」

突然神命の周辺か発生した空気の塊がモツ鍋ナント力横須賀さんの身体に直撃し壁に叩きつけられる。

「……ちよ、げぶつ。何でいきなり？人の話は最後まで聞けつて言

つてゐるじゅん。なのに向でそう途中で邪魔をしてビブルチー? 「

モツ鍋さんが何か言つてゐるけどそんなことは氣にしないで神命は馬乗りについて追撃を入れていく。それはもう、がすがすと……。

「ちよ、待つて、グボオ……ちょっとだけでも良いから話を聞いて、ひでふつ……あ、謝るから、ふべりつ……」

「ああ、すいません。ちよっとこりこりしてひつこやつすがひやこました」

そう彼が言つたときモツ鍋さんはぴくぴくと小刻みに震えているだけだった。

よじつと一言だけ言つて満足した彼が立ち去つとした瞬間唐突に後ろから大きな声が響いた。

「根性つてモンが足りてねえな、兄ちゃん。そんなんじゃ誰も満足しねえぞ」

## 第五話 野望と計画（後書き）

今回は（今回も？）少し短め。

最近試験があつたりして忙しいので仕方ないんです。

しかも来週はまた色々と都合で4日間くらい投稿出来ない……

最後に誰が出てきたかは言つまらないね！

「根性つてモソンが足りてねえな、兄ちゃん。そんなんじゃ誰も満足しねえだ」

唐突に響く大きな声。

そっちを見ると、路地の出入り口辺りに「王立ち」する一つの影。

その影を見るなり神命 選は今朝用意していた拳銃をおもむろに取り出し躊躇つことなくその引き金を引く。

その銃声は正確に相手の心臓を捉えそしてそれに命中した。ばつたり倒れる謎の影。

何故躊躇いもなく彼が引き金を引いたのか、それは彼がその影の正体を知っているからだ。

「ふるわアアああああああああああああああああああああ

むくうと起き上がるその影。此処までの所要時間、わずか三秒。ほとんど起き上がりこぼし状態の人影はさきほど明らかに心臓に一発もひたはずだが、まるで徹夜明けのおかしなテンションみたいな足取りでズンズンこちらに近づいてくると、

「何の前触れもなく一発くれるとは、やつぱ根性が足りてねえな。あるいは我慢か？我慢が足りねえのか？総合的に判断するに、さてはお前、近頃のキレやすい子供のような類だろ？！…マスクミから好き勝手言われるような立場になつて哀しいと思つたことはねえのか！？」

しかしそんな言葉なんかお構いなしに一発ほどの銃声がこだまするが、もはや人影はビクンビクンと震えるだけで倒れはしない。

「やっぱ死なないんだな」

「根性だよ、根性」

「いや別に聞いてないんだけど」

「強いて挙げれば学園都市の超能力者の人、七人の内の七番目、ナンバー・セブンの削板さくいた軍霸ぐんぱという事もある訳だが、そんなのは些細な事だ。…………今ここで論じるべきは、このオレの中には怒涛の如く煮えたぎる根性が満ち溢れているという事だーっ！」

両手を大きく広げ、背中を弓のように反らし、天に向かつて吠えるように宣言する削板もしくは謎の根性熱血漢。どういう理論か知らないが、彼の背後がドバーン！…と爆発して赤青黄色のカラフルな煙がもくもく出てくる。

それを呆然として眺めている神命だったが、ふと我に返つて首を振る。

「あのや、そこまで大々的に宣言したのはいいんだけど、何で今更出てきた？」

「それはお前のような奴ががこんな路地裏で弱い者いじめをしているからだろうが……」

その言葉を聴いて後ろで倒れていたはずのモツ鍋の横須賀さんがいつの間にか目を覚ましていた。

「あれ？ 何で俺弱い者扱いされてんの？ そういうへばそここの第七位……」  
「この前はよくもやつてくれたな……」

知らない内に起き上がりっていたモツ鍋さんが削板の言葉で相当傷付いていたのだが当の本人はそのことを全く自覚していない。

「何だ第七位、モツ鍋さんの知り合いなのか？」

「いや、全く覚えにないな。どこかであつたことがあるのか？」

「いやつ、大分前盛大に殴り飛ばしてくれたじゃねえか。って言つ  
かお前またモツ鍋つて言そげぶつ」

言い切る前にまたも神命は拳を擧げる。全く、最初に出てきたあの  
都市型モンスター横須賀さんは一体何処へいつてしまつたのだろう  
か。実はこの横須賀さん、三ヶ月程前の3月15日に削板にぼこぼ  
こにされている。

「おいお前、この削板軍霸の前でまたも暴力を続けるのなら容赦はせんぞ」

「いや明らかにこいつの方が悪人面だよね。どう見てもこっちが暴  
力振るいそうだよね」

「しかし実際、殴っているのはお前の方じゃねえか」

「まあそりなんだけど、一々説明するのも面倒だしもつ俺帰つてい  
いか?俺より下位の超能力者と戦つても俺には何の利益もないんだ  
けど」

「何?お前、超能力者か」

「まあな。俺は第六位の神命 選だ」

「第六位か、こんな根性の無さそうな男が俺より上とはな。よし俺  
がお前の根性を叩き直してやる!」

「根性が無いは余計だ。掛かつて来るなら早くしてくれ。こっちは  
文字通り朝飯前なんだ」

「なら早速始めるとするか

うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
びを上げる削板。そしてこれまで彼の背後がドバーン!…!と爆発し  
煙を上げる。

「では行くぞ、すごいパーーンチ」

そう叫んだ直後彼らの間には15m程も距離が空いていたはずなの  
だが、謎の衝撃波が念動力のようなものが飛んできて神命は3m程  
吹っ飛ばされる。

「痛え」

「んつふつふーん。これぞ学園都市第七位の真骨頂。どういづ理屈  
弾<sup>ツシュー</sup>とはこのことだアア ああああああああああああああああ  
ああああーー」「かは知らんが何かしらの余波を遠距離まで飛ばす必殺技。『念動砲<sup>アタッククラ</sup>』

ドバーンと明かされる新事実。だが一番大事な所が抜け落ちている。どうやつてこの現象を起こしたかだ。以前彼はあえて不安定な念動力の壁を作り、それを殴ることで壊して遠距離まで衝撃を飛ばす必殺技だと説明していたのだがその時助けた学生　原谷矢文にそれは不可能だと否定されていたためもう適当にしか説明しなくなっている。

「もう色々と突っ込みたくなるような所満載なんだが。まあ少しへ  
どんな技か分かった。それじゃあ早々にやるとしますか」

神命は一呼吸置いて呴く。

「削板軍霸から発する力及び地面、周辺建造物を拒絶、身体を透過。電子を選択、自身に帶電」

そう言うと彼は地面に手を伸ばし地中から電気配線のような物を引つ張り出す。そして彼はその中から最も電圧の高そうなものを選びそれを引き千切り中の導線に触れる。するとビリビリと音を立て配線から漏れ出した電流が彼の周りを漂い始める。

「流石に」の程度では第三位には程遠いな。  
だが電撃の一いつや一いつ  
くらになら飛ばせるんじやないか」

そう言つて彼の周りに漂つていた電流はその形を槍状に変化させて

いく。そしてその直後その神命は削板に向かつて走り出し距離を詰め、その距離が5m程になつた所で電撃の槍を放つ。近距離で放たれたそれは正確に削板の元へ向かつていく。

そして削板は少し後ろへ下がりながらこう叫ぶ。

「すごいパンチガード！！」

そう叫ぶと同時に彼の腕が蜃気楼のような謎の波動を纏つ。この間、わずか四秒。そしてその腕は飛んでくる電撃の槍を地面に叩き落す。しかし、完全に防ぎきれた訳ではないらしくブスブスと彼の服が音を立てる。

「何だそれどういう仕組みだよ全く

そういうながらも神命はその距離を徐々に詰めていく。

「さつきのパンチが真骨頂じゃなかつたのかよ。しかもまた飛んでも法則が作る出されてるし。でも完全じやあないらしいな、大丈夫なのか？」

「根性だ、根性」

「明らかにそれじゃ無理だろ」

そして距離を詰めきつた彼は叫ぶ。

「大気を選択、腕に纏い圧縮」

すると彼の腕の周りに空気が圧縮されていき、彼はそのままその拳を削板の腹部へ入れる。すると銃弾をも受け付けなかつた彼の体が大きく殴り飛ばされる。が、信じられない速さで起き上がる削板。

「お前、この俺に直接拳を入れてくるとは案外根性あるじゃねえか」

「せりやどりも」

「だがこの至近距離で俺のパンチを喰らつたらどうなるだろうな、すごいパンチ」

またもそして今度は至近距離謎の衝撃波のよつなものが飛んできて神命に直撃する。しかし今回は先ほどとは違い少し怯みはしたもののが盛大に吹つ飛ばされることはなかつた。

「やつぱり少しばは痛えな。やはり定義が曖昧な力だけに完全に防ぐことは出来なさそうだ。まあこれだけ防げりや上出来つてとこかな」

「よく俺のパンチを一度だけで見破つたな、流石は第六位と言つた所か」

「まだ続けるか？もう痛み分けつてことでの場を收めてくれるるるありがたいんだが」

「そりだな。そり言えればまだ俺も飯を食つていなかつた。腹が減つては戦は出来ぬと言つし今日の所は此処までにするか。第六位神命選覚えておこう。次会つときまでにはもつと刀を鍛え直さな

ければな

「やうかい

そう言って一人は分かれた。

（何で一日続けて超能力者と戦わなければいけないんだ。朝飯食う前にこんなに疲れるとはな）

そう思つて帰ろうとした神命はあることに気づく。手に持つていたコンビニ弁当が無い。辺りを探すと無残にも散乱してしまっていた。恐らく最初に吹っ飛ばされた時だらう。

そして彼は心に誓つ。

「あいつ次あつたら殺す

## 第六話 説明不能な生物（後書き）

削板は後々キー・パーソンにしようと思つていてるので早めの登場。途中で出てきた技は完全に原作つて訳じやないけどそこはオリ設定と言つことだ。

今回一気にサブタイトル変えちゃいました。流石に二文字だと限界を感じたので。そんなこと考えるくらいなら本文に力入れろつて事ですが……

## 第七話 費える事のない物

異様な光景だった。

數十日前、ある研究所に一人の侵入者が入った。何十ものセキュリティが張り巡らされ通常なら蟻一匹たりとも通さない筈なのに、その侵入者はいとも簡単に入ってきた。しかも現在は昼の一時頃、とても正氣とは思えない条件だった。

異様、とにかく異様。

研究員達はすぐにその異常に気づいた。そしてそれに抵抗した。ある者は銃を撃ち、またある者は爆薬を投げつけた。

しかし当たらない。別に手が震えていたとか、狙いが雑だったとか、徹夜明けだった訳ではない。

しかし当たらない。侵入者は近づいて来る。フードを被り全身が黒で包まれた人間が。

そいつは次々と研究員達を捕まえ、顔を確認していく。何が基準なのだろうか？ある者は氣絶させられた。そしてその他の人間は全員何の能力かは分からぬが地面の中に消えて行く。

消えていった後に悲鳴は無い、そんな暇は無かつた。そして最後の

一人。

「た、助けてくれ……頼む……」

声が聞こえる。恐怖に怯え死を覚悟し切実に助けを乞う声が。侵入者は答える。

「いや、それは無理な相談だな。この研究に参加していたって事は、お前は既に人としての道を外れている。生かしておいたら死んでいた奴らが可愛そつだろ?」

「何が目的だ……お前がこんな事をして何の得がある?」

「別に損得の問題じやねえよ。俺はただ自分の目的のものを漁りにきた。そしてここでそれを達成し気に食わない奴を消そうとしているだけだ。何か問題があるか?」

「あんな模造品の……『妹達』についての情報が目的か?それならもつと情報を教えてやる。だから他の奴のように俺を消すのだけは

……」

「『妹達』? そういうえばここはそれを研究してたんだったな。だが俺にとつてそんなものただのおまけに過ぎないな。俺が欲しい情報はそんな程度のものじゃない。お前が聞いたことも無いような、この街のシステムを根底から覆すアレ……そして俺と同じ境遇に置かれ苦しんでいる仲間の情報だ」

「『妹達』に関する情報がその程度だと？お前何を……」

「まあお前程度が知っている訳がない。無駄話が過ぎた、そろそろ時間だ……今日はまだ後一箇所寄らなければならないからな。お前には文字通り人間、いや既存の存在から外れてもらおうか」

「や、やめろ……た、助け……消えたくない……」

そしてその研究員の一人もまた他の研究員達と同じ様に地面の中に消えていった。もちろん悲鳴を上げる暇は無かつた。

神命 選は、第七学区の通りを歩いていた。

空には昨日昼、複数の研究所が立て続けに襲撃され一部研究員が行方不明になつており、施設や設備の損傷が激しく再び研究を始めるには時間が掛かると言う内容のニュースが流れている飛行船が飛んでいるが彼は気にも留めない。

彼は今日既に一度第一十一学区不良に絡まれていた。そのせいで彼はとても苛ついている。何か面白い物は無いものか、そう思つていた彼のすぐ脇を一台のステーシヨンワゴンが猛スピードで通り過ぎていった。後ろには沢山の警備員アンチスキルの車両を引き連れている。

一瞬しか見ることが出来なかつたがその中には見知つた顔があつた。  
駒場利徳 ここ第七学区のスキルアウトを取り纏める男だ。破壊の権化のような人相をしているが情に厚く、冷静沈着で不要な争いを好まない。

神命が彼と知り合つたのは一ヶ月程前のことだ。

神命 選は、パソコンのモニターを見つめていた。彼が今見ているのは掲示板だった。そこにはこう書かれている。

『バカ校発見。生徒はみんな無能力者揃い。こういう学校があるから治安が悪くなる。悪の権化に鉄槌を。ゴミ掃除の参加者求む』

掲示されたのはどこにでもあるような小学校。

何の目的で書き込まれたかは、一目で分かる。リスクのない暴力ほど楽しいものは無い。そして一部の書き込んだ人間、参加する人間は報復としてそれを行う。別に小学校に通う生徒達が何かした訳ではない。

事の発端はスキルアウトにあった。スキルアウトとは無能力者の事を指す。学園都市には潜在的に一万人程のスキルアウトが存在しているが、その大半は寮に住んではいるが学校には通わない者や、学校には通っているが夜になると行動を開始する者で、簡単に言えば不良やチンピラの様なものでごく一部だが武装した輩もいる。

そんな彼らがいつも社会から馬鹿にされる腹いせとして最初に手を出した。殴りあつた訳ではない。それは単なる口論だつた。偶々スキルアウト側が複数人いたため優勢に立つたのだ。

しかしその報復はスキルアウトだけに留まらなかつた。気に食わない無能力者ならすぐにその矛先を向けられた。また、被害に遭つていた人間は武装したスキルアウトではなかつた。

下は小学生から、上は大学生まで標的の種類に区別はなかつた。

そしてネットで呼びかけられた『正当なる報復』には面白半分のレスポンスが集中した。

ただ暴れたい、ただ殴りたい、リスクも罪悪感もなくストレスを解消したい。そんな目的のために大勢の人間が闇討ちを始めた。そんな中で生まれたものの一つがこの書き込み。

「面白そだだから参加しようかなあ……」

神命は咳く。勿論彼に無能力者を狩る趣味はない（よくスキルアウトに絡まれ返り討ちにはするが）。彼はその暇を飽かしていた。よつてこの非常に面白そつな企画に参加する能力者を退治してやろう、そう思ったのだ。

その後その小学校で四人のレベル2を再起不能にしたところで駒場利徳と言う男が出てきた訳だ。駒場も無能力者狩りを行う能力者を快く思つてなかつたらしく、その時から神命と駒場はしばしば連絡をとつてはそんな能力者を止めてきたのだ。

そんな男が何故猛スピードのステーションワゴンに乗つて警備員と壮絶な鬼ごっこを演じているのかは神命には簡単に想像がついた。

「わおわお。これ一台で一千万位入ってんだって？」

そのステーションワゴンには三人の少年が乗っていた。駒場利徳、そして半蔵、浜面仕上である。また彼らの乗っているステーションワゴンの後部座席には重機で拾つたATMが無造作に突つ込んである。

「ああ、ドドドの前は黄泉川の奴にしょっぴかれたからな。今回は成功をセトヤウハセ！」

半蔵の質問に答える浜面。

黄泉川とは語尾に「じゃん」をつけ警備員でもあるとある高校の巨乳体育教師のことである。

「やつぱお前がいると仕事がはかどるなあ。耐震補強具を手取つて機材盗むには、建設重機動かせるヤツが必要だし、それを運ぶにも車が必要だから車盗まないといけないし」

因みにこのステーションワゴンはやはり盗難車である。

「まあ、この俺に掛かればこんなこと朝飯前よ。にしても今日もまた沢山の警備員に追われてるな」

「ああ、このままだとあんときの二の舞だぞ。まあ、それでもいいけど……」

「半蔵、お前……あんな女の何処が良いんだよ。念のために捕まるとかは勘弁してくれよな。やるなら一人でやってくれ」

「分かってるよそんなこと。それより今日もしつかえな、やつひが」

振り切れるか?」

「分かねえ。でも黄泉川のやつも来てねえみたいだし多分大丈夫なんじや」

「

会話が途切れた。何故なら少年達の車の後ろからなんか超でかい特殊車両が飛び出してきたからだ。そんな車両の窓から顔を出しメガホンみたいな拡声器を片手になんか言つてくる。

『あつ、あー。こちらは警備員第七三支部の黄泉川愛穂。テメエら盗難と器物損壊と殺人未遂その他もうもろで地獄行きだくそつたれじやんよー』

「くそつ、結局来んのかよあの巨乳。何でそんなに仕事熱心なんだよ……まあその態度は評価できるようなもんじやないけどな」

もの凄い勢いで迫つてくる大型車両を振り切る為ハンドルを懸命に操る浜面。しかしその途中別に壁に当たつた訳でもないのに急に乗つていた車体が揺れ、後ろを走つていた大型車両との距離が大きく開いていく。

「何だ何だ?」

そう言つた直後その原因がフロントガラスから顔を覗かせる。

「よお、久しぶりだな」

「なんだ神命かよ、驚かせんなよ。とりあえず中に入れ。前が見にくい」

「悪い悪い。じゃあ遠慮なく」

そつと車内にすり抜けて入つてくる選。

「いやあ悪いな突然で」

「本当だぜ。でも来たつて事は助けてくれるんだろ?」

「面白そつだから来たんだけだな。まあ助けてやつてもいいんだけどど」

「お前がいたら警備員なんか敵じやねえしな。で突然なんだけ田の前にバリケードが迫つてるんだよね」

彼らの走つている道路の先にはバリケードが張られている。警備員の使うバリケードはあくまで『子供を保護するための』のものであり「コンクリートブロックのように衝突」即死と言つほどの強度は無い。よつて力押しでなんとか行けるものもあるが『車体を潰してでも止める』タイプや、『わざと通過させてタイヤをパンクさせる』タイプなど逆効果となるものもある。今回はこのタイプであった。

「どうすんの?」

「じとなくらいなら簡単かな。どうせすり抜けても追いかけて来るし空にでも逃げるか。浜面、思いつきリスピード出してみ」

「いいのか?既に100キロオーバーなんだが

そんなスピードを出している車に飛び乗つてくる。こつさびつこつさびつ  
神経してんだよと心の中で突つ込む三人。

「大丈夫大丈夫。 そんくらい出さないと飛べないと飛べないから」

「飛ぶ？」

半蔵の質問に答える前にバリケードが迫つてくる。 しかしその前に何故か車体があるで見えない坂道を走つているかのようじゆつくりと浮いていく。 それをぽかーん見つめる警備員達。

「うわっ本当に飛んでるよ。 どうして原理？」

「単にこの車体の下にある空気を固定して車体をその上に乗せて走つてるだけだ」

「なんかさらっと凄い事言つやがつてるよこの人。 お前が駒場のリーダーと知り合つでよかつた。 やつぱレベル5つですげえよな」

「お褒めに預かり光栄です。 そんなことより早くしないとへりとかが飛んでくるぞ？ 流石にあの『六枚羽』が来ないにしてもこのままだと目立ちすぎるわ。 ここは第七学区だろ、 どこか隠れ家とか無いのか？」

「隠れ家ならあるが。 すぐその先だ」

やつぱつて浜田はハンドルを回し始める。

「やつ言えば駒場は何で一言も喋らないままPDAをずっと見つめちやつてる訳？」

「あー。 ここの前小学校に侵入しようとしたボウガン男を、 駒場のリ

ーダーが「ブッシュで5mほど吹っ飛ばしたの。ガラにもない事して小つちやな女の子から懐かれて激しく照れてんじゃね？」

「えっ？でも駒場PDAでネット通販サイト見てるっぽいけど。Xサイズのサンタ衣装と白ひげセット見たまま、かれこれ十五分は固まってるぞ」

「あれだろー。言われちゃつたもんなリーダー。サンタクロースつてホントにいるんんだよね……？とか何とかさー。だからよー、今年の年末には来るんじゃね？暴れん坊のサンタクロースがさーつ！」

「ぎやははないわそれーつーーと二人が大笑いしていると、不意に駒場は手の中にPDAを雑巾のよろづに絞り上げて、

「ふがアアああああああああああああああああああああああああッ！…」

「ひつ、ひいいーー駒場のリーダーが羞恥心から御乱心！？」

そして前しか見ていなかつた神命の頭部に振り上げられた駒場利徳の拳が襲い掛かる。そしてその拳は神命の後頭部にクリーンヒットし、その衝撃でフロントガラスにおいて勢いよくぶつける選。びくびくと動いているものの意識はないらしい。

「駒場のリーダーちょっとやりすぎじゃね？ほり神命のヤツが頭ぶつけて動かなくなつてんじゃん」

その直後に車体が降下を始めた。

「あれ?なんかこの車ものす」こ歎こで落ち始めてる氣がするんだけど」

「おこどりなってんだ神命?つておい、こいつ氣絶してるがーーーお起きる、早く起きなさい」

ゆさゆせと半蔵が揺するものの選は起さない。

「こ地上203だからこのままだとやべえぞ。つて置つかまつ無理だ、落ちるー」

「駒場のリーダーは恨みで呪い殺してやるー」

「ふがアアああああああああああああああああああああああああチーーー」

「…………」

その後、四人の乗るステーションワゴンは幸いにも近くにあったある程度の深さのある実験用のプールの中に思いつきり突っ込んだ。そしてその後四人がどうなったかは言つまでもない。



## 第七話 費える事のない物（後書き）

結構間が空いちゃいました。  
しかも眠いまま書いたから内容がいまいち  
でも見てくれる人は見てくれるよね?  
.....

## 第八話 依頼と報酬

「ねえ、選つてこんな服着てつたつけ？」

「ああ、それか。それはあのあれだ、研究所に忍び込む時着てつたやつだな」

「」は長点上機学園の学生寮のある一室。その部屋の中で話している一人の人物は、神命 選と月極 高嶺だ。高嶺が持つてているのは全体的に黒いフードの付いた地味な服。

「なあ、『妹達』<sup>システム</sup> つて知つてるか？」

「『妹達』？ 突然何？」

「知らなかつたか？ じゃあ第三位の軍用クローンについての噂とかは？」

「あつ、それなら聞いたことがあるー」

「さうか。まあぶつちやけアレつて本当に行われてたんだよね

「本当？」

「ああ、最初は『量産型能力者計画』<sup>レディオノイズ</sup> つて言つ計画で、さつさも言

つた通り第三位のDNAマップを使って軍用クローナンを作ろうつて計画だつたらしいな。でもその結果は尽く失敗。なんでも出来上がつたクローナンはオリジナルの1%にも満たない欠陥品だつたんだ。で、遺伝子操作・後天的教育問わず、クローナン体から超能力者を発生させることは不可能と判断されて、すべての研究は即時停止、研究所は閉鎖され計画は凍結されたらしい

「そりなんだ。でも、生産されたクローナンはそのままなんでしょう？しかも、人体のクローナンは国際法で禁止されてるから公にも出来ないし、公になつたとしても彼女らに居場所は無いんじゃないの？」

「そりそりなんだが、俺も何度かその『妹達』の研究機関に侵入して潰して来たから分かつたんだが、奴らはそのクローナンを有効活用する方法を見つけたらしい

「どんなん？」

「これがまた面白い話でな、そのクローナン達はまた違う実験に投入されることになつたんだ」

「その実験つて言つのは？」

「この実験はこの学園都市の最終目的である絶対能力者を作る『絶対能力進化（レベル6シフト）計画』つて呼ばれてる。で、そのお待ちかねの実験内容なんだが、樹形図の設計者<sup>シリーダイアグラム</sup>の算出したプランに従い、学園都市で最強の超能力者『一方通行』<sup>アクセルレータ</sup>を絶対能力者（レベル6）へ進化させるつてふざけた内容だ

「絶対能力者？本当にそんなもの出来るの？」

「方法としては『一萬通りの戦闘環境で量産能力者を一萬回殺害する』とか言つとでもじゃないが正氣とは思えないような方法だな。しかも、もう既に約半分ほど順調に進んでいるんだそうだ。笑えて来るだろ?」

「確かに話だけなら嘘つぱく聞こえるけど、実際に行われてるのだから笑えないわね……」

「そうだな。そんで当の本人はつい最近気づいたらしくて、一方通行に直接喧嘩を売つたらしいな」

「結果はどうなつたの?」

「もちろん言つまでも無く一方通行の圧勝で、その方法では実験を止められないと悟つた第三位は、今大急ぎで研究所を潰して回つてる。最近、飛行船に研究所がサイバー テロに遭つたとかそういうコースが流れてたが多分と言つか確實にそれだろうな」

「手伝つてあげたら?」

「お前……簡単に言つけどな、こつちだつて結構忙しいんだぞ?まあこの前久々に第三位に会つて来ようとしたら疲労感満載の顔で友達と話してたな。とても話しかけられるような状態じゃなかつた」

「じゃあ尚更……」

「でも、奴にそんな義理はないし、そもそも初対面でいきなり襲い掛かつて来たんだぞ。しかも一方通行つて言つたら運動量・熱量・光・電気量等のあらゆるベクトルを観測して触れただけで変換する力だぞ。とても奴に敵うとは思えないな」

「でも選なら出来るんじゃない?」

「確かに俺の能力は一方通行の能力とは相性がいいかも知れないけど、それにしてもリスクが大きすぎる。俺に出来るのは研究施設を潰すのを手助けするくらいか……まあほとんど情報収集の為だけど。ここであいつに少しでも借りを作つておくのも悪くないかもな。そろそろ研究所の方も、第三位対策に暗部が何かを雇う頃だし」

「じゃあ早速行つてきたら?」

「完全に他人事だな。どうせ高嶺はここで俺が帰つてくるのを待つてるだけだろ?そんなんだから、いつまで経つても高嶺は……」

「製薬会社からの依頼……？」

髪を弄りながら電話で話す彼女の名は麦野のむね 沈利じゅり。暗部組織『アイテム』のリーダーであり、学園都市第四位の超能力者『原始崩し（メルトダウナー）』である。

「それってウチの管轄じゃなくない？まあ別に……」

「でもさー結局水着つて人に見せ付けるのが目的な訳だから、誰もいないプライベートプールじゃ高いヤツ買つた意味がないっていうか」

この金髪碧眼で『結局』口癖の女子高生の名はフレンダ＝セイヴェルン。

「でも市民プールや海水浴場は混んでて泳ぐスペースが超ありますねー。滝壺はどうでもいいよ？」

フードのを被りやたらと『超』を話の中に盛り込んでくるこの大人しそうな少女の名は絹旗きぬはた 最愛さいあい。そして彼女の能力は『オフェンスアーマー』『窒素装甲』だ。

「ん 確かにそれもあるのよねー。滝壺はどうでもいいよ？」

「……浮いて漂うスペースがあればどうでもいいよ？」

「そ……そつ」

そしてジャージを着たいつも眠たそうにぼーっとしているこの少女の名は滝壺理后。彼女の能力は『能力追跡（AIMストーカー）』。

「はーい、お仕事中にだべらない。新しい依頼が来たわよ」

ぱんぱんと手を鳴らしながら彼女らに近づく麦野は続ける。

「不明瞭な依頼だけどギャラは悪くないしやる事は単純かな」

「やる事つて?」

「謎の侵略者達からの施設防衛戦！」

所変わつてここはキャンピングカーの中。アイテムのメンバーの四人はこの中に乗り込んでいた。

「発電能力者ねえ…」

彼女らが見ているのは『sound on』と表示されたモニター。そこからはある女の声が聞こえてくる。

『侵入者の内の片方はその可能性が高いって話ね。通信回線を使つたテロと、電気的なセキュリティに引っかかる所からそう推測されているみたい』

この声が暗部組織アイテムと学園都市上層部とを繋ぐ連絡係となつてゐる。

『てゆーか依頼主はどうもこいつの犯人は特定できてるっぽいんだけどねー』

「田星がついているならなぜこちから超襲撃しないのでしょうか?不意を討つ方が超楽勝だと思つのですが」

『「手出しあはターゲットが施設内に侵入した時のみ、襲撃者の素性は散策しない事」つてのが依頼主のオーダーよ』

「はあ、何それ?結局意味分かんないんですけど」

『「こいつらときたら私だつてやりたくて受けたわけじゃないわよ!それにこの手の依頼には相手にも色々事情があるんだつづーの!それよりヤバイのはもう片方。こっちの方はかなり厄介っぽいのよね』

「何がどう厄介なわけ?」

『さつきの侵入者の方は休日を除くと夜間しか襲つて来ないのに対して、こっちの方は昼夜問わず襲撃してくるのよね』

「でもそれなら超厄介って訳じゃないですか?襲撃の時間帯は單に学生じゃないってだけかも知れませんし」

『普通侵入するなら脛は避けるでしょ。でもこいつはそんなもの結構い無しに平氣で突つ込んでくるの。その手口も本当に単純で正面突破。なのにどんなセキュリティにも引っ掛からないの』

「じゃあ相手には侵入に対してもほどの自信とそれを可能にするだけの能力があるのね」

『それだけじゃないわ。一番厄介なのは戦闘時。報告によると研究者側の攻撃は一度も侵入者に当たらなかつたらしいわ』

「攻撃が当たらなかつたのはその侵入者が単に超避けまくったと言うだけじゃないですか？」

『実際に戦つた研究者の証言によると侵入者は特に避けるような動作も無く、全ての攻撃がすり抜けていたらしいのよ。それも生体反応や音源はちゃんとそこにあつたのに』

「なんか超気味が悪いですね」

『そして襲われた研究者の死体は何故か無くつて、運良く生き残ったヤツによると、皆地面の中に消えていったとか何とか言つてるのよね。で、研究所によつては全員が消えてたり、一人も消えてなかつたり、一部だけが消えてたりとバラバラで、これも人的被害が少ない最初の侵入者との大きな差よね』

「地面の中に消える……結局それって何なの？幽霊？」

『それだけ聞くと本当に幽霊に思えるわよね……しかも情報を抜き取るような行為をした後は念入りに研究設備を溶かして回つたそう

「溶かす?」

『ええ、設備が全て超高温で溶かされているの。もつ何の情報も残らないし復旧出来ないくらいにね』

「そもそも何が目的なんでしょうね?..?」

「最初の方は最近になって活動を始めたみたいで、その目的は実験の妨害工作ってのは眼に見えて分かるのよね。で、問題の侵入者は結構前から色々な研究施設を潰して回っていたようで、単に情報を集めてるっぽいのよね。だからこの侵入者同士には何の繋がりもないってのが上層部の考え方。でも次狙われるっぽい場所は一基の内でのらりかの可能性が高いから防衛するのは一箇所』

「でも結局そんな説明受けたら氣味悪くて依頼受けたる氣無くなっちゃう訳なんだけど」

『その分報酬も高いんだから。まあ、『さあしてさあしてなにでちやんと仕事しろーつー!』



## 第八話 依頼と報酬（後書き）

アイテム登場回。

でも麦野と神命が戦うのは大分後になります。今回は他の誰かと。  
後半会話しかしてないな……

やつぱり主人公設定とか作つたほうがいいのかな？

## 第九話 暗躍者と襲撃の夜

Sプロセッサ社脳神経応用分析所

話しているのは二人の研究者。他にも彼らの目の前では何十人もの研究者が施設移転の準備に追われている。

「侵入者は病理解析研究所に現われたようです」

「やはり来たか……」

「だが、向こうに現われたという事は当面こちらは安全……移送作業を急がせるんだ」

「あっちの方上手くやってますかね?」

「カメラをはじめ外部からの確認手段はすべて切断してるからなあ」

「応援に来た戦力、こっちに来たのは年端もいかない女の子が一人でしたが……」

「暗部の掃除屋だ。外見なんかあてにならんさ。それより今晩中……」

いや今から数時間以内に施設内の全ての研究データを他所へ移す必要がある……」

「間に合いますかね?」

「トラブルさえ起らなければ大丈夫なはずだが……」

そんな事を言つた途端、突然研究所全体に大きな警告音が響き渡つた。

「何だ、何が起きてる?」

「侵入者です。この研究所にも侵入者が入りました」

「何だと? これではとても全てのデータを運び切れるとは思えん……早くしろっ! 出来るだけだ、出来るだけ多くのデータを運び出せ! 呼んでおいた暗部が時間を稼いでくれるはずだ。その間に我々はより多くデータを運び出す必要がある。とにかく急げ!」

「ん？見つかったかな？」

全身に黒を基調とした服を着たこの少年の名は神命 選だ。

（意外と早かつたな。正面突破はしてないにしてもやつぱり大胆に動きすぎたか？まあさほど行動に支障はないが、……）

未だに警報は鳴り止まない。

「でも、誰も駆けつけて来ないって事はそれだけ準備に手間取つて俺に構つてる暇は無いか、それとも雇つた暗部がここに向かつて来てるとかなんだろうな」

はあと大きく溜め息をつく神命。

「面倒くせえ。結局ここまでやつたけど集まつた情報は絶対能力進化実験のデータか、妹達のデータだけだし……まあ当然と言えば当然なんだけど。今回くらいは何か見つけて帰らないと全くの無駄骨だよなあ。」

そつ言いながら神命は、少し周りを見渡してみる。

「つて言つた本当に誰も来ないな。この部屋にはもう重要な物は無

いのか？せつときから物音一つ聞こえないんだけビ

話すのを止めるとただきちんと並べられた机と棚があるだけの部屋はしーんと静まり返る。

「何これ、盗み放題？本当に誰もいないのか？」

ふざけて呼んでみたりする。

「…………」

返事はない。

「居ないの？」

「…………」

だがやはり返事はない。それを確認すると選は仕方なく部屋から出ようとする。しかし何故か扉は開かなかつた。何か強い力で押さえつけられている様で。

「なんだ、やつぱり居たのかよ」

そう呟いた瞬間、突然その扉が吹き飛び外から一人の人影が飛び込んできた。

「説明だけ聞いたら超氣味が悪いと思つていましたけど、思つたり超早く済みそうです」

「本当に幽靈じゃなくてよかつた…………」

入ってきたのは高校生と中学生っぽい少女が一人。彼女の顔は見えたことがある。

「アイテム……窒素装甲と能力追跡か……」

「よく知ってるじゃないですか」

「これでも結構情報通なんだよね、俺」

「それもここで超終わりですけど」

「何が終わんの？」

「それは超決まります。あなたの命ですよ」

「それは楽しみだな」

そこまで話したところで突然音が鳴った。警報ではなく、緊迫感のようなものは感じられない軽快な音楽だ。携帯の着信音だらうか。神命の物ではない。音は少女達の方から聞こえてくる。

「もしもし繩旗ですけど、麦野ですか？」

『 そういう、もひーちは侵入者の発電能力者と交戦してるけどそつちは?』

「 いつもたつた今、侵入者と超遭遇した所です」

『 あらそう? 』 あらは戦いの邪魔になるからフレンダは追い出した

けど、そつそつは？滝壺にはもう相手のAIM拡散力場は記憶させた  
？』

「今から話やる所です」

『じゃあ早くしてね。やっぱそうだったら記憶だけしてすらかっても  
いいけど。」ひちはくそつ、第三位の奴、生意氣な……』

セヒで電話は切れたらしい。

「向ひつは超荒れてるみたいですね。滝壺さん、あいつのAIM拡  
散力場はもう記憶しましたか？」

「それが……今やつてる所なんだけど……」

滝壺が何かとても困つたてている様な顔をしている。

「超どうかしましたか？」

「……何故かあいつからは……AIM拡散力場が感じられない……

……」

「どうして」とですか？

「多分……能力者じゃないとか、幻影とか……」

「でもさつときあいつ扉を超開けようとしたよ。その時ちゃんと  
力が加わっていましたし。報告からも能力者じゃないことは超あり  
得ません」

「でも、この部屋からはあいつのA.I.M拡散力場が感じられない……」

「一人はここに本当に幽霊なんじゃないかとこいつ目で神命に顔を向けてくる。」

「どうした？俺の顔に何か付いてるか？」

「あなた私達をおちよくなとしか思えません」

「そう見えないのか？」

「あなた超むかつきますね」

「そりゃ挑発してんからな」

「まあいいです。滝壺さんは相手のA.I.M拡散力場が観測出来ない以上、ここにいても仕方が無いので超急いでここから逃げてください」

「分かった……」

肩を落として残念そうに部屋から出て行く滝壺。

「お前だけでいいのか？」

「あなた如きなら超十分でしょう」

「やうかい。そろそろ、話し疲れてきたから終わりにしたいんだけど」

「じゃあお望み通り終わりにしてあげましょつかね」

「そりゃ あ助かるな」

そう言つと二人はそれぞれ身構えて相手の出方を見よつとする。先に動いたのは絹旗だ。絹旗は手近にあつた机を軽々と持ち上げて神命の方へ勢いよく投げつけてくる。

彼女の能力は『窒素装甲』。空気中の窒素を自由に操ることが出来る。その力は極めて強大で、圧縮した窒素の塊を制御することにより、自動車を持ち上げ、弾丸を受け止めるなどする能力だ。

その能力で投げられた机は神命に凄いスピードで近づいて来る。

しかし選は動かない。ただ呴ぐだけ。

「投擲物を拒絶、身体を透過」

ただそう呴ぐだけで、投げられた机は彼の体をすり抜け、後ろにあつた別の机に大きな音を立ててぶつかる。

「当たつたらいたそうだよなあ」

当たるはずもないのに彼は呴ぐ。

「確かに報告にあつた通り、攻撃は超すり抜けてしましますね。これでは少々時間がかかりそうですね」

「そこは『超』じゃなくて『少々』なのか」

「別に私の口癖を気にしてもらわなくても超結構なんですが」

「相手の行動を観察するのは大切なことだが?」

「あなたは本当にむかつく人ですね」

「褒め言葉だな」

そして間を置いて神奈は続ける。

「でもまあそんな冗談は置いといて、そろそろ本当に面倒になつて  
きたからさつさと終わりにしますか」

そう言って彼は、一度大きく深呼吸をした。

## 第九話 暗躍者と襲撃の夜（後書き）

絹旗と交戦開始ですね。

絹旗は結構人気あるけど、この戦いが終わったらあんまり出す予定無いんだよね。それについて何か意見があつたら教えて欲しいです。

## 第十話 月下での余興の対峙

「でもまあそんな「冗談は置いといて、そろそろ本当に面倒になつてきたからやつと終わりにしますか」

神命 選はラプロセッサ社脳神経応用分析所に侵入していた。彼と対峙しているのは、絹旗 最愛である。

「どうやって倒されたい?」

「そんな質問に応える超バカがどこにいますか?」

「セイは『どうやって殺されたい?』じゃない」とて感謝して大人しく質問に答える所だろ?」

「随分と余裕ですね」

「ほら、俺って強いし。暗部の一人や一人問題じゃないからな」

いかにも余裕そうな表情を作つて選ば話している。

「さっきから超氣になつてたんですが、あなた一体何者ですか?」

「俺つてこれでも一応侵入者だからさ、そんな質問に素直に答えると思つてんのか?」

「超思つてませんが」

「じゃあ何で聞いたんだ?」

「それはあなたも同じでしょ?」

「確かにそうだな」

確認するが、神命と絹旗は侵入者とそれを迎撃しに来た暗部であり、とてもこんな会話を交わす程の余裕は無いはずなのだ。

「つて言つた本当にそろそろ始めないとや、ここに来た意味が無くなるからもつ始めるぞ?」

「お好きにどうぞ」

「じゃあまあ、お葉に甘えまして」

そつ言つと、神命は突然壁に向かつて走り出しじつ茲く。

「現在いるこの建築物を選択、引力を発生」

壁に到達する前にそつに終えた選は止まる」となく壁に足をかける。するとまるで重力を無視しているかのように垂直に壁に張り付き、そのまま天井まで走つて行き逆さまになつて見せる。

「どうだ? 面白いだろ?」

「確かに、たつたそれだけと言つのなら超笑えますね」

しかし、どうやらも笑うびるか口元に全くほひるぶ様子は無い。

「確かに、さつき出て行つた方が能力追跡だつたな。で、残つたお前は室素装甲つて訳だが……資料によれば、お前圧縮した室素を操つて大きな力を生み出すとかなんとかだつたな。でも裏を返せば、室素しか操ることが出来ないつてことになるけど……」

そつ言つて神命は縄旗の方を再度見つめる。

「な、何ですか?」

「拍子抜けだな。これじゃ簡単に勝敗が着きそつだ」

「そんなに勝手に決めてもらつては超困るんですが」

「じゃあ遊んでみる?」

そつ言つとまた彼は何かを呴いた。

「窒素を拒絶、身体を透過」

呴くと彼はゆつくりと扉のあつた方へと天井を歩き始める。そこへまた絹旗は、手近な机を神命へ向かつて投げてみる。が、先程と同じ机は彼の体をすり抜け勢いよく床へ落ちる。

それを絹旗は見届けると、今度は常人では有り得ない跳躍で選に拳を入れようとする。そして今回は絹旗の拳が神命の身体に触れたのを感じた。

「！？」

そこで彼女は驚いた。

何故なら、普通ならば彼女の拳が相手に当たるはずがないのだ。確かに彼女は窒素を操つて巨大な力を生み出すことが出来る。しかしその範囲は彼女の身体からわずか数cm程であり窒素越しで物を持つ姿は彼女が直接持つているように見える程だ。

だからこそ彼女は驚いた。

当たるはずが、触れるはずが無いのだ。技が決まれば神命の身体は遠くへ吹き飛んでいるはずだ。しかし、肝心の彼は微動だにせず、彼女の拳が優しく彼の服を押さえつけているのを見て笑いながら言った。

「だから効かねえって」

そう言った時、彼は既に床の上に立つており先程破壊された扉の前に来ていた。

「やっぱ無理だって言つてもやりたくなるのが人間の性分なのか？まあでもどうせ、ここで人間としての一生を終えるんだけどな、お前は」

そして神命は扉があつたはずのこの部屋唯一の出入口の外へ手を伸ばす。

「これで人を殺るのは初めてだな。

窒素の拒絶を解除。

大気を選択、右手の平に圧縮。

外部からの熱を拒絶、身体を透

過

すると突然部屋の外から中へ向かって風が生じた。

「流石に室内だと時間が掛かるか。遊んでやる、何処からでもいいから掛かって来いよ」

「言われなくても超ぼつこぼつこにしてやりますよ

そう言つと綱旗はさつき彼が呟いた言葉を思い出す。

（先程彼は『窒素を拒絶』と呟きました。そしてその直後の私の攻撃は窒素の層は彼には当たらず手だけが彼に超触れました。と言つことは『を拒絶』言つたものは彼に超触れることが出来ないと

言つことになります。でも彼はその後拒絶を解除と言つたという事は今なら超攻撃が当たるはず）

そう考えた彼女はすぐさま彼に攻撃を仕掛ける。それに対し神命は部屋の外の廊下へ素早く移動する。

（今回は私の攻撃を移動して避けましたね。という事はやはり今は超攻撃のチャンスのようです）

確信した彼女は、彼を追いかけるような形でさりに攻撃を仕掛ける。しかし、神命はそれに対してただ背を向けて走るだけだ。

ここは研究所の丁度中心の様で廊下には外を見る窓は一つもない。ただ蛍光灯が薄暗く照らしているだけの廊下を一人は走つてゆく。

「超逃げてばかりじゃないですか。ビームまで逃げるつもりですか？」

「別に逃げてる訳じゃ無いんだけどな。中心部だとこの攻撃の準備に時間が掛かるんだよ。だからもう少し待つてくれないか？もう後少しであがが完成するから」

「誰がそんな技を使わせると思いますか？」

「でもそれにしては攻撃が温いな。その程度の攻撃が俺に当たるとは思えないんだが」

「どうした？疲れて来たか？動きが鈍いぞ」

「でも言ひながら、彼は顔面目掛けて絹旗が放つてきた拳を避ける。

「ちよこまかと動き回つて……避けることしか能がねエ超クソ野郎が、私から逃げられるとでも思つてんですか」

「なんだかいきなり口が悪くなつたな。あれか、『暗闇の五月計画』で一方通行の思考パターンを移植された影響か?」

「私が『暗闇の五月計画』の被験者つてことまで知つてんですか。なら尙更逃がす訳にはいきませんね」

「そうかい」

結構走り回つた。そろそろ研究所の端の方まで着いた頃だらうか。窓からは淡い月明かりが差し込んでいる。その光景が見えた途端に、神命は進行方向を変え絹旗に向かって突っ込んで来た。

「でももひそろそろだ。待つてな今面白いもの見せてやるから」

突然神命は右腕を上に掲げた。

するとそこまで何も無かつた空間に眩い白光が生まれる。先程まで薄暗く照らされていた廊下は、その溶接のような純白の光によつて明るく照らされた。

「な、何ですか……これは……」

「どうだ?こんな綺麗な高電離<sup>フューズ</sup>気体だ、この月明かりの中でも負けず劣らず映えるだろ?」

「……プラズマ？」

高電離气体  
プラズマ 空気は圧縮されることで熱を帯びる。あまりの圧縮率で凝縮された大気は、摂氏一萬度を超える高熱の塊と化し、周囲の空気中の『原子』を『陽イオン』と『電子』へ強引に分解してしまつ。

そしてその超高温の物体はその形状を剣の様なものへと変えて行つた。そのあまりの高温は縄旗の皮膚にまるで火傷を負つたようにじりじりとした痛みを植えつける。

「研究設備が超高温で溶かされていたと報告を受けていましたが……そういう事だったのですか……」

「御明察。まあほとんど夜しか使わないから半分程しか正解と言えながな」

最後まで余裕しゃくしゃくな表情で語る神命。

「流石に私の鎧素装甲でもそんなもの振り回されたら超一溜まりもないですね」

「結局の所振り回すんだけどな。まあ月並みには樂しかつたよ。欲を言つともう少し知恵を振り絞つて欲しかつたくらいか」

「つまつと神命は一步一歩縄旗の方へ近づいて来る。

そして後ずさりする絹旗の上に容赦無くプラズマの剣は振り下ろされる。

## 第十話 月下での余興の対峙（後書き）

絹旗との交戦。

まあ最初からこれくらいにはなると予想はしていましたが、流石に一方的すぎた気がしないでもない。

## 第十一話 着信が知らせる終末

高電離<sup>プラズマ</sup>气体、あまりの圧縮率で圧縮された空気は一萬度を超える高温になる。

そして今そのプラズマで出来た剣が絹旗の頭上に振り降ろされた。

彼女にこの攻撃を止める事は出来ない。それどころか腰が抜けたのかまともに足が動かない。

絹旗は死を覚悟した。

しかし、その剣が絹旗に切り掛かる前に誰かの携帯がなった。絹旗の物とは違う何の変哲も無いただ初期設定よつの着信音。

神命の物だ。そしてその突然で何ともタイミングの悪い着信を確認

するため彼は攻撃の手を止める。

『へつらとなりへなへなと座り込んでしまつ絹旗だが、選はそんなことに構わず携帯を確認する。

絹旗からは見えなかつたが画面には月極 高嶺と名前が表示された。そして神命は面倒くせうつに携帯を耳まで持つて行く。

『……あつもしもし、選?』

「そうだが?」

『今何所?』

「うアプロセッサ社脳神経応用分析所だけど」

『ああ』めぐ。今お仕事中?』

「ああ、今仕事の真つ最中だな」

お前がやれつて言つたんだろ!…と突つ込みたい衝動を選は抑えつつ、電話の理由を聞く。

「何で電話したんだ?」

『ああ、後でいいよ。仕事中だつたら。それより今どんな状況?』

「今? 研究所に雇われてた暗部と交戦中」

『……あれ? 私かなり悪いタイミングでかけちゃつた?』

よつやくそのことこ<sup>ノ</sup>氣づいた高嶺。

「ああ、かなりまざい時にかけてきたな。このままだと俺死んじゃうかもね」

嘘付け！…と絹旗は心の中で叫ぶ。

『本当に？でも選がそう言つ時は大抵無傷で帰つてきたりするのよね』

「本当だつて。今にも敵の攻撃が襲い掛かつて来てんだよ」

『それでもどうせ選なら敵の攻撃全部避けちゃうでしょ』

「ばれた？」

『最初から。それに約束だつてしたんだから……もしかして選あの時の約束忘れてなんかいないよね？』

「約束？……。ああ、あれか。俺から言つたんだ、忘れるわけないだろ」「

『そうよね、忘れるわけ無いわよね。ところど、選つてどうやつて敵を処理してるの？』

何か思春期真っ最中の女子が絶対に聞いてこない質問ベスト10くらには入りそなこと平然と聞いてくる。

「『ところで』では処理しきれない程の話の変わりようだなおい。敵か？いつもお手軽人柱で済ましてるけど、今日はちょっと焼こ

うかなとも思つてゐるが

『焼くの?』

「ああ、じんがりとな」

『え~何で? 人柱で良いじゃん。グロくないし』

「人柱も十分むじくね?俺の攻撃つて地味じゃん。だからそれを打開しようとしてだな……」

『ほら、私グロいの苦手だし』

「人の話は最後まで聞けつて親に言われなかつたか?ああもう面倒くさい。いいよやらないから。どんだけ我がままなんだよ」

『分かればよろしい。じゃあ選、お仕事頑張つてね~。お休み』

そこで電話は切れた。

「高嶺の奴、絶対休ませる氣無いだろ……」

神命は溜め息をついて携帯を閉じポケットに仕舞つと、再び絹旗の方に目を向ける。

「『どうじま』となんだが、一体どうじまつか?..」

「『どうじま』となんだが?」

黙り込んでしまつ一人。

それもそうだ。さっきまで遂に勝敗が着きそうなと言つた所まで行つて、しかも一人は最高の決め技で仕留めようとし、そしてもう一人は死ぬ覚悟までしたのだ。

「ああうん、何か邪魔して悪かつたな」

「ああ……いえ超お構いなく……」

（何で俺はこんな所で「んな」とになつてんだよ……）

神命は心の中で再度溜め息をつく。

「あの、それ超熱いんで止めてもらつてもいいですか？」

「ああ、悪い

そう詰つとせりかく苦労して作った剣は蒸発していく。

「あのさあ、もう氣絶で許すから行つてもいいか?」

別にいいんじゃないですか？もう超疲れましたし」

- ۱۷۰ -

え  
え

「セイは『私は最後まで戦う』とか『いつそ殺せ』とか言つ  
といひやないか?」

「超画面倒へやこんで早く終わらせてくれませんか？」

「冗談のつもつで言つたら嫌な顔をされたので適当に終わらせるといふにする。」

「やうか、じゃあまたな」

「あなたとは一度会いたくありません」

「やうまでかみ、まあ普通そつなるな。じゃあ窒素を拒絶、身体を透過

直後後頭部に一撃を喰らい氣絶する絹旗。そしてそれを見届けると神命はその場から去つて行く。

（何かとても寂しい終わり方だったな。さて、そんな事は置いといて、やつと終わりにしますか）

### 翌朝、アイテムのアジト

「で、結局その侵入者ってどんな奴だったの？」

「何かよく分かりませんでしたね。攻撃の特徴は報告にあったものや違つたものと超色々ありましたけど、性格や目的は全然です。それと滝壺さんがAIM拡散力場を観測できなかつたみたいで、それもあいつの能力かと」

「結局、絹旗はそいつに惨敗しちゃつた訳？」

「何か超むかつく言い方ですね。まあ仕方ないんですが。結局その侵入者は私を倒した後、研究所を荒らしまくったようで研究設備の移転はわずか四分の一程度しか成功しなかつたようです。では逆に、フレンダはどうだったんですか？」

「わ、私？そ、そりゃあもう侵入者なんか余裕で……」

そう言いかけた所で麦野が、

「「」……第三位にボロくそにやられてから何の後片付けもせず、このこと逃げ帰つて来やがつた……」

「ちょっと麦野おー、ばりられないでよー」

フレンダは至つて平然としているが、麦野は凄い目つきで彼女を睨んでいる。

「第三位？ それは超初耳ですね。でも一体何故、第三位が多くの研究所を潰して回っていたんでしょう？」

「ああ、それなんだけどさあ、なかなか面白れえ事知つちまつたんだけど」

「えつ？ 何々？ 私氣になる訳よ」

「私も超氣になります」

「それがさあ……」



## 第十一話 着信が知らせる終末（後書き）

流石に絹旗に死んでもらつては困るので生存ルート。  
どこまでいっても締まらない信頼のクオリティですね。  
でもこんいう銀魂的なノリは好きなので反省はしません。

神命 選は、長点上機学園の学生寮に床つて来ていた。そしてそこにはやはり田嶺 高嶺の姿もあった。

「お仕事お疲れ様～選

「ああ

彼は昨晩ある研究所に忍び込んでいた。その研究所とは「アプロセッサ社脳神経応用分析所」とかいう長つたらしいう名前で、絶対能力進化計画の一端を担っていた研究所である。

「やっぱ徹夜とからしくない事するもんじゃないな

「でもそのおかげでしばらくは実験も停止するんでしょ？」

「いや、多分今もやつてると想ひつい

彼はすぐさま否定した。

確かに、昨晩神命は忍び込んだ研究所で暗部に所属する少女と交戦し、設備を移転する為に動いていた研究者や車両のかなりの数を潰

した。その後、第三位が第四位と交戦していたらしい場所にも寄り、ちょっとした後始末もした。が、

「昨晩の時点では残っていた研究所は一基、その内の二基は俺も第三位も行かなかつた。俺らが行つた方も結局俺が潰せたのは全体の7割強程度だしな。あいつ等ならこの短時間でも実験は再開してるんじゃないか？それに……」

「それに？」

「恐らく奴等はこの実験を外部の研究施設に引き継ぐだらうな。しかもその引き継ぎ先の数やその利権をかなり分散させてるはずだ。数は……150、いや……200程度か。結論としては研究所を潰す形での研究の妨害はもつ意味を成さないな」

「じゃあもう実験は止まらない？」

「手段がない訳じゃないが……前も行つた通り一方通行自体を倒すか、妹達の製造の妨害か殺害くらいか」

「それだけしかないの？」

「樹形図の設計者が出した演算結果の誤認の誘発もしくは、新たな演算で実験はすでに破綻していると機械に言わせるつてことも少し前までは出来たんだがな……」

「少し前までつてことは今は出来ないってこと？」

「ああ、樹形図の設計者は七月の終わりに地球からの謎の攻撃で破壊されてる」

その破壊した犯人は、とある不幸少年とシスターなのだが「こ」では触れない」とにする。

「だから先に言つた方法しかない訳だが、やつぱり無理だな。こいつ言い方をするのは好きじゃないんだが、妹達はいくらでも量産できる人形みたいなものだ。全てのDNAマップの情報をこの世から消し去るか実験が終わるまで生産は続く。だがそれを止めるのは不可能だ」

「じゃあ一方通行を……」

それを聞いた神命は呆れたように溜め息をつく。

「お前……俺に死ねと?」

「いやそういう訳じゃないけど……でも、そうするしかないじゃない」

「つまり死ねと?」

「だ、か、ら、」

「でも本当に死ぬぞ? 高嶺、お前あいつのことよく知らないだろ」

聞いてみると高嶺は困った顔をして答える。

「そりゃあ確かに知らないけど……」

「前も言つただろ。奴は運動量・熱量・光・電気量等のあらゆるべ

クトルを観測して触れただけで変換する力を持つている。しかも常に、起きていようが寝ていようが奴は全ての攻撃を反射する。いくら俺が攻撃を全て避け続けても奴に攻撃は通らない。まあ手段はあるが準備に時間が掛かるし、とにかくリスクがでかい

「諦めるしかないのね……」

「今日は仕方ない。一応これからも情報収集は続ける。それと監視、特に一方通行をだ」

「大丈夫なの？」

「監視だけならな。潜入と逃亡はこっちの専売特許だ。その点は心配はない」

彼の能力はあらゆる壁を透過できるし、いざとなれば空へも地下へも逃げられる。また監視や追跡に關しては、流石の一方通行でも彼から逃げ切ることは至難の業だろう。

「でだ。また今から出るつもりなんだが……高嶺ってさあ、俺が帰つて来る時いつもこの部屋にいるような……本当にお前つてここが好きだよなあ」

「何？嫌なの？」

「まあ別に良いんだけど……」

少し間を空けて神命は続ける。

「よく考えてみたら……まさか高嶺、俺に能力使つてね？」

さてここで今更ながらの彼女の能力紹介に入るとしよう。

このロングの茶髪であるこの少女、月極 高嶺の能力はレベル4の精神妨害<sup>メンタルジャミング</sup>である。

『精神妨害』の主な能力はその名の通り精神の妨害、特に感情や演算等の妨害だ。自分を中心として半径20m以内にいる相手に使用でき、その感情の一部を相手に抱かせないことが出来る。

これを使えば攻撃手段をもたない彼女でも相手に対処することが出来る。

例えば、相手に怒りや不満の感情を抱かせないことで余計な戦いを未然に防ぐことができ、また災害などで混乱することを防いだり不安を取り除くことなども出来る。しかし、あくまで消去法であり相手にある感情をピンポイントで抱かせるなんてことは出来ない。

また相手の演算、思考の妨害も出来る。これは20m以内で距離が近ければ近いほど効果が強まり、触れることが出来れば相手の思考を邪魔もしくは停止することが出来る。

例を挙げると、自分に対してボールが飛んでくるとする。普通なら取つて投げ返すなどの行動を起こすが、彼女が能力を使うと飛んでくるボールを認識できてもそれにどう対処すればいいのか分からなくなったり出来る。

以上二つの効果はどちらも能力を使用する相手の力量・器量等によつて効果が薄れたりする時があり、また同時に使用できる相手の数にも制限がある為過信は禁物である。

そして彼女の能力には、後もう一つ重要な力がある。

それは同じ精神系能力を受け付けないことだ。これは触れている対象にも効果を付与<sup>サイン</sup>することができ、『読心能力<sup>サイコメトリー</sup>』や『洗脳能力<sup>マジオナッテ</sup>』、さらには学園都市第五位の超能力者である食蜂操祈の『心理掌握<sup>メンタルアワード</sup>』ですら受け付けない強力なものだ。

ただし、代わりに上記の全能力は同じ精神系能力者には効果がない。

ということを踏まえてだ。

「よく考えたら……まさか高嶺、俺に能力使ってね？」

「ほえ？」

まるで意標を衝かれたような氣の抜けたような返事が返ってきた。

「だから、高嶺が俺に能力を使って俺の感情とかを操作してるんじやないかってことだよ」

「そ、そそそなことないわよ……」

動搖した。今、明らかに動搖した。といふかここまで動搖するとは思わなかつた。

「おい……やつぱりお前……」

「だ、だから……ち、違つて言つてるでしょ……」

「お前今明らかに動搖したよな?なんか凄く滑舌で乱れが感じられたんだが」

「いいじゃない。か、滑舌が乱れるここへりこ普通にあるわよ

「まあいいか、別に……」

「いいだ神命ははん?、と囁う。

「……まあ言つてゐる傍から能力使われた氣がしたんだけど?」

「やうやく

「やつ?じゃねえよ。絶対使つてゐるだろ

「はーはー、使つてますよ~

「ここつ……開き直りやがったよ

「何?使つやだめなの?使つちやいけないの?」

「つて今度は逆ギレかよ!何かここに来て高嶺との接し方が一気に分からなくなってきた……」

そして聞こえるのは大きな溜め息。

「もういい、行くか。ここで話してこてもいたゞかじが続くだけだしな

そう言って神命はドアの方ではなく正反対の窓側の壁に消えていく。

そして神命が出て行ったのを見廻ると、高嶺は部屋にあるベッドにばたんと倒れ込み残念そうに呟いた。

「何でバケちやうのかなあ……」

第十一話 田舎の始めの世界の絶望（後書き）

「メトロイ回？」

「お、いたな……」

現在の時刻は午後一時半を回った程度。

ここは第二十一学区 約2キロ四方の広さを持つ学園都市最小面積の学区であるが、地表面積が狭い代わりに地下数百メートルまで開発が行われており、その内部では地下施設が発展している。その中には高校が存在するほどで、その構造は調べれば調べるほど驚かれる。また、この学区の地上には一般的な家屋やビルは存在しない。

そんな学区に神命 選はたたずんでいた。

大きな建築物が存在しないこの学区には、ただ一つだけ一際目立つ建築物が存在した。太陽光発電や風力発電に頼れない地下街で用いる大量の電力を補うために設置された、ビル30階分程度の高さを持つ風力発電施設だ。その至る所に『巨大なジャングルジム』のよ

うに立体的に組み合わさった多くのプロペラが設置され、今現在も発電を行っている。

そんなビルの頂上に神命 選は座っていた。

彼の手には黒の双眼鏡、腰には小さな酸素ボンベが二つと資料が入っているポーチとカモフラージュされてそろは見えない拳銃のホールダーが装備されている。

別に彼はこんな真昼間から覗きをしているのでも、バードウォッチングをしているのではない。彼の視線の先には一人の少年。その少年の髪は真っ白で、その眼は双眼鏡越しでもはっきりと赤色だと認識できる。

その少年の名は アクセラレータ一方通行。そしてそれは当然、本名ではない。彼がそう呼ばれているのには彼の能力が起因する。

彼の能力は名にもなっている通り『一方通行』。

触れただけで、運動量・熱量・光・電気量等のあらゆるベクトルを変換する能力だ。よつて彼には物理的な攻撃はあるか、精神操作系、空間移動系など存在するあらゆる能力でも傷一つ『与える』ことは出来ない。

故に彼はこの学園都市から『最強』の称号である第一位の座が『与えられている。

そしてそんな誰もが憧れるような地位に着いているにも関わらず、彼は彼自身のレベル5という座の更に上、レベル6になるべく絶対能力進化実験に参加している。

そんな第一位から序列が五つ下の第六位である神命 選は、500mと遠く離れたこの位置から一方通行を発見したのだった。何故この場所が分かつたのかと言うと事前に入手していたその実験の資料から、次行われる実験の位置を数学区程度に見積もっていたからだ。

（少し離れてるな。見失わずに追いつけるか？）

さつきも言つた通りここは第二十一学区で地下施設が非常に発展している。いくら一方通行でも夏休みの昼間という時間帯で賑わつてゐるこの学区の地下でその実験の一部を行うとは思えないが、万が一でも地下に潜られ見失つてしまつたら流石の神命でも見つけ直すのは面倒だ。

（さてさて、早く近づいておきたい所だが、流石に空からじゃ少し目立つな……かと言つて地上からじゃ見失う可能性があるし……）

あれこれ考えるのも時間の無駄なので、400m程は空を進み距離を縮めることにした。

「そうと決まれば早速……指定した大気を選択、空間に固定」

そう呟いて彼は立ち上がり少しビルの上を移動すると、何もない空間に足を踏み出した。普通ならそのまま30m下へ落し下しあ陀仏なのだが、彼はその何も無い空間にまるで足場があるかのように二歩三歩と歩き始めた。

神命の能力は指定した物体を空間に固定し、それがたとえ流体であろうと触れたりその上に乗つたり出来る。

そして彼は強い風に煽られながらも一方通行に接近すべく歩を進め

る。

「流石に風力発電を行つてゐるだけあつて風が強いな」

そう言ひと彼は更に能力を発動する。

「風を選択、その方向を操作」

そう呟いた直後、彼の周り約30mの範囲を吹いていた風が一気に彼に集まり始めた。そして集まつた全ての風はその勢いを相殺し合うことなく一つの風として束ねられていく。

「こんなものかな」

その束ねられた風は風速40m程になつていて。そして追い風のよう歩いていた彼の背中を後押しし、その進行速度を加速していく。その加速は400mという距離をあつと言ひ間に移動すること可能にし、実際僅か数秒程しか掛からなかつた。

ここからは地上を進んで近づく。高層建築にそしいこの学区では空にいると一方通行に簡単に見つかってしまう可能性があるからだ。空中で一方通行の位置を確認した神命はとりあえず人目につかないよう地上に降りる。

「ここからは完全に自分の足で移動する訳だが……地上には本当に人が少ないな」

地上を歩く人間や走る車をあまり見かけない。先程一目につかないよう降りてきた自分が馬鹿馬鹿しくなる程だ。

そして彼は一方通行がいた方向へ走り出す。道路や鉄橋等を渡り数分間走っていると遂に白髪の少年の姿を遠目に確認することができた。

(少し近づきすぎたか)

神命と一方通行との距離は約150m。結構開いているようにも感じられるがそれは誤りである。選にとつてこの程度の距離は、簡単に0に縮めることも縮められることも出来てしまつ範囲、いわば既に相手の射程圏内だ。

そして彼は双眼鏡を手にし前を自分から遠ざかるように歩く少年が一方通行であることを確認する。

上半身に黒地に灰色の模様の入った趣味の悪いシャツを着た少年は間違いなくターゲットだった。

(さて始めるとしますか)

しかし、いくら一方通行の監視とは言つてもただの監視。ただ遠目に双眼鏡片手に尾行するのでは詰まらない。と言つても暇を潰す暇はない。

(退屈だな……)

そんなことを思つていると、いつの間にか一人は学区をまたいでいた。第一十一学区に隣接する第七学区へだ。少し歩くとそこには先程とは打つて変わつて人通りが多くなり、地上の風景が賑やかなものへと変わる。

それに伴い150mあつた距離を三分の一程度に縮める選。

ちょうど通りに面するコンビニを通り過ぎた時だった。突然、思い立つたかのように一方通行がこちらに進行方向を変えたのだ。

(まざい、バレたか?)

思わず身体が強張り距離を広げてしまつ神命だが、それは杞憂に終わることになる。

(何だ……コンビニかよ……)

一方通行が向かつたのは通り過ぎたコンビニだつた。そして彼は買うものを事前に決めていたのか一分程でそこから出ってきた。

彼が手にしていたのは缶コーヒーだった。彼はそれを歩きながらに開け、飲み始めた。

因みに、もう忘れ去れている人が大半だと思うが、この神命選という少年、コーヒーが大嫌いである。何故コーヒーなんて物がこの世に存在するのか、何故コーヒーなんて物が考案されたのかは、彼にとつて永遠の疑問である。

そんな彼は一方通行が缶コーヒーを飲み始めたのを見てこつと思つ。

(うわつ、一方通行の奴……コーヒーなんてクソ不味い泥水飲み始めやがつた)

と。もう確実に全世界のコーヒー愛飲者全員を敵に回した彼だが氣

にする様子はない。

しかし、そんな彼でも気にせざるを得ない出来事が起こった。先程彼が心の中で呴いた言葉を察知したかのように一方通行がこちらの方を凄い形相で確認してきたのだ。

またも身体が強張つてしまい、路地に身を隠す神命。周りを歩く人々は誰も一方通行のことを気には留めなかつたが、神命にとつては死活問題である。

そしてもう皆さんお気付きだらうが、一方通行は大の「コーヒー愛飲者である。さつきのような台詞を直接言われたら確実に殺される程の。

（何なんだよあいつ。一方通行ってこんな相手の思考を読む能力だつたのか？）

もう本気でそんな能力の一つや二つ持つっていても不思議だはないと思い始めた神命。

そんなことは知らずに再び歩き始める一方通行。

その後を慌てて追いかける神命だが、ここで一方通行がとある人物と接触し会話しているのを確認した。相手は少女、常盤台の制服の夏服を来たどこかの第三位と瓜二つだが頭に軍用ゴーグルを装着している少女。

誰が見てもあの御坂 美琴に見えてしまつその少女の正体を彼は知つてゐる。

「シスター、妹達か」

思わず声に出してしまった神命だが、そんな事を知らず会話を続ける一人は、その後裏路地へと消える。

そして彼はポーチに入っていた資料を見て呟く。

「絶対能力進化実験、第10030次実験開始か……」

## 第十四話 狂氣は更なる狂喜を呼ぶ

第七学区の裏路地で一人の少年と一人の少女が対峙していた。

少女と対峙する少年の髪と肌はとても白く、その目は鮮血の様にどこまでも赤い。その身体はとても華奢で、その腕や足は年齢に合わず細い。

彼の名は アクセラレータ 一方通行。学園都市に七人しかいない超能力者の第一位である。

その彼と対峙する少女は、この学園都市の五本指に数えられる名門校である常盤台中学の夏服を身に纏い、その頭には軍用ゴーグルが装着し肩にはAK系列の銃が掛けられている。

彼女に与えられた名前は検体番号10030号。彼女の顔はどこからどう見ても学園都市第三位の御坂 美琴ではあるが、彼女はその第三位の軍用クローン システムズ『妹達』である。

そしてその二人の頭上から眺める人影が一人。

彼の名は神命 選。彼もまたこの学園都市に七人しかいない超能力者の人、第六位の『自由選択』だ。

「絶対能力進化実験、第10030次実験開始か……」

選は手に取った資料を見ながら小さく呟いた。

彼が持っている資料に書かれている内容は『絶対能力進化実験』に関するものだ。そして一方通行と御坂第10030号が対峙する理由もそれと同じであった。

「十五時〇〇分になりました。これより第10030次実験を始めます」

そのあまりにも不釣合いな銃を構え、少女は散文的な口調で言つた。

先に動いたのは一方通行だつた。

彼はまず路地を形成する周辺の建物を一発殴る。通常殴つただけでは殴つた本人が痛い思いをするだけだが、彼が殴つた場所は大きく凹んでいた。その衝撃は壁に設置された室外機に的確に向かいそれを少女の頭上へと落下させる。

そしてその落下物を少女は軽い身のこなしで避け、室外機は大きな音を立て地面に落下しバラバラに碎ける。しかし一方通行の攻撃は止むことはない。

今度はその細い足からは考えられない程の跳躍で5mもの高さまでジャンプし、そこから少女へと狙いを定めその小さな頭蓋骨を踏み潰しに掛かる。

さつきの攻撃で少女の足はふらついたままであつた為次の攻撃は難無くとはいがむ、彼の蹴りをぎりぎりの所でかわす少女は、その体勢のまま持つっていた銃の標準を一方通行へと合わせた。

その氣味の悪い笑みを浮かべる悪魔へと標準をあわせた銃からは複数の銃声が発せられる。あまりにも震えるその標準では放つた弾丸の多くは大きく空を切る。

しかしその中にも、彼の胸部へと向かっているものがあつた。だが、少女がその弾丸を確認した瞬間、彼女が付けていた軍用ゴーグルに大きな穴が開いた。一方通行は何の攻撃の動作も見せなかつたが、彼女のゴーグルは粉々になつてゐる。

その一瞬の出来事に少女は呆然とし、そこへ歩んで来る一方通行の姿に怯えていた。そしてその恐怖は彼女の持っている銃をより強く握り、再び複数の銃声を響かせる。

しかしその銃声は今回も彼女自身に突き刺さった。彼女の右肩と腹部には風穴が開き、肉が抉れ、真っ赤な鮮血が溢れている。

そのあまりの激痛により手放した銃は地面へと転がり、血の池に浸つていた。

「何だア？ その程度かア？ オイオイ勘弁してくれよ。こっちはこのクソ詰まんねエ実験に参加してやつてンだ。もつとオレを樂しませる努力つてもンをしてみろよ」

だが、詰まらないと言つてゐるその口は大きくにやけ、有りもしない希望を踏み潰す様に一步一步少女の方へ近づいて来る。

「もう一万三回目だぞ？ ちつたアましな戦い方でもしてくれりやあ、楽に死なせてやつたのになア」

そう言いながら少女の前まで来た彼は先程彼女の腹部に開いた風穴に指を粗雑に突っ込む。悲鳴が聞こえた。それもそうだ、重症の傷に指を突っ込まれ中をかき回されているのだ。ぐちゅぐちゅと肉が削れるような音がし、さつきより多く血が溢れ出でくる。

しかし悲鳴はすぐに止んだ。突然少女の全身から血が噴出し、辺り一体が地の海へと姿を変える。

少女の命は消え、呆氣無く第10030次実験は終了した。

その光景を神命 選は彼らの頭上から見ていた。途中少女の外した弾丸が流れ弾として飛んできたりもしたが、そんなことは大した問題ではない。

この実験、神命には容易にその展開が予想できた。

別に彼には未来を予測できる能力が備わっているとか、人並み外れた洞察力があるとかそういう訳ではない。彼はこの実験が始まる前にある資料を目にしている。その中に今回の実験の筋書きが書かれていた。そしてそれと全く同じ出来事がたつた今、目の前で起つた。

人間、予期せぬ出来事が起つても当然驚くが、予期していた事と全く同じ事が目の前で起つると更に驚いてしまうこともあるものだ。

それは神命にとつても例外ではない。正直ここまで再現されると思わなかつた、というのが今の彼の心境である。それほどまでに完成された筋書き、否、予言と言つたほうがいいだらう。樹形図の設計者<sup>ダイアグラム</sup>が出した演算結果はあまりにも完璧すぎ、この実験を馬鹿馬鹿しく思つていた選に大きな衝撃を与えた、そして彼にこう思わせた。

「この実験は何としてでも止めなくてはならない」と。

そして彼は行動に出た。本来彼が描いていた計画にはない、成功する見込みはない行動。

別に今ここで終わらせる必要はない。この実験が終了するまでにはまだ時間がある。それは樹形図の設計者のお墨付きでもある。

彼がここで行つことは唯一つ。

少しでもこの実験に狂いを生じさせる。樹形図の設計者が組み立てたこのあまりにも正確な実験、しかしそれ故に、あまりにも纖細なものになってしまった実験。すでに樹形図の設計者が何者かに破壊されている現在の状態で、少しでも狂いを生じさせる。ただそれだけ。

しかし、たったそれだけの狂いがより大きな狂いを呼び寄せる。それを演算し直すには更に膨大な時間を要し、そしてそれは更に多大な損害を生み出すことを意味する。

現在、行われたこの実験の後始末に何人かの別の妹達が来ている。この場で戦闘を行えば確実に妨害される。つまり、戦闘を行うべきは一方通行がこの場を去つてしまはらくした時だ。

神命は、すでにこの場から立ち去るうとしている一方通行に目を向けると、すぐにその後を追つた。

一方通行は川原の近くにある土手を歩いていた。先程、退屈な実験を終わらせたところだ。しかし今日はまだ一つの実験を残している。今はその実験を行うポイントへ向かっている所だ。

そんな彼を邪魔するように後ろから一つの石が飛んできた。そんなに力は込められてはいない、しかし正確に頭部に命中するように放物線を描くその小さな石。一方通行はそれを視界に入れることすらなく反射し、その石は先程描いた放物線を逆に辿るように地面上に落下した。

彼は投げてきた犯人を捜そうと後ろを振り返る。しかし、そこには誰もいなかった。

すると今度は振り返った彼の背中にさつきの様な放物線ではなく、力が込められ直線的に石が投げられた。しかしそれも彼は視界に入ることなく反射し、石はまた逆の軌跡を辿るように飛んでいく。

彼はまた振り返る。しかしあやはり、そこには誰の姿も無い。

( 何だア ? )

一方通行は苛つきながらに思つ。どうせまたそちら辺の不良が喧嘩を吹つかけて来たのだろうと。

「面白H、隠れてねHで早く出て来いよHアビも。とつとつ肉の塊

にしてやるからよ」

そう言つと突然田の前の何も無い空間から滲み出るよつとして一人の人が現われた。

「肉の塊にされるのは困るな

腑抜けたような声で返事をしていくその男の顔はフードを被つておりよく見えない。そして完全にその姿を現した人影は言葉を続ける。

「まあニトビリジやなくて、五下なんだけどな」

自嘲氣味に話すその声はやけに不良のものとは全く違つていた。

「てめー、オレが誰だか分かつてそんな口利いてンだらつなア？」

「勿論知つてゐる。学園都市最強の超能力者の一方通行だろ？それどころかわざわざまでやつてた事も、これからやる予定の事も全部知つてる」

「実験のことを知つてゐることは、オマエ暗部か実験関係者か？」

「さあな

余裕がこぼれるほどの男の口調。

「さて、そんなどつでもいい事なんか置いといて、これから俺と一戦交えないか？」

なんだコイツ、結局その辺の不良と変わんねェ馬鹿か？と疑問に思

「最強は、退屈じの者にそれを承認する。

「ここだらう面立。さうの意味は撤回してある。代わりに肉も残さず消してやるよ!!」アト

## 第十四話 狂氣は更なる狂喜を呼ぶ（後書き）

一方さんとの接觸。

一方さんの口調つて案外難しいもんだね。

## 第十五話 絶対可避の勝負の結末

「イイザニア、どうからでも掛かって来イよ」

神命 選はとある川沿いの土手である少年と対峙していた。

その少年の呼び名は一方通行。学園都市最強の超能力者である。

何故選が学園都市最強と対峙しているのか、それは彼が目の当たりにしてしまったからだ、絶対能力進化実験の実態を。最初は無理だと小馬鹿にしていた程だった。しかし先程見てしまった、この実験が単なる夢物語ではないことを。

そして思った。この実験は何としても止めなくてはならない、と。

そして彼は今、実験を止める為にその実験の核である一方通行と対峙していた。

ここで最強を倒す訳ではない。ただこの実験に歪みを止めるだけ、ただそれだけの為に今ここに彼は立っている。

どこからでも掛かって来いと、そう言われた。だが正直な所、こちらから相手に攻撃を加えるつもりは無い。しかし、無いからこそ相手から掛かってきて欲しい、寧ろそっちの方が自分としてはやり易い、そう思つてゐる神命。

どうせ普通の攻撃は反射されるのだ。攻撃する手段が無い訳ではないが、倒すつもりの無いこの戦闘で、いずれまた戦うかもしない相手に、数少ない有効な攻撃手段を見す見すばりして仕舞う程の余裕は無いし、それ程馬鹿でもない。

こんな状況でこちらから無駄だと分かっている攻撃を放ちたくはない。弾丸も有限だ。

（全く……我ながら面倒な奴を敵に回したものだな……）

そういう言つても仕方が無い。既に戦いは始まつてゐるのだ。

神命は川の方へと走り出した。そしていつもの様に彼は弦く。

「水を選択、その形状・座標を操作」

そう弦くと彼は河原を横切り水面へと足を伸ばす。普通ならば水の

上に立とうとすれば沈んでしまうが、彼は違う。彼はその能力によつて何にでも触れることが出来る。例えそれが水や空気等の流体であつてもだ。

彼は水面に立つ。その姿を一方通行は関心しながら見ていた。

しかし、神命の動きはそれだけに留まらない。突然彼の立つていた水面が揺れだし始めた。そう思った瞬間、彼の周辺に存在する川の水が彼を乗せて5m程浮き上がり、彼を包み込むように球体へとその形を変えた。その直径約10mにもなる。

「何だてめエ、レベル4クラスの水流操作系能力者かア？」

一方通行が選に問い合わせる。

「残念、ハズレだ」

彼の声は水流の音に紛れながらそれだけ答えると、その水で出来た球体ごと一方通行の方へと勢いよく突撃して来た。

しかし、一方通行の方にこれに対処するような素振りは無い。

だが、彼に向かってくる物体には変化があつた。向かってくる巨大な水球は彼に接触するその直前にその形を大きく変えたのだ。まるでその球体から何本もの腕が伸びるよつに数十本もの水柱が出現し、四方八方から彼を襲う。

しかし、これでも一方通行が動く気配を見せない。

そして四方八方から同時にその攻撃が届いた瞬間、その大量の水は

一方通行の能力によつてその形を変化させた。

それは一本の槍を槍を形成し、その矛先をまだ浮いた水の中にいる選へと向ける。

「やべつ、水を拒絶、身体を透過」

慌ててそう神命がそう叫ぶとその直後、彼の体をその槍は通り抜けそれを形成していた水は辺りを水溜りへと変える。

「あー、危ない危ない」

案外余裕そうな声で神命は呟く。またそれを証明するかのように、彼の体には傷ビビリか水滴一つすら当たつておらず、その服は乾いたままである。

「オマエ、何系の能力者だ?」

「その質問、よく聞かれるな。だがそんな質問にわざわざ答える程俺がお人好しに見えるか?」

神命は再び投げられた聞き飽きた質問にやる気無く答えた。

「見えねエ、だが最後にはオマエが何者かどんな能力か自分から話したくなる」

「それは楽しみだが、残念ながら多分そうなる前に俺はこの場から消えてると思うな」

「肉片一つ残さずかア?」

「そんな意味で言つた訳じゃないんだが、まあどうせ俺には……」

言い切る前に一方通行が神命に向かって攻撃仕掛けってきた。

「何で俺の相手をする奴はみんな俺の話を最後まで聞かないんだ？」

呆れたように呟く神命。

「それはオマエが人の話を最後まで聞かねエからだろ？」

「ああ、それ言えてるな」

納得した神命の顔に恐ろしい勢いで拳が繰り出される。それをまた凄い反射神経で首を横に反らし神命は避ける。

「知つてるか？どれだけ強力な攻撃でも、当たらなければどうと言ふことはないつてさあ？」

「オマエ俺を馬鹿にしてンのか？」

一方通行は神命の肩の上に伸びている腕をそのまま横薙ぎに振るつ。しかし、これも神命は身を屈める形で避けてしまつ。

「じゃあこの俺に攻撃の一つでも当ててみるよ」

「誰にそんな口利いてんだ？」

「最強だろ？」

「ちっ、ムカつく野郎だ」

「それもよく言われるな、不思議な事に」

次に一方通行は地面を思い切り右足で踏みつける。すると地面は大きくひび割れその間から石や砂が細かいものから大きなものまで神命目掛けて飛んでくる。しかしこれにも神命は冷静に対処する。

「石と砂を拒絶、身体を透過」

そう咳くだけで飛んできた石と砂は彼の体を通り抜ける。

「当たつてないぞ、調子でも悪いのか？」

「黙れクソが、避けることしか能の無い臆病者の癖にほざいてんじやねエゾ」

「反論はしないぞ？全くその通りだからな、だがその臆病者に一回もひつ……」

会話は途切れた。否、途切れたと言つよりも遮られたと言つた方が正しい。

「一方通行、すぐにその戦闘を終了して下さること//サカ10778号はこの戦闘が今後の実験にどれ程の影響を及ぼすか推測しながら戦闘の制止を試みます」

一方通行で隠れて神尊からは見えないが、前方から聞こえる声の主

は聞き覚えのある少女のものだった。

「「つるせえクズが、今いい所なんだよ。コイツを一発でも殴りねえと氣が済まね」」

しかしつものの散文的な口調で少女は話を続ける。

「しかしその一発の攻撃が今後の実験に大きな影響を与えるかもしれませんと」」サカは懸念の意を表します」

「ちつ、またかよ」

「唯でさえあなたは五日前にもオリジナルと戦闘を行つてるのですから少しばかり重してもらいたいものですが」」サカは心情を吐露します」

「分かった、分かったよ止めりやい」」だろ。つたく堅苦しげりありやしね」」

そう言つて少女とは反対の方向、神命が居たはずの方向へ体を向ける最強。しかし、そこには既に神命の姿は無かつた。

「クソが……」

一方通行はただそれだけ言い放つた。

「はあ、まあこんなものかな」

神命はとある鉄橋の上で呟いた。

「一応第六位とは言え超能力者と戦闘したんだ、少しは実験も狂つただろ」

やり終えた達成感と疲労感に浸つっていたのだ。

「今日はとりあえず寮に帰るか。まだ時間はあるし、次の行動は明日だな」

しかし翌日、彼のやる気とは裏腹に彼の耳に驚くべき情報が入ってきた。

それは昨晚『学園都市最強の超能力者』が『学園都市最弱の無能力者』に敗れたというものだった。



## 第十五話 絶対可避の勝負の結末（後書き）

今回の戦闘はお互いに本気を出していませんね。  
まあそれは後々の戦闘のネタが減るのを抑えるためなんですが。  
感想等あつたら送つてください。

## 第十六話 激んだ過去と冒下がり

### 魔術

科学とは違う異世界の法則によつて様々な超常現象を引き起こす技術。

しかし、その技術はいわば科学とは相容れない、対角線上の技術。

それ故に科学が生み出した超能力とも相容れる」との無いもの。

そしてその超能力者　　才能ある者が魔術を使用しようとする  
拒絶反応を起こす。それは才能ある者への罰であり、時にそれは死  
をも招いてしまう。

しかし、ここで疑問が浮かび上がる。何故こんな事が証明されたの  
か、何故相容れないはずの科学と魔術の産物が交わろうとしてしま  
ったのかだ。

その答えはとある一つの実験に隠されていた。

二十年程前

それは嘗ての学園都市とイギリス清教のそれぞれ一部で起こつた。

『新たな能力者を作り出す』実験。

その実験では、魔術と超能力を共に使いこなす者を作り出そうとしたが、その結果は尽く失敗。超能力者が魔術を使用するとその規模によるが、身体に過負荷がかかりその反動が被験者に降り注いだ。

その反動が身体のどこにかかるかは完全に不定であり、場合によつては死。よつてこの実験で超能力と魔術を併用することは不可能、そう結論付けられた時点での実験はイギリス清教と同じく英國に存在する騎士派という組織の妨害によつて凍結した。

しかし十年前、不可能と結論付けられたはずのこの実験が、再び決行された。

何故か、それは学園都市に異質の能力者が初めて取り寄せられたからだ。

『原石』

学園都市のような人工的な手段に依らず、超能力を発現させた天然の異能者。偶発的に周囲の環境が『開発』と同じ効果をもたらした

場合に発生する異例中の異例。その存在は稀少で世界に僅か50人程しか存在しない。

その『原石』の初の素体がこの学園都市に非公式に取り寄せられた。

学園都市の科学者はこの『原石』がもたらす結果に大いに期待し、その研究を志願した。既存の能力者との比較実験 その数え切れない程の実験の火蓋を切つたのがこの実験だった。

しかし、その結果は失敗続きだった。どんな魔術を使ってもその結果は同様だった。既存の能力者との比較、それも試みられたが全く異世界の法則に対し科学者達はさじを投げた。それは魔術師にとても同じだった。

科学と魔術、双方の明らかな情報の不足、それが発覚しこの実験もまたその『原石』の研究価値の保持の為すぐに凍結された。

そしてその『原石』はその後も数多くの実験に身を投じる事となる。

その少年の名は、神命 選。

後にカリキュラムも受けずそのレベルを3から5まで独力で上げ、それを到達した時、彼の正体を知る一部の研究者に『研磨原石』と呼ばれた少年の名だ。

九月一日、それは学園都市中の学校が一斉に始業式を迎える華々しい日であり、一部の学生にとつては夏休みを閉ざした憂鬱で忌むべき日でもある。

そんな日の午前七時頃にこの学園都市の外壁の一箇所から一人の人物がほぼ同時に侵入したらしい。

こんな情報を耳にした神命だが正直そんなことはどうでもいい。どうせ侵入者は警備員や風紀委員が対処に回るだけで、彼が出る幕はないからである。

その日の昼下がり、始業式であり午前授業であつたせいか、神命が寄つた駅周辺の地下街は多くの学生で賑わっていた。

学園都市には地下街が多い。と言うのも日本には地震が多く、またその国土も狭い。よつてより高度な地下施設の建設技術が必要であり、この学園都市の至る所が掘り返されたのだ。その究極形態が第二十一学区と言えよう。が、彼がいるのは二十一学区ではない。

神命がいるのは第七学区の地下街の中の一つだ。ここには数多くの

娯楽施設が詰め込まれているが、彼は気にも留めない。

彼が入ったのは学食レストランの一つ。しかしここに入った理由は特に無く、なんとなくである。この店には学園都市に存在する多くの学校の学食が取り揃えられている。多くの学校が密集する学園都市では自分が通っている学校以外の学食を食べてみたいと言う声が多く、このような店は別に珍しいものではない。

その店の中で神命は画板のように大きなメニューを広げ、紅茶のおいしそうな学校を一つ選び適当に注文した。紅茶さえあれば何でもいいと考えている神命はこの店に入る前、同じく地下街にある喫茶店に寄ったのだがかなり混んでいたためこちらの店にしたのだ。

注文をしてから数分後、頼んだ料理が届けられた。手前の皿には二つの丸いパンが、右手にはポタージュ的なものが、一番大きな皿にはちょっとしたサラダとオムレツが乗っていた。そして彼の手には暖かい紅茶の入ったティー カップ。

彼はまずその紅茶を一口飲むと満足したようにテーブルに置き、他の料理にも手を付け始める。

今日は月極とは一緒ではない。既に学校は終わっているはずであり、いくら地下街にいるとしても携帯くらい通じるはずだが着信は無い。頭に疑問符を浮かべる神命だが、それはそれで穏やかな日が過ぎ去る。そうだと忘れることにした。

そんな事を考えていた彼に視界の隅のテーブルからちらちらと視線を向ける少女がいた。その少女はこの学園都市では全く見かけない修道服を着ており、その柄は丁度彼のテーブルに置いてあるティーカップのような白地に銀の刺繡が施されたものだった。

また、彼女の席には彼と同年齢くらいのシンシン頭の少年と霧ヶ丘女学院の制服を着た少女が座つており、その会話が神命の耳にも少しだけだが聞こえていた。

「とつま。これ何でも選んじゃつてもいいの？」

「あー、高いのは禁止な」

彼らは先程神命が広げていたメニューと同じものを広げ、その一つに少女が指をさした。

「私はこれがいいかも」

「んー？ どれどれ」

少年はその指の先に注目して一瞬だけ固まつた。

「……、」

そしてメニューを開くと、その角でいきなり少女の頭を引っ叩いた。

「痛つたあー？ どうしていきなり人の頭を叩くのー？」

「言つたはずだ、高いものは禁止だとーってかシッコ!! 待ちじやなかつたのか今のはー！」

その光景を見ていた神命は、そのツンツン頭の少年の顔を何かの資料で見たことがあるのを思い出したが、その詳細を喉まで出かかっているのに思い出せず、代わりにこんな状態が『T.O.T現象』と言う現象だという無駄知識を思い出していた。

「何か見たことあるんだよな……」

「何とか思い出そうとするが出てこない。

「ああもう黙だ。何も出てこないな……」

大人しく諦めることにした神命。

そんな事を言つていてる内にテーブルにある全ての食器が空になつた。その後更に一杯の紅茶を飲み、少し休むと彼は店を出る。その時ツンツン頭の少年達は既に店の中にはいなかつた。

店を出て少しベンチで座つていようか、そう考えていた時だつた。突然頭の中に直接声が聞こえてきた。

(念話  
能力か)  
テレパス

その声は自分を風紀委員だと最初に告げ、この地下街にテロリストが紛れ込んでおり、特別警戒宣言が発令され、間もなく隔壁を降ろして地下街を閉鎖する為避難するよつこと続けた。

「マジかよ

人が折角心地よい昼夜がりを堪能しようとしていたのに、と溜め息混じりに言つて出口に向かおうとする。

通路の先には先程のツンツン頭の少年と他二名の姿も見え、既に出口へ向かっているようだった。

しかし、その動きは突然声によつて妨げられた。

『見いつけた』

それは女の声だつた。ただし、何も無いはずの壁から聞こえた。

その三人の壁際、丁度少年の目線の辺りに手の平サイズ程の泥がへばりついていた。それは少し離れた神命からでも確認することが出来る。

それは単なる泥だつた。

ただし、その泥の中央に、人間の眼球が沈んでいたことを除いては。

第十六話 激んだ過去と下がり（後編）

上条さん初登場。

## 第十七話 薄明かりと忍び寄る影

『見つけた』

その声は壁から聞こえた。女の声だ。

壁にはただ、茶色い泥がへばり付いていた。

その中には人間の眼球が沈み、その視線はツンツン頭の少年とティーカップのような修道服を着たシスター、霧が丘文学院の制服を着た少女の三人に向けられていた。

『うふ。うふふ。うふうふうふふ。禁書目録に幻想殺しに、虚数学区の鍵。どれがいいかしら。どれでもいいのかしら。くふふ、迷っちゃう。よりどりみどりで困っちゃわあ』

その声に虚数学区の鍵と呼ばれた少女はその声にただキヨトンとしているだけだった。現実味の無くガラスで作ったレプリカに見えるのかも知れない。

しかし禁書田録と呼ばれた少女はその眼を冷静に眺めていた。

『ま、全部ぶつ壊しちまえは手つ取り早えか』

先程まで妖艶でしかじどこと無く錆び付いたような声は、場末の酒場でも聞けないような粗暴な声色へと切り替わる。

ツンツン頭の少年はこの奇妙な物体が超能力によるものなのか、魔術によるものなのか判断出来ない様子であつたが、その目をじっと眺めていた少女がすぐにその答えを提示した。

「土より出でる人の虚像 そのカバラの術式、アレンジの仕方がウチと良く似てるね。ゴダヤの守護者たるゴーレムを無理やり英國の守護天使に置き換えていたる辺りなんか、特に」

しかしその言葉に少年は更に困惑した表情を浮かべる。

その様子を少し離れた所から見ている少年 神命 選にもその会話は聞こえていた。

(何だあいつら？魔術を知ってるのか？)

彼も一応は魔術の存在を知つてはいるが、持つてているのは基本的な知識だけでしかない為、そのシスターが言つた言葉の意味を理解することは出来なかつた。

だが、彼が今氣にしている事はその事ではない。壁に張り付いている物体から聞こえた声が放つた言葉の中に、ある単語が入つていた事だ。

『幻想殺し（イマジンブレイカー）』

彼はその単語を聞いたことがあつた。その能力を持つ少年について調べたこともあつた。

何故か？それはほんの一週間程前、神命が対峙したとある最強。その最強がその夜ある一人の無能力者に倒されたと言つ情報が耳に届いたからだ。

あの最強を倒した？どうやって？色々な疑問が浮かびその詳細を調べた時に出てきたのが、この『幻想殺し』という単語とある少年のデータだった。

確か、その少年の特徴はツンツンとした髪型、そう丁度目の前にいる少年の様な髪型。その体型は中肉中背、そつそつ丁度目の前にいる少年の様な……。

「あれ？あいつじゃね？」

一度は会いたいと思っていた少年がこんな所にいるとは、何故すぐにある特徴的な髪型で思い出さなかつたんだと色々な思考が頭の中を駆け巡る中、とりあえずちゃんと会つて話そうといつ結論に神命は至つた。

まだ、その幻想殺し達はゴーレムがなんとか、魔術師がなんとかと言つてゐるが内容を理解するほどの知識がない神命は気にせず近づく。

「つて事は……」この魔術師がテロリストさんつて訳か

幻想殺しがこつ喋つた後、再び壁の物体からの声が響いた。

『うふ、テロリスト？テロリスト！うふふ。テロリストつていつのは、じうじう真似をする人達を指すのかしら？』

声が止むと壁の泥と眼球は、ぱしゃっと音を立てて弾け、壁の中に溶けて消えた。

瞬間、

ガゴン、と音を立て、地下街全体が大きく揺れた。

「何だつ？」

神命は叫んだ。

まるで嵐の中に放り出され漂う小さな船の様に学生達はよろめいた。

さらにもう一度、今度は砲弾を撃たれたかのような揺れが神命達を襲う。

天井に敷き詰められるタイルの隙間からぱらぱらと粉塵が舞い、蛍光灯が一、三度ちらつくといきなり全ての照明が消えた。そして非常等の電源が入り、地下街を赤く照ら始める。

それまでのんびりと歩いていた学生達はパニックに陥り、猛牛のように一斉に出口へと走り始めた。

今度は低く、重たい音が響き始めた。

警備員が予定よりも早く隔壁を降ろし始めたのだった。そして、その重く分厚い鋼鉄の壁は学生達の波の最後尾を引き裂くように分断した。閉じ込められた。

取り残された学生はその高くそびえる城壁を叩き必死に助けを求めている。

『さあ、パーティーを始めましょう　　土の被つた泥臭え墓穴の中で、存分に泣きやがれ』

女の声が聞こえ、さらにもう一度大きな振動が地下街を襲った。

女の声と振動が止むと神命は辺りを確認し、やはりまず幻想殺しのところに向かう。

「……、むこうはこっちの顔を確かめてから襲つてきたみたいだし、迎え撃つしかなさそうだ。インデックス、風斬とどつかに隠れてろ」

幻想殺しは連れの少女二人に指示する。

（敵がインデックスや風斬に手を出す前に、こちらから討つて出る。くそ、敵が何人いるかだけでも分かれば策を練る事もできそうだけど……）

そんな事を考えている彼に神命は話しかけた。

「今のは何だ？ 魔術か？」

適当に食いつきそうな単語を並べてみる。

「！？」

予想通りの反応。

「ああ、勘違いするなよ。俺は魔術師じゃない、単なる超能力者だ」

「魔術を知っているのか？」

「ああ、多少知ってる」

「神命が魔術を知っていることに驚く幻想殺し。

「自己紹介が遅れた。俺は神命 選、一応能力者をやつてる」

「俺は上じょ『上条 当麻だろ?』……神命、何で俺の名前知ってるだ?」

自分の名前を言い当てられたことにまたも上条は驚く。

「まあ色々あるんだ、色々と。それより今の声の主って魔術師か?」

「ああ。どうやらこの地下街に紛れ込んだのがそいつみたいだ」

「さつきの会話からすると、あんたらが狙われている?」

「その通りだ。これからこの一人を安全な所に避難させよつとしていた所で……」

そこで上条の後ろに隠れていた修道服の少女が口を挟んだ。

「どうま、この人ちょっとおかしいかも」

「おいら、初対面の人にはな」と言つたら失礼だろ……」

「でも、この人どういう原理か分からぬけど、地脈のエネルギーを無理やり捻じ曲げてかき集めてるんだよ」

「「地脈？」」

一人の頭上に疑問符が浮かぶ。

「地脈っていうのは、簡単に言つと大地に流れるエネルギーの川みたいなものなんだよ。その力は大きくて魔道書の原典の魔力の源として利用されているんだよ」

「で、俺がそのエネルギーを集めていると？」

「おいインテックス、神命は魔術師じゃないんだ。そんなことしたって何の得も無いだろ？」

「でも、そうなんだよ」

そして何故か、風斬と呼ばれたもう一人の少女が神命の方を何か言いたそうに見ているが、彼はそれに気づかない。

「そんなことより急がなくていいのか。狙われてんだろ？」

「そうだな。とりあえず場所を変えよう。ここからじゃ外へ出られないしな」

と、次の瞬間手近な曲がり角からカツンという足音が聞こえた。

そこで、条はインテックスと風斬を、インテックスは上条と風斬を底おうとしたため足がもつれたらしい。一人は転んでしまい、上条が下になる形で重なってしまった。インテックスの腕に押しつぶされそうになつている三毛猫が鳴きながら前足をばたつかせている。

かつかつと今も足音は近づいて来る。

曲がり角の向こうから、女の声が飛んできた。

「あら？ 猫の鳴き声が聞こえますわね」

「黒子。 アンタ動物に興味ないんじゃなかつたつけ？」

「かくいづお姉様は興味がおありでしたよね」

「べ、別に私は……」

「あらあ。 わたくし、知つてますのよ。 お姉様には寮の裏手にたむろつてる猫達にご飯を上げること日課がある事を。 しかし体から発せられる微弱な電磁波のせいでいつも一匹残らず逃げられて、猫缶片手に一人でポツンと佇む羽目になつていてる事も……」

「何故それを……ー？ つか黒子！ アンタまたストーキングして……！」

曲がり角から出てきた二人の少女は四人を発見して足を止めた。 二人の名前は御坂 美琴と白井 黒子であり、もちろん敵ではない。

「アンタこんなトコで女の子に押し倒されて何やつてる訳？」

「あらあらこんな時間から大胆です」と

それに対し上条の上から起き上がることもなくインテックスは御坂と張り合つてゐるようだが、神命はどういえば、

「お、久しぶりだな。ええと……黒井？」

「白井ですの。でもまあ、お久しぶりですの。あなたは相変わらずのようですね」

何か横では上条が、二人の少女に問い合わせられひいつーとなつてゐるが氣にはしない。

「風紀委員の仕事か？」

「ええ、現在は地下街に取り残された方達の脱出の手伝いを行つておりますの。これでも一応『空間移動』の使い手ですので」

「結構面倒なことになつてゐみたいだな」

「まったく、テロリストの侵入を許すだなんて、わたくしも氣を入れ直す必要があるようですね。今朝は一組の侵入者がいたと聞きますし……」

話しているとようやく上条達の『ごたも終わつたらしい。先程までオロオロしていた風斬はまつとしたように胸を撫で下ろして』いる。

「そういうば何でアンタはここにいるのよ？」

御坂が神命に質問する。

「昼食食べに来ただけだけど。つていうかそろそろ人命救助に向かつたほうがいいんじゃないか？ここも戦闘の危険があるだろうしな」

「そうですわね。今は人命が最重要ですの。予定を繰り上げて隔壁

を降ろしたのなら、もう時間がありませんわ。早く避難を済ませませんと」

現在も隔壁の辺りに逃げ遅れた学生達数十人が開くはずの無い鋼鉄の壁をこじ開けようと無駄な努力を続けていた。

「分かった。白井、お前が閉じ込められた人達を脱出させてる間は、俺が時間を稼ぐから、お前はあいつらを外に出してやつてくれ」

上条が言った瞬間、インデックスと御坂と白井がそれぞれ三方から同時にどつかれた。

「アンタが真っ先に逃げるの。ってかアンタ達がピンポイントで狙われてんでしょうが。一番危険な人間を戦場に残すと思つてんのかアンタは」

三人の中を代表するように御坂が言った。

「……つつてもなあ」上条が頭を？いて、「俺の右手はあらゆる能力を無効化させちまう。白井のも例外じゃねーぞ」

「そりいえば一度失敗してましたわね。でもわたくし飛ばせるのは二人が限界ですわよ」

すると今度は誰がこの場に残るかで口論となつた。上条は最初風斬とインデックスを脱出させることにしたが、すぐに御坂に却下された。次に風斬と御坂が脱出する案が提出されたが、またもインデックスに却下された。

上条が散々悩んだ挙句、インデックスと御坂が脱出することになつ

た。もちろん御坂とインテックスは反論しようとしたが、すぐさま白井に地上へと連れて行かれる。

「まずは一人か、悪いな風斬。お前だけ残しちまつて

「……う、ううん。私は別に……最後でも良い、です」

「そういえば、お前はまだするんだ、神罰?」

「俺か? 俺は出ようと思えばいつでも出られるからな。風斬つて言ったつけ? ビックリする、よければ上に送るが……」

言いかけた神命の言葉は途中で遮られた。

再び地下街全体が揺れたからだ。

だが今回は爆心地は近そうだった。薄暗い通路の奥から、何やら銃声らしき爆発音と、人の怒号や絶叫らしき声まで流れてくる。

「こよいよ本命のお出ましが……風斬、お前はここで白井が来るのを待つってくれ」

「上条、俺も行く。一応これでもレベル5だからな」

「お前レベル5だったのか?」

「最初に超能力者だつて言つただろ? 因みに第六位だ。ついていつも足手まといにはならねえよ」

「さうか。じゃあ援護を頼む」

「行くぞ」

二人は一人の少女を残し薄暗く非常等が照らす通路を駆けて行つた。

## 第十七話 薄明かりと忍び寄る影（後書き）

何気ないの話つてオリキャラ混ぜるの難しい気がする。

## 第十八話 暗がりに潜む者

シェリー＝クロムウェルは銃声と硝煙の渦巻く中戦場を優雅に歩いていた。

彼女の前には、巨大な盾のように石像が立っていた。石像は地下街のタイルや看板や支柱などを無理矢理丸めた粘土のように整えたものだった。その大きさは全長4mもあり、その頭は地下街の天井に押し付けられ斜めに傾いていた。

その石像の前には、地下街の喫茶店にあつたテーブルやソファーなどを固めて作られたバリケードに身を隠すように警備員アンチスキルがいた。漆黒の装身具に身を固めた彼らは、バリケードから顔を出すようにライフルを撃ち続けている。彼らは装填の隙を作らないように三人一組になり一方のチームが装填をしている間に、もう片方のチームが射撃を行っていた。まるで織田信長の鉄砲隊のようだ。

（腕はそこそこだが、品が無いわ）

シェリーはつまらなそうに評価を下した。

彼女の白いオイルペイントが宙を泳がせるとそれが命令文となり、  
巨大な石像 ゴーレム＝エリスが歩を進める。

何百発もの銃弾がエリスに直撃しても、それは決定打にならない。

地下通路は狭くエリスは完全に通路を遮り、シェリーには弾丸は当たらない。

カチン、といつ金属音が響いた。

警備員の一人が業を煮やし手榴弾のピンを抜いたのだ。彼は石像に向こうにいるシェリーへとダメージを『えようと、石像の石像の股下をぐぐるよう』に手榴弾を投げようとして、

「エリス」

その直前、シェリーはオイルパステルを空中で一閃した。

石像が地を踏み鳴らす。またも地下街が小船が波に揺られるように大きく揺れた。それは警備員が手榴弾から手を離そうとした瞬間の出来事だった。タイミングを失った彼の手からピンの抜けた手榴弾がポトリと彼の足元へと落ちた。

怒号、そして爆発。

爆発から逃れた者達はバリケードから飛び出してしまい、ライフルを手放してしまっている。

再びオイルパステルが空気を切る。その石像を止めるには戦力が足りなすぎた。

神命 選と上条 当麻は非常灯に薄暗く照らされた通路を走っていた。

通路の先からは銃声のような爆発音と人間の怒号や絶叫が響いてくる。

「警備員と交戦中か」

神命が喋っている間も叫ぶ声は続き徐々に近づいていた。

「いたぞ！！」

角を曲がった神命が叫んだ。

「おいおい、酷い有様だな」

戦場、本物の戦場だ。上条はあまりの惨状に口を手で覆つていそうになつた。目の前に広がっている光景、傷付き、折れ曲がり、引き裂かれた人間が柱や壁に寄りかかっていた。

その数は二十人弱。

（つづか、どんな野郎なんだ。こんだけの警備員相手にここまでや

れる魔術師つてのは（）

上条は絶句する。詳しい事情を知らない彼でも、何となく『科学勢力』と『魔術勢力』があり、一対一できちんとバランスを取つていたのは知つていた。

だが、蓋を開ければこの様だ。

それは神命にとつても同じだ。科学側がいつも簡単にやられてしまうとは、彼も思つていなかつた。

「どうする上条、先を急ぐか？」

しかし上条は答えない。そこへまだ動ける警備員の一人が怒号が飛ばしてきた。

「そこの少年！ 一体そこで何をしてるじやん！？」

その声にその場にいた数十名の警備員達が振り返つた。

「くそ、用詠先生んとコの悪ガキじやん。どうした、閉じ込められたの？だから隔壁の閉鎖を早めるなつて言つたじやん！少年、逃げるなら方向が逆！ A 03ゲートまで行けば風紀委員が詰めてるから、出られないまでもまずはそこへ退避！ メットも持つていけ、無いよりはマジじやん！」

警備員の女性は、怒鳴りながら皿の装備品を上条へと投げつける。

（……、）

上条はもう一度周囲を見渡す。

上条は神命の方を一度だけ見て小さくうなづき、さらに奥へと歩を進める。

「ど！」へ行こうとしてんの、少年！ええい、体が動かないじゃん！誰でも良いからそこの民間人を取り押さえて！—！」

警備員が手を伸ばすが彼の体には届かない。他の警備員達も彼を止めようとするが、唯の高校生一人を止めるにも出来ないほどに体力が残されてはいない。

「やめろ、黄泉川」

黄泉川。それは上条に怒号を飛ばした警備員の名。神命は彼女とは以前逃走劇を演じたことがあり、知り合いである。

「神命、何であんたまでここにいるじゃん。早くあの少年を止めるじゃん！—！」

「お前、ここから逃げたほうが良いんじゃないか？こんな状態でお前達警備員に何が出来る？それにあいつだって何も考えないでここまで来た訳じゃない。何の覚悟も無しにここにいる訳じゃない。何の目的も無しに奥に進んでいる訳じゃない」

上条とはついたき会つたばかりだ。彼の気持ちを知ったように口を利くべきではないのかもしれない。しかし、上条はあの一方通行を倒した。それは死ぬ覚悟があつてこそその行動だろう、彼だってその正体を知らずに立ち向かつた訳ではないはずだ。その時は第三位の為に戦つた。

なら今回は？ その答えはさつき知った。恐らく今回も、いやこれからもその少年は死を覚悟し多くの出来事に立ち向かっていくだろう。上条は止まらない。それこそ知った口を利くなと言われそうだが、それでも神命は続ける。

「あいつのためを思つなら止めるべきじゃない。いいか、あいつの安全は保障してやる。だから、お前はここから逃げろ」「ひ

そう言って彼女の前から立ち去ろうとする神命。後ろからは彼らを止める声が響いてきたが彼らは振り返ることはない。

神命は先に行つた上条との距離を詰めるように小走りにその場を去る。

（くそったれが……）

上条 当麻は、思わず舌打ちをした。

彼はその右手を握り締める。

そして前を見据えてただ走る。たとえ正攻法で攻めた所で勝ち目がなくとも、相手が魔術師だというのなら、切り札たるこの右手を使えば戦局をひっくり返せるかもしない。それにさつき出合った神

命という超能力者と共に闘すればあるいは、と考えながら。

上条がさうに通路の奥へ向かうと、何かがおかしい事に気づいた。

(物音が……しない?)

通路の奥では銃撃戦が繰り広げられているはずだが、それにしては静かすぎる。

嫌な予感しかしなかつた。

(まさか……)

薄暗く、赤い照明に照らされた通路の先へ彼は走る。その先にあつたものは、

「うふ。 こんなちは。 うふふ。 うふふうふ」

錆びた女の声が通路に響く。 漆黒のドレスを着た、荒れた金髪にチヨコレートみたいな肌の女が立っている。

そして彼女の盾になるように、石像が立っていた。まわりにあるあらゆる物を強引に押し潰し、練り混ぜ、形を整えたような巨大な人形。

彼女と石像の周りにはバリケードらしきものの破片が四方へ散らばり、七、八人の警備員が倒れていた。細かく震えるように手足が動いており、まだ息はあるようだ。

「くふ。 存外、衝撃吸収率の高い装備で固めてるのね。 まさかエリ

スの直撃を受けて生き延びるだなんて。まあおかげで「ひな」は存分に楽しめたけどよ」

「どうして……」

……そんな事ができるんだ、と上条は絶句した。

「上条、犯人はあいつか?」

追いついた神命が質問すると、上条は黙つてうなずく。対して、金髪の女は特に感慨も持たず、

「おや。お前は幻想殺しか。虚数学区の鍵は一緒にではないのね。でも代わりに奇妙な生き物を連れているわね。本当に学園都市はよりもみどりね、こんな能力者までいるなんて」

女は面倒臭そうに金髪をいじりながら、

「別に何でも良いのよ、何でも。ぶち殺すのはあのガキもある必要なんざねえし、テメエを殺したって問題ねえワケだ!!--」

女が思い切りオイルパステルを横一線に振り回す。

その動きに連動するよつて、石像が足を振ると、上条は耐えられずに地面へ倒れ込んでしまう。だが、傍らにいる神命と金髪の女は平然と立っていた。

「あ、お前……っ!」

「お前でなくて、シェリー＝クロムウェルよ。覚えておきなさい…  
…って言つても無駄か。あなたはここで死んでしまうんだし、イギ  
リス清教を名乗つても意味がないわね」

なに？」と上条は眉をひそめた。

イギリス清教と言えばインテックスと同じ組織の人間だ。

そんな彼に、シェリーは薄く笑いかけてこう言った。

「戦争を起こすんだよ。その火種が欲しいの。だからできるだけ多くの人間に、私がイギリス清教の手駒だつて事を知つてもらわないと、ね？」 エリス

## 第十八話 暗がりに潜む者（後書き）

主人公が空氣すぎる。

人物・用語解説をこれから作つて行きたいと思いますので、そちらにも目を通していただければ幸いです。場所は目次最上部のシリーズ一覧のとある小説の世界設定『World Map』です。  
(まだ未完成ですが)

## 第十九話 其々は其々の目的の為に

「戦争を起こすんだよ。その火種が欲しいの。だからできるだけ多くの人間に、私がイギリス清教の手駒だつて事を知つてもらわないと、ね？」 エリス

シェリー＝クロムウェルは薄く笑いかけてそう言った。

そして突然持つていたオイルパステルを宙に走らせ、その動きに引かれるようにエリスと呼ばれる巨像が地を踏みしめ、その大きすぎる拳を上条に向けてきた。

まわりにある物を掻き集め、押しつぶし、練り混ぜ、そして形を整えただけのようなその巨像でも警備員の張つていたバリケードを一撃で粉碎する程の拳だ。上条は避けようとしたが、先に伝わった振動はそれを許さなかつた。

「石像を拒絶、身体を透過！－上条、どけつ！－」

神命が強引に上条を押しのけた。上条は横へそのまま3m程吹き飛び、先程上条が居た所には神命が立つていた。そこへエリスの拳が恐ろしい強力を持つて襲い掛かつた。

「か、神命オオおおおお！－！」

上条は叫んだ。しかし、上条の絶叫とは裏腹にその場には氣の抜け  
るような声が響いた。

「ああええと……別にそんな叫んばなくともいいぞ？」

「神命？」

あれ? とこけいきになる上条。

「俺の能力つて魔術にも一応対応してるんだな。そつじゃなかつたら今頃死んでたな……」

「おい、死んでたな……じゃねえ! 心配したんだぞ……」

「ほり、俺の能力つて避けることに特化してるから。基本心配しなくても大丈夫だ」

右手の親指を行き勢いよく真上に突き立てる神命。

「何がものすじくの指へし折つてやつたいんだナゾ」

「上条、もう一発来るぞ」

再び巨大な拳が横薙ぎに一人を襲つ。上条はふら付きながらも後ろ  
に下がつてそれを避け、神命はさつきと同じくこれを透過した。

「くそ、どうにかしてあいつに近づけたひ……」

上条が呟いた。恐らく上条の右手の幻想殺しを使えば、あの石像も

例に漏れずその動きを止めるだろう。しかし、今は近づく手段が存在しない。

カツン、と。

唐突に、神命達の後方から小さな足音が聞こえた。

激しい揺れとその衝撃で周りの物体が次々と音を立てて壊れその形を失っていく中、順路だけを示す非常灯では照らしきれていない闇が支配する通路の奥から聞こえてくる足音。

その音からだけでも、その足音の主は訓練された人間ではない、それどころか怯えた足取りで一步一步地を踏みしめるようなその足音。

二人には嫌な予感しか過ぎらなかつた。

「……あ、あの……」

聞こえたのは少女の声だつた。

闇の中から赤い非常灯へ、その声の主のシルエットが浮かび上がる。太股に届く長いストレートにゴムで束ねた髪が横から一房飛び出し、線の細いメガネをかけた少女　　風斬　氷華だつた。

「馬鹿野郎！－何で白井を待つていなかつた－？」

上条は叫んだ。

「……あ、だつて……」

「いいから早く伏せろ……」

神命の叫びに風斬はキヨトンとした顔をした直後、

エリスがその拳を今度は地面に向けて放つた。先程までまだ平らでタイルが敷き詰められていた通路の床は深く抉られ、その分の大きな床の破片が大量に宙を舞つた。

ゴン！…と。彼女の顔が大きく後ろへ跳ねた。

宙を舞つた破片の中の一つが風斬の顔面に直撃したのだ。

なにか、肌色のものが散らばり、メガネのフレームはその原型を留めておらずレンズも粉々に碎けて、吹つ飛び。

風斬は大きくブリッジを描くように後方へのけぞり、何の抵抗もなく人形のように倒れた。

「か、ぢ……風斬イイイイイイイ

上条は急いで彼女の元へと駆け寄り、神命もその後に続く。

しかし、二人は近づく前にそのあまりの光景に思わず立ち止まってしまう。

その惨状の所為ではない。そこに広がるあまりにも異様な光景の所為だった。

確かに風斬の傷はひどかった。頭部の右半分を根こそぎ吹き飛ばされている。コンクリートの塊が当たったとは思えないその傷は、ま

るで体表面で爆弾でも爆発したような状態だった。

しかし、問題なのはそこではない。

そんなこと、この光景の前ではほんの些事にすぎないと思えるほど  
の問題がそこには転がっていた。

二人は改めてその傷口を確認する。

頭の右半分を吹き飛ばすような滅茶苦茶な傷、だが、その中身は空  
洞だった。出血はない。それどころか、肉も骨も脳髄すらも何も無  
い。

しかしその代わりに、その空洞の中には黄金に輝く三角柱が浮かん  
でいた。一边が2cm程の正三角形で高さは5cm程度のその三角  
柱はまるで磁石でも使っているかのように浮き、回転していた。よ  
く見るとその表面には長方形が敷き詰められており、キーボードの  
よつにカタカタと見えない手で押されているかのように動いていた。

「何なんだ、これは……」

あまりに異様すぎて神命はただ立ちすくんでいた。超能力と言つて  
はこの姿はあまりに異様。当の超能力者である神命にもこの事象は  
説明がつかない。

「う……」

どうしていいか分からず上条の前で、風斬が小さなうめき声を上  
げた。また、それに反応するよつに彼女の中の三角柱もぐるぐると  
回転している。

あのショリーですり、その光景にぎょっと肩を固ました。

風斬の顔に痛みや恐怖のような表情は無い。片方しかない目で上条のほうを見ると、まるで寝起きのような仕草で、

「あ……れ？ めがね……めがねは、どい、です……か？」

自分がメガネをかけていた辺りに指で触れよつとしてよひやく、彼女はその異変に気づく。

「な……に、これ……」

彼女の指が空洞の淵をなぞつていぐ。

「い、や……ア！ な、に……これー？ いやあ……」

彼女はショーワイングで自身の姿に絶叫した。そしてバランス感覚を失ったかのように危うい動作で立ち上がり、混乱していたのか、あらう事が巨大な像 エリスの方へ走つていった。

その動きにショリーは我に返るとオイルパステルを一閃した。

その瞬間、巨大なコンクリートの塊の腕が振り回され、それに直撃した風斬の身体はぐの字に曲がったままノーバウンドで3m程吹き飛ばされる。

ぼとり、と生々しい音が響く。

風斬の左腕が半ばから捻じ切れ、わき腹は大きく口を開けていた。

それでも、彼女の、風斬  
氷華の体は蠢いた。

壊れかけた細いからだから発せられる叫び。それには流石のシエリーでも驚いたようだつた。

しかし、風斬は千切れた手足を振り回し闇の奥へと走り去っていく。

シェリーが呟いてオイルパステルの表面を軽く指で叩くとエリスは大きく足を動かし少女が消えていった方へ歩み始める。

「ふん、面白い。行くぞ、エリス。無様で滑稽な狐を狩り出しましょ」

そう言いながら、シェリーはオイルペイントをくるくると回し、エリスと共に闇の中に消えていく。

上条はその光景をただ呆然と見て、 じぱりと立ち去る所へすゝみとしが出来なかつた。

「お、おい……上条、大丈夫か！？」

神命が話しかけてきた。勿論、大丈夫ではなかつた。

「くそつ、一体何がどうなつてんだ？」

「あの風斬とか言つたつける？ あいつの力は能力なのか？」

「分からねえ。だけど、あの傷だ。早く風斬と合流するか、ショリーの後を追わないと不味いことになる」

「ああ、じゃあ俺はあのショリーとか言つて女を追つ。上条は風斬を頼む」

「分かつた。あいつには分からないことが多い。だから俺は一先ず風斬のことを調べてみようと思つ」

そう言つと上条は制服のポケットから携帯を取り出した。

「じゃあ俺はもう行く。気をつけろよ」

「ああ

それだけ言うと二人はそれぞれの目的を達成するため、それぞれの道へと走り始めた。

第十九話　其々は其々の目的の為に（後書き）

少し短い回。

## 第一十話 間を塗り変える光の中で

神命 選は非常灯が薄暗く照らす地下街の通路を走っていた。

先程上条と役割を分担し、今は学園都市へ侵入した魔術師 シエリー＝クロムウェルの後を追っていた。

「くそ、あんな団体して何でこんなに移動が早いんだ」

上条と別れてから結構な時間走っているはずなのだが、ショリーの姿は全く見える様子は無い。今もその巨像が地を踏みしめる音が聞こえては来るが、地下街の通路で反響してどこから聞こえてくるのかはよく分からぬ。

「一体どこへ行つたんだ。よくあんな巨体でよくこんな狭い通路を通れるものだな」

しかし、そんなことに関心している場合ではない。風斬と言う少女が先程大怪我を負つていた（そもそもあんな状態を怪我と呼べるのかどうかも怪しいのだが）。よつていち早く魔術師に追いつき、対処しなければならない。

そもそも風斬 氷華とは一体何者なのだ？

一緒にいた上条でも彼女の正体については全くと言つてもいい程知らなかつたし、彼女自身もそれは把握出来ていなかつた様に見えた。

（あの魔術師が言つていた『虚数学区の鍵』と言つ言葉も気になる。虚数学区は分かるがその鍵とはな……）

虚数学区。この単語について学園都市には様々な噂が渦巻いている。例えば、「学園都市の『始まりの研究所』であり、関連施設の増設の結果が学園都市である」「特殊な能力で空間のずれた場所に隠されている」「樹形図の設計者の演算中枢は虚数学区の架空技術で作られているため再現できない」等、その数も豊富だ。

だが、その正体はそんな生半可なものではなかつた。

その実態は、無数の能力者が発生させるA.I.M拡散力場の集合体そのものであつたのだ。

一体そんなものを作つて学園都市は何をしようとしているのか、その単語の意味を知つた時から抱いていた疑問の答えを彼女が持つているのだろうか？

（やう言えど、『ヒューズ＝カザキリ』って単語もあつたな……どちらにせよ嫌な予感しかしないが）

ヒューズ＝カザキリ　　虚数学区と一緒に度々出でてくることのあつたもう一つの単語。彼はまだこの単語が指す意味を知らない。

しかし今は、そんな事を考へてゐる暇は無い。ここで彼女が消えてしまう。そうなればその謎を解く鍵も失われてしまう。

(セヒ、ビニにいるのやう)

そう思つた矢先、突然十字路の左奥から悲鳴と地響きが聞こえた。その悲鳴の主は間違いなくあの少女だろう。

「そつちか」

神命は勢い良くその角を左へ曲がる。そこもまた非常灯で照らされた薄暗い場所。その奥から悲鳴は聞こえてくる。

その奥にあの魔術師のシルエットがあった。

「そこまでだ、魔術師 シーリー＝クロムウェル」

しかし彼女は答えず、その代わりに手に持つているオイルパステルを宙を縦に切り裂く。するとそれに対応してエリスと呼ばれる石像がこちらに正面を向ける。

「着たわね、能力者。全く、こんな化け物なんか守つたつて一銭の得にもならないのに」

妖艶ではあるが、それでも鎧び付いたような声で女は言った。

その彼女と石像の後方で蠢く物が見えた。風斬だ。その外見は最後に見たものとは違い、頭部の空洞も、脇腹で大きな口を開けていた傷も今はなく、ちぎれた筈の左腕も復活していた。

ただし、その身体は大きくねじれおり、今もその激痛に悶えていた。その様子は、死の痛みを感じながらも死に逃避することも出来

ない生き地獄そのものだった。

しかし突然、彼女はその動きを止めた。そして、彼女の意思で動かしているとは思えないような動作で身体のねじれを強引に戻すと、無表情で静かに上半身を起き上がらせた。驚いたことにその傷口は、ビデオの早送りでも見ているかのように見る見るうちに塞がっていく。

「ね。やつぱり化け物じゃない」

シェリーがそう言つと、我に返つた様子の風斬がその表情を歪ませる。

「黙れ」

神命はそれだけ言つと、一直線に石像のほうへと走り出した。

シェリーは再びエリスに指示を出すと、巨大な拳が神命に迫つてくる。

しかし、彼は避けない。石像が生み出す大きな振動に臆するような動作も無くただひたすら走り続ける。

拳が神命に直撃する。だが、彼が吹き飛ぶことはない。すでに彼は石像に対して拒絶の能力を使い身体を透過させている。

その光景に少し驚いた顔を浮かべる。しかし彼が彼女に攻撃を加えることはなかつた。彼が向かつたのは風斬の方だ。

「風斬、大丈夫か？」

その何気ない問いに風斬は戸惑う様子で答えた。

「え、あ、はい……大丈夫です」

彼女の中でも、既に自身が人間ではないことに気づいているのだろう。そんな自分の人間ではない部分を見られどう接していいのか分からなかつたように見える。しかし、神命はその言葉を聞いて安心したように言つた。

「そうか。なら良かつた」

しかし、そんなやり取りを相手が待つてくれる事はなく、すぐさま次の攻撃を放つてくる。

だが今回、この攻撃に神命は反応しすぐにその対処に向かう。彼は既に石像に対する絶対的な回避能力を身につけてはいるが、丁度神命と風斬、そしてエリスが一直線上に並んでいたため、神命が攻撃を避けるとその攻撃が風斬に当たつてしまうからだ。

神命は即座に風斬の元へ近寄り彼女を両手で抱え上げるとこゝにいた。

「石像を拒絶、身体を透過、その効果を風斬に付」

そこへエリスの拳が突つ込んで来た。が、やはり攻撃は当たらない。

「ちつ、また面倒な能力使いやがつて。いいわ。ぶち殺してやるー。お前の肉片はエリスの身体の一部となるのよ」

そしてショリーは手のオイルペストルで横に一閃。エリス本体での攻撃は諦め、今度は地面を抉るようにその拳を振り下ろし、抉れた地面が一人目掛けて飛んでくる。

それに対し選は、

「大気を選択、空間に固定。飛んでくる岩石を拒絶、身体を透過、その効果を風斬に付」

飛んでくる岩石は一人には当たらない、が、

（このままじゃ専守防衛だな。かと黙ってここでプラズマなんか作つたらかなりの範囲が空気が薄くなつて倒れている警備員の一人くらいは窒息するだろうし、光つて言つてもこんな暗さじゃなあ。警備員のライフルの一つでも持つてくるんだつたな）

ここには神命が武器に出来るものが存在しない。落ちている瓦礫を投げつけたとしてもエリスに吸収されるのがオチだろう。この状況を打破できるのは……

「幻想殺しか……」

資料にはあらゆる能力が効かない能力とあつたが、恐らく彼の言動からしてそれは魔術にも効くのだろう。決定打に欠ける今の状態では切り札と成り得る代物ではあるが、残念ながら彼は今ここにはいない。

「エリスは上条宜しく肉弾戦しか無いか」

神命は空氣を蹴つてエリスと距離を取り、風斬を安全そなうなもの影

に隠す。

「お~お~ひ、逃げてばっかじやエリスには勝てないわよ」

そんなショリーの声に神命は面倒臭そうに答える。

「そんなことは分かつてんだよ」

そう無造作に言い捨てるが、神命は次の能力を使つ。

「石像の拒絶を解除。今からお前を大好きな大地と一緒に化させてやるよ」

神命は走り出す。しかし大地を踏みしめる音はしない。彼が走るにつれ見えない坂を上つていくように彼と床との間には隙間が生まれていく。

「エリス

そう呟くと、魔術サイドの彼女でも今の神にはエリスの攻撃が効くと分かったのか、エリスに命令を下した。

エリスは大きく足を踏み出しその腕を振るひ。

それを神命は潜り抜けるように軽々と避ける。そして彼はある物に触れる。彼が触れるのはエリスと呼ばれる石像。これまでずっと能力で拒絶し続けた物体。その物体に触れて彼は呟く。

「地面を拒絶、身体を透過、その効果を石像に付与」

そう言い切った瞬間、石像の足が地面に減り込んだ。そしてそのまま腰、胸、腕、首そして頭と瞬く間にエリスは地面の中に消えてしまった。

「どうだ？ お望み通り大地と一緒に化してやつたぞ？」

地面に着地した神命は言った。

一瞬だけ驚いたシェリーだったが、すぐにその表情は見慣れた歪んでいるものに変わった。

「あまりエリスをなめないでもらいたいわね」

そう言って彼女はオイルパステルを振るう。その直後、地面が大きく揺れた。そして神命の立っている地面の周りが大きく盛り上がり、手も様なものが神命の身体に掴みかかった。

「！？」

土の塊に掴まれた彼の身体からはミシミシと耳障りな音が聞こえてくる。

「くそっ、石像を拒絶、身体を透過！…」

突然彼の感触を感じなくなつた土の塊は、何も無い人一人分の空間を思い切り握り締める。彼が胸に手を当てよろめきながら床に立つと、彼を掴んでいたものの正体を確認した。

それは土に塗れより巨大に、より禍々しくなつた石像の成れの果てであった。

「案外丈夫なんだな、その石像」

「言つたでしょ、大地は私の見方。その大地の中で私に刃向かおうとするのが間違いなのよ」

神命の状態を嘲笑つかのよつてシヨーリーは答えた。

（肋骨の数本にひびでも入つたか）

そう神命が考えていた時、隠れていたはずの風斬が口を開いた。

「 もう…… いいです」

諦めの感情交じりに彼女は言つた。

「どうせ私は傷付いても死なない化け物ですから……私を庇う様なことなんてしてもらわなくともいいんです……」

割れて床に散乱しているショーウィンドウに『る自身の姿を見つめながら彼女は言つた。

「もういいんです……私なんか守つてもらわなくとも……それにあなたはさつき会つたばかりで私を守る義理なんて無いじゃないですか……」

今にも泣き崩れそうな声と表情で風斬は言つた。

「馬鹿馬鹿しいな。そんな事を考えていたのか？」

一瞬の間も無く、神命は言い放った。

「別に風斬が人間かそうでないかなんて関係ねえよ。お前が自分を化け物と呼ぶのを俺は止めたりしない。お前はそれを受け入れる覚悟があるならな。そもそも俺は目の前で困っている人間を見過ごせる程非常な人間じゃないんだ。それは上条だって同じだろうしな」

「でももう友達なんて呼ぶ資格は私には無いんです……」

「でもあいつはお前のことを友達だと言い張るだろうな」

一呼吸して神命は続ける。

「お前が化け物？ もしそうだって言つんなら俺はあいつの友達を守るだけだ。どっちにしろ俺はお前を守る、ただそれだけだ。簡単だろ？ 俺は風斬とは会つたばかりだ、だけど俺がお前を友達と呼ぶ資格が無い、俺が友達を守る権利すら無いなんて、悲しいことは言わないよな？」

風斬はキヨトンとして神命の顔を見た。

気迫のようなものは感じられなかつた。だがその中に眠る信念のようなものが少しだけ見えた気がした。

しかし彼女の表情を確認することも無く、また、彼と対峙する魔術師 シーリー＝クロムウェルから視線を離すこともなく神命はいつ言った。

「だけど今回の英雄は俺じゃないらしいな

ヒーロー

彼が言い終えると、一人の後ろの通路から足音が聞こえた。足音だけではない。まるで車のヘッドライトのような強烈な光の渦もだ。その光の中に神命は話しかける。

「遅いぞ上条」

「悪いな神命。遅くなっちゃった」

「本當だ。よつやく役者が揃つたな」

神命は上条に顔を向けることなく彼と会話を続けた。もうそんなものは必要はない、とそんな表情で。

「何がぞろぞろと引き連れて來たな」

上条の後ろには八人の警備員が傷付いた身体に鞭を打つように着いて来ていた。

「……どう、して……どうして私みたいな……私みたいな化け物の為に駆け付けてくれるんですか！？おかしいですよ……私なんかの為に……」

不思議そうに風斬 氷華は問いかけた。

彼らが風斬の正体をどこまで知っているのかは分からぬ。が、少なくとも一般人ではない事ぐらい掴んでいるはずだ。

だからこそ、彼女は問い合わせたのだ。

どうして、と。

「ぱつかばかりしい。理由なんていりねえだらうが」

上条は一秒すら待たずに答えた。

「別に特別な事なんぞなにもしてねーよ」

溢れんばかりの光の中で彼は叫う。

「俺はただ友達を助けに来ただけだ」

風斬は一瞬、その言葉を理解できなかつた。

だつて彼女は人間ではない。化け物なのだ。身体の中は空洞で、皮膚一枚の中には何も無く、銃で撃たれても石像に吹つ飛ばされても死なないような身体なのに。

彼らにはどうでもいいと一言で切り捨ててくれるのか。

自分はここにいてもいいのだろうか。

彼らは自分の存在を笑つて認めてくれるのだろうか。

呆然とする風斬に少年は言へ。

「涙を拭つて前を見る。胸を張つて誇りに思え。ここにいる全員がお前に死なれちゃ困ると思つてんだ」

風斬は、顔を見上げる。

あれだけ闇に包まれていた世界はもうビリビリも無い。

「今からお前に見せてやる。お前の住んでこいの世界はまだまだ救いがあるって事をー。」

彼女は知る。

確かにあの金髪の女は暴虐の嵐によつてこの地下街を開いた。

けれど、彼らは光を用いて闇に立ち向かう。

暗がりの中に溺れる誰かの手を掴む為に。

少年は叫ぶ。

「やして教えてやる。お前の居場所は、これぐらいでは簡単に壊れなこつて事をー。」

## 第一十一話 心に焼き付く言葉と決意

『馬鹿馬鹿しいな。そんな事を考えていたのか？』

『ばっかばかしい。理由なんていらねえだろ？が』

化け物だと、そう言った私に一人の少年が一言でその現実を切り捨ててくれた言葉。

『俺はお前を守る、ただそれだけだ。簡単だろ？』

『涙を拭つて前を見る。胸を張つて誇りに思え。ここにいる全員がお前に死なれちゃ困ると思つてんだ』

自分の正体が人間ではないと分かった上で、一人の少年が自分の存在を認め居場所を提示してくれた言葉。

風斬は、顔を見上げる。

あれだけ闇に包まれていた世界はもうどこにも無い。

「今からお前に見せてやる。お前の住んでいるこの世界にまだまだ救いがあるって事を…。」

彼女は知る。

確かにあの金髪の女は暴虐の嵐によつてこの地下街を闇に閉じた。けれど、彼らは光を用いて闇に立ち向かう。

暗がりの中に溺れる誰かの手を掴む為に。

少年は告げる。

「そして教えてやる。お前の居場所は、これぐらいでは簡単に壊れないって事を…。」

石像の影に隠れたショリーは、怒りに震えた声で、

「 ぶち殺せ、一人残らず！」

叫ぶと同時に、オイルパステルが宙を引き裂く。

「 せん！！配置B！民間人の保護を最優先！！」

警備員達は透明な盾を持つ前衛とライフルを撃つ後衛の二人組みで動いていた。

ギギギザザザギギ、と田の前の盾が悲鳴を上げる。H里斯の身体に辺り乱反射した弾だけでこの様だ。しかしそんな中でもH里斯は歩を進めて来る。

「 少年、本当にやる気なの？怖気づいたって言つても誰も咎めないじゃん」

「 やりなきゃなんねえってのが正しいけどな。俺の右手には触れただけでの、ゴミ人形をぶつ壊す能力が備わってんだ。それに今はレベル5だっているんだ」

「 そりゃあ、確かに月詠先生もそんな事は言つてたけど……」

「 どの道このままじゃいつかアレはここまで歩いてくるだ。そうでなくても弾は無限じゃねえんだろ？盾持つてるアンタの手だつてそういう長くは持たないんじゃねーのか」

そんな上条の心配の中神命が、

「弾丸を拒絶、以後現在俺が存在する半径10m以外から飛んでくる弾丸の運動を停止」

弾丸の嵐の中、銃声にその声を搔き消されながらも呟いた。

直後、さつきまで悲鳴を上げていた盾が一斉に静かに黙り込んだ。

「何だ！？」

上条が叫んだ。

「どうだ？ 少しは楽になつたか？」

そう聞き返してきた神命は、彼らの一一番前で弾丸の嵐の真ん中に一人立つている。

見ると神命の前方10m程度の位置に彼を中心として円を描く様に放たれたはずの弾丸が散らばっていた。エリスの身体に当たり乱反射してきた弾丸のみがその円の上空で一瞬だけ停止し、そこから自由落下していたのが確認出来た。

「褒めてもいいんだぞ？」

自信有り気に言つ神命に上条が疑問を投げかける。

「これもお前の能力なのか？」

「ああ、存分に打ちまくれるだろ？ それと、間違つても右手で俺に触れるなよ。その瞬間俺以外全員即死だからな。冗談じゃ済まされ

ないぞ」

盾を構えていた警備員達が次々と攻撃に回る。

「すげえな。お前つて万能か？」

「いいや、俺にはあの石像には決定打を『えられないからな。そういつこじで、俺が石像を何とかする。その間にお前はあの魔術師に一発ぶちかましてこい、いいか？』

「ああ、分かった」

そこへ警備員の一人 黄泉川が口を挟んだ。

「ちよ、ちよっと待つじゃん。それで失敗してもウチらは少年を回収できない。その時は弾幕張るしかないじゃんか。そうなると少年『』とあの石像を撃つ事になるけど」

警備員の言葉に、風斬は愕然とした。

「……待つて……待つて、くだ、さい。……あ、あの……何を……」

「決まつてんだろ。あの化け物を止めてくれる」

ズン、という石像の重たい足音が響いた。

「ダメ、です……そんな……つー危険、すき……！」

そんな風斬を他所にじりじりと、石像は歩みを進めていく。

「指示を出す。最後に少年達に確認するけど、構わないの?」

「……、ああ」

「上条に同じく

何をすべきかは、すでに打ち合わせてあつたよつだ。故に、答えは一言いり。余計な言葉などとこう未練はこの場には存在しない。

「無理しゃがつて、格好良すぎるぞ少年」

小型の無線機を取り出し警備員は小さく笑つた。

「こ、よ、付き合つてやうづじやん。代わりに何があつても成功させひ。そして生きて帰つて來い。そのための協力ならいくらでもしてやる」

その言葉に一人は口元にわずかな笑みを浮かべた。

「準備せよ(プリパレーシヨン)。 カウント3

警備員が無線機に何かの命令を下した。その前では今も銃弾の嵐が吹き荒れている。

「 カウント2」

上条はほんのわずかに上体を起こした。

「止めるなよ、風斬」

ほとんど錯乱しかけている風斬に対し、上条は落ち着いた声を出す。

「お前が俺の事を避けてた理由な、きっとこの右手にあるんだと思う。この右手は、異能の力なら善悪を問わず、あらゆる力を打ち消しちまうから。きっと、お前の事も例外じゃない」

だから不用意に手を伸ばして押し留めようとするな、と上条は言つ。

「カウント一」

シェリーも何か仕掛けてくることに勘付いたのか、さらに狂つたようすにオイルパステルを振り回す。

しかし、この瞬間だけは、上条はシェリーの事など入れていなかつた。

彼はただ、目の前にいる少女を見ていた。上条の右手の力を知り、自分が少年を避けていた理由を知つて驚いた風斬の顔を。

「そんなに気にすんなよ。別に触れ合つ事ができなくたって、お前が友達だつて事にや變わりないだろ？俺は必ず帰つてくる。いいか、必ずだ」

「……あ、帰つてくる……？」

「おう。またインデックスと三人で、どつかに遊びに行きたいしな。そうだ、神命が一緒でもいいかも知れないな。あいつの事はまだよく分かんねえけど、良い奴に決まってる。人数は多い方が楽しいしな」

そう言つて、彼は一度だけ笑つた。

それから彼は前方へと視線を移す。

その視線の先には、倒すべき敵と頼るべき仲間がいる。

「 カウント〇 」

「 走れ！！上条！！」

瞬間、

エリスに向かつて弾丸をばら撒いていた警備員達が一斉に撃つのを止めた。

その所為か、地下街には神命の叫びだけが木霊した。

シェリーにとつては予想外の展開だらう。

効果はあつた。エリスの身体が前のめりになつたのだ。これまで銃声を浴び続け、まるで強風に逆らうように前に重心を傾けていたからだつた。

同時、二人の少年が走り出す。ターゲットに向かつて一直線上に上条が先行する形で。

エリスと上条の距離は約7m。

「 くそ。やりなさい、エリス！！ 」

矢のように走る上条と神命に対し、慌てたようにシェリーはオイルペステルを振るつ。

命令に忠実にエリスは拳は握る。

そのまま拳を振るつてしまつては完全にバランスを崩してしまつと言つのに。そして案の定、拳を振るつたエリスは更に前のめりになつていく。この距離なら神命達は絶対に巻き込まれないはずだ。

倒れ込んだ所を狙おうと上条は拳を握り締めた。

しかし、

ズドン、と上条達とは関係なく地面を殴りつけたエリス。

「なつ……！」？

エリスの拳を中心に、地面に半径8m強の蜘蛛の巣状の亀裂が入る。トランポリンのように地盤は揺らぎ、地下街全体に不気味な軋みが伝わる。

その反動でエリスはばね仕掛けの様に起き上がると、今度は地面を這う虫を潰すが如く上条に拳を放とうとする。

「お前の相手は俺だよ」

そう聞こえた直後、上条の身体が左に大きくぶれると、ショリーの視界に上条の背後にいた神命が映り込んだ。

エリスの拳は空を切り、再び地面に突き刺さる。

神命はその腕をまるで階段でも上つてゐるかのように軽快な跳躍で

駆け上がつていき、石像の頭部に達した時、

「天井を拒絶、身体を透過」

そう呴くと頭部を蹴り上げ天井の中に手を潜り込ませる。そして何かを掴み手を天井から引き抜いた。掴んでいるのは無数の電気配線。それを強引に引き伸ばしてぶら下がる様に降りてきながらまた呴く。

「現在いる地下街壁を拒絶、身体を透過、効果を配線に付」

すると先程まで強引に引き伸ばされていた電線が大きくなっている。それを手繰り寄せながら床に着地し石像に巻き付ける。彼の手から離れると能力の効果から解放された電線はピンと張り、しつかりと壁に固定されている。神命はその動作を恐ろしい早さで完了させた。

「一ト上がりつて所か」

やり終え、満足気に彼は言った。

その間に上条は石像の傍らから滑り込む様にシェリーに接近しようとす。

シェリーは当然それを阻止しようとエリスに命令を下す。エリスは腕を伸ばし、上条を拳が襲う。巻きついていた電線の一部が断線した。しかし拳は上条には届かない。身体を固定されてしまったエリスは腕を動かすしかなく、攻撃を当てるには長さが足りなかつたのだ。

そして上条はエリスの向こう側、シェリーが警備員の銃撃から逃れる為の小さな闘技場に辿り着いた。

その後、エリスの身体から火花が散った。警備員が銃撃を再開したのだ。

「え、エリス……」

彼女は焦りと緊張の入り混じった声を出す。今エリスを下手に動かせばシェリー自身が弾丸を浴びる羽目になるかも知れない。同じ理由で彼女はこの場から逃げ出すことも出来ない。

彼女の手の中にあるオイルパステルが不器用に宙を漂っていた。エリスをどう動かして良いのか分からぬのだ。そんな事をしている間に銃弾の嵐の中を神命が平然とした顔で通り抜け、その小さな闘技場へと姿を現した。

「さつて、と」

上条は言つ。そして、肩の調子でも確かめるように、右肩を大きく回す。

「ようやくここまで漕ぎ着けたな」

神命は言つ。そして、準備体操でもしているかのように、首を動かす。

「は、」

絶望的な状況に、シェリーは思わず引きつった笑みを浮かべていた。

「はは、何だそりや。これじゃ、ビコにも逃げられないじゃない」

「逃げる必要なんかねえよ」

響く銃声の中で一人の少年は眼を合わせ、額を合図つい、

「テメエは黙つて眠つてろ」

上条 当麻は、一切の手加減無しにシェリー＝クロムウェルを殴り飛ばす。

彼女の細い体は、風に飛ばされる紙屑の様に地面を何度も転がった。

## 第一十一話 心に焼き付く言葉と決意（後書き）

魔術サイドと話術サイドが交差する予定はありません。  
そうすると神命が空気になってしまつので。

何か最近、以前に比べて文体が雑になつてゐる気がする。  
そもそも繋ぎが下手。つて言うか6巻目体上条と風斬の心情メイン  
だからオリキャラが……

定期考查近いんで更新遅れます。

## 第一十一話 絶望に埋めゆくされない心

「テメエは黙つて眠つてろ」

上条 当麻は、一切の手加減無しにシェリー＝クロムウェルを殴り飛ばす。

彼女の細い体は、風に飛ばされる紙屑の様に地面を何度も転がつた。

銃声はまだ止んではない。

シェリーが倒れたことでエリスはその動きを止めているが、決定打を与えた訳ではない。上条達はエリスの方へと向き直った。不用意に幻想殺しで破壊してしまつと上条が流れ弾の餌食になつてしまつかもしれない。

「ふ。うふふ」

そこで女の笑い声を聞いて、二人は勢いよくシェリーの方へと振り返つた。彼女は笑つてゐる。倒れたままで笑つてゐる。ただし、その手にオイルペステルを握り締めて。

ビュバン！！と、まるで抜刀術のようにオイルパステルが地面を走る。

「な……ちくしょう！一體目を作る氣か！？」

それを阻止するために戦って一人は走ろうとしたが、

「うふふ。うふうふ。うふうふうふふ。できないわよ。ああしてエリスが存在する以上、一體同時に作って操る事などできはしない。大体、複数同時に作れるのなら初めからエリスの軍団を作ってるもの。無理に一體目を作ろうとした所で、どうやっても形を維持できない。ぼひぼひじうじう、腐ったみてーに崩れちまう」

けどなあ、とシェリーは獰猛に笑つて、

「そいつも上手く活用すりやあ、こうこうつ事もできるのか……」

直後、シェリーの書いた文字を中心に半径約2mの地面が崩れ落ちた。その穴の中にシェリーは飲み込まれるように姿を消した。

「くそつ……」

上条と神命は急いで穴に駆け寄るが、穴は深く、底は見えなかつたが、微かに空氣の流れを感じる。

「やられたな。地下鉄が通つているようだ

神命が呟くと、先程まで静止していたエリスがバラバラと崩れていった。複数体を同時に作れないのだから、下で新しく作つたのかもしない。目の前のエリスが崩れ去ると同時に、警備員の銃撃も止

また。

「しかし妙だな……」

「何がだ？」

上条の言葉に神命が問い合わせる。

「あいつの狙いは俺と風斬を狙つて今まで交戦してたんだ。その俺達が目の前にいるこの状態で、そう簡単にこの場から去ると思うか？」

「いや、思わないな。俺だったらここで仕留める」

「だろ？ なら何で奴はこの場から消えたんだ？」

一人の少年はしばらく険しい顔をしながら、これまでシェリーがばら撒いた言の葉を集めていく。

『戦争を起こすんだよ。その火種が欲しいの。だからできるだけ多くの人間に、私がイギリス清教の手駒だつて事を知つてもらわないと、ね？』

『

戦争を引き起こす、その目的の為にシェリーは学園都市トイギリス清教の要人を襲つた。

『別に何でも良いのよ、何でも。ぶち殺すのはあのガキでもある必

要なんざねえし、テメエを殺したつて問題ねえワケだ！』

しかし、その目的を達成するためには風斬以外の人間でも代用できるのだとしたら。

『うふ。うふふ。うふうふうふふ。禁書田録に幻想殺しに、虚数学区の鍵。どれがいいかしら。どれでもいいのかしら。くふふ、迷っちゃう。よりどりみどりで困っちゃわあ』

シェリー＝クロムウェルは逃亡したのではなく、新たな標的を狙いにこの場を立ち去つただけだったとした。

そしてその標的、この場にいる上条、当麻と風斬、氷華を除き、唯一この場にいないもう一人の標的とは、

「くそ……。インテックスか！！」

「インテックス……あの修道女か？」

「ああ。くそ、早く地上に出てあいつを探さないと……」

神命はエリスの残骸の向かい側にいる警備員の一人　　黄泉川  
愛穂の下に駆け寄つて、

「おい、黄泉川。この地下街の封鎖は解かれないのか？」

「今すぐには無理じやん。私達の管轄は地下街の管理とは異なるじ

「やん。こちらも連絡をつけてるけど、命令系統といつものもあるし、開くにはもう少し時間が掛かるじゃん」

「くそ！」

その言葉に上条は毒づいて壁を蹴る。その姿に風斬がビクッと身体を震わせるた。この場にはあの魔術師の姿はなく、何故慌てているのか分からぬといつた様子だ。

「……あ、あの……わざわざ、あつがと、『おわざました』

「ん? 別にお礼を言わねるせうの事でもねーと思ひナビ」

「俺か？別に俺も礼を言われるなうなことほしてねえよ。それより風斬の体調はどうなんだ？」

「あ、はい。……平氣だと、思います、けど。えつと……それで。  
何が、あつたん……ですか?」

その言葉に上条は少し黙り込む。しかし、隠していても仕方が無いとゆうべつとその口を開いた。

「シェリー＝クロムウェル……あのすすけたゴスロリ女は逃げたんじゃない。次のターゲットとしてインデックスを追い始めただけだ」

「え……？」

「警備員と掛け合つてみたけど、地下街の封鎖はまだ解かれないつ

て。つたぐ、あの分厚いシャッターが開かないと外へ出られないのに

「俺は能力で出られるけど、それだと能力の効かない上条がここに残ることになる」

「シャッターを壊す」とは出来ないのか?」

「無理だな。俺は自分でそれほどの破壊力を持つ攻撃を作れない。そんなことできたらとっくにあの石像相手に使つてる。作れないこともないが、そうするとここにいるお前や警備員が窒息死するが、そんなことは嫌だろ?」

「でも神命はここから出られるんだろう? インデックスの元に向かうことは出来ないのか?」

「それも難しいな。俺はインデックスの居場所を知らない。だが、あの魔術師は最初みたいに学園都市中を検索できる。俺が探し出す前にインデックスを見つけるだろうな」

それに、と神命は付け加える。

「どうせインデックスを殺すにはあのエリスとかいう石像を使うんだろう。俺はあいつを相手取るのは少々骨が折れる……って言つた折れたしな。そいつを止めるには上条がそつちに向かうか、あの魔術師を倒すしかない。俺としてはまだこの地下街にいるであろう魔術師を倒すほうが手っ取り早いと思つが

「ならやっぱ、行くならここしかねえか。くそ、すぐそこの隔壁を開けてくれりや簡単に先回りできるってのに、何で追走なんて後手

に回らなくつちゃいけないんだ！」

上条はシェリーが空けた大穴の前で舌打ちをする。

「ま、待つて……本当に行くんですか？」

多少のリスクを背負つてでも警備員に連絡するべきだと風斬は言った。彼女は知つているのだ、あの金髪の女の恐ろしさを、何度も身体を壊されたからこそ。

あれは正真正銘『化け物』だ。

それを知つていながらも、彼らは揺るがない。

そこで彼女にある考えが浮かんだ。

「……大丈夫、です。あなた方が、行かなくても……助ける方法は、あります」

風斬の声に一人は眉をひそめた。彼女は言つ。

「化け物の、相手は……同じ、化け物がすればいいんです」

その言葉に上条は息が止まつた。しかし彼女は続ける。

「私は、あの化け物に、勝てるか分からぬけど、少なくとも、囮

ぐらいは出来ます……。私が殴られている間に、あの子を逃がすことができ……できます。私は、化け物だから、それぐらいしか、できな  
いけど……」

上条は絶句した。それから彼の表情は驚きから怒りへと塗り替えられていいく。

「お前、まだそんなこと言つてんのか！良いか、お前がはつきり口にしねえと分かんねえなら、一から十まで全部教えてやる。お前は化け物なんかじゃねえんだよ！俺が、神命が誰のためにここまで駆けつけたと思ってんだ！それぐらい分かれよ、何で分かろうとしねえんだよ！」

上条 当麻の言葉には、一つの嘘も含まれていなかつた。

「そんな風にされて嬉しいとでも言えるような人間に見えるのか、俺達が！あんな化け物にお前が殴られているのを背を向けて逃げるような人間だと思ってたのか、インデックスが！ふざけんな！たとえお前が俺達を見捨てたつて、俺達はお前を見殺しにしたりはしねえんだよ！できるはずがねえだろ！！」

神命が上条の制止に入る。

「おい上条、もうその辺にして頭を冷やせ。風斬だつてそんなこととつぐに知つてる。俺だつて上条と同じなんだ、言いたいことは山ほどある」

風斬はエリスの残骸に手を向け言った。

「……だけど、それで良いんです。私は化け物で良い……」

風斬 氷華は、今度は顔を上げ上条から視線を離さずに告げる。

「私は、化け物だったから……あの石像に何度も殴られても、死にませんでした。私が……化け物だからこそ、私はあの化け物に立ち向かえます……」

だから、と彼女はそこで、一度だけ言葉を区切って、

「私は……私の力で、大切な人を守ります。だから、私は……化け物で、幸せでした」

彼女はそう言って、にっこりと笑うとショリー＝クロムホールの空けた大穴の縁から飛んだ。

上条は何かを叫んでとつたに手を伸ばそうとしたが、彼はその手を止めた。あることに気づいたからだ。

彼が伸ばした手は右手だった。あらゆる異能を打ち消し、風斬 氷華という化け物をこの世から消し去ってしまう、絶対の右手。

風斬の身体が大穴の中へと消えていく。その途中でそつと微笑みながら。

上条は風斬の消えていった穴の前で呆然としていた。

「行つちまつたな……」

神命が話しかけた。

「くそ、どいつもこいつも……」

「そう言うな上条。だがこれからどうする? こうなった以上俺はこの穴の下に行く。今なら風斬に追いつけるかもしれないし、あの女もいるかもしない。それに俺はそいつの行動目的に少しだが心当たりがある」

「……そなのか?」

「ああ、だから俺は魔術師を倒すことでの化け物を止めようと思う。上条はとりあえずこの地下街から出てインデックスの元に向かえ。良いか、今はただこの地下街から出ることだけ考えろ」

「分かった

「それとここれからは完全に別行動だ。連絡手段が欲しい」

二人は互いの携帯電話をポケットから取り出し、向かい合わせる。そしてこの薄暗闇には場違いな軽快な効果音が響いた。

「これで地上では連絡を取り合えるな。じゃあ俺は行く。必ず、必ず。あいつらを救つて来い！…」

「言われるまでもない…」

そして神命は大穴の闇の中に勢い良く飛び込んだ。

前の言いましたが、定期考查が近いので更新が遅くなります。

## 第一二二話 境界線上の闘いの終結

神命は地下深く繋がっている穴を風斬の後を追つて降りてきていた。

穴の先は予想通り地下鉄に通じており、下には一本のレールが敷かれ、非常灯が薄暗く辺りを照らしていてぼんやりと周辺が見渡せる。 次第に目が慣れ、辺りの光景を確認してみる。後ろには崩れて穴となつた分の地面の土砂が山を作っていた。前方には何かの足跡のように一定の間隔で地面が抉れていた。恐らくあのシェリー＝クロムウェルという魔術師がここでエリスとか言う石像を作り直したのだろ。地面と一緒に敷かれているレールも潰れていた。

（魔術師はこの足跡を辿つて行けば追いつけるとして、風斬の通つた痕跡は……）

より目を凝らして辺りを見渡してみるが風斬の姿は愚か、何の痕跡も見当たらない。魔術師の後を追つたのか、別ルートでインデックスの元へ向かつたのかは判別できなかつた。

（まあとりあえず、あの魔術師を追うか）

神命は走り出す。地下鉄の構内は等間隔四角いコンクリートの柱が並び、一本のレールを隔てている。足跡は闇の奥へと続いていた。しかし、あの巨体を引きずつているには全く震動も感じない。それは世に言つ嵐の前の静けさだった。

（しつかし、本当に静かだな、静かすぎる。いくら離れていたとしてもあの巨体を震動なしで移動させていとは思えない。まるでエリスでの移動を行つていない……待ち伏せでもしてような……）

そう考えた瞬間、神命のすぐ側にあつた支柱の一つが崩れた。コンクリート製の支柱とは思えない、まるで積み上げられたレンガを無造作に崩すような不自然な崩れ方。

「おつと、危ねえ」

神命は軽快な身のこなしでその瓦礫を避ける。

「流石に、そう簡単に潰されてはくれないのね」

瓦礫がズンと大きな音を立て、コンクリートの粉塵が舞う中、深い闇の奥から女の声が聞こえた。神命はその方向に目を向けると、そこには薄汚れたドレスを引きずるようシェリー＝クロムウェルが立つていた。

「ふ。うふふ。うふふうふ。エリスなら先に向かわせるわよ。今頃はもう標的の元へ辿り着いているかしら。それとももう肉塊に変えちまつてるかもなあ」

結論から言つとエリスを操るにはオイルパステルを振るう必要はなかつた。それどころか遠隔操作も可能だつたのだ。無論その分、頭

の中は処理で大変なのだろうが。

「残念だが、お前がここで待ち伏せをする意味は無くなつたようだな。お前はあの石像を一撃で破壊する幻想殺しを恐れて、ここで足止めするつもりだったんだろう？だが上条はすでに地上へ出るルートを探している最中だ。見つけ出すのも時間の問題だろうな」

「ちつ……」

シェリーは舌打ちをしてオイルパステルを振るう。すると天井から床を照らすように光が降り注いだ。神命はすぐに天井を見上げる。そこには魔方陣が描かれていた。魔術は素人レベルの神命にもこの魔方陣が発動することくらいは容易に理解でき、即座にそれに対処する。

「瓦礫及び光を拒絶、身体を透過。大気を選択、空間に固定」

神命が叫んだ瞬間、彼の姿は虚空へと消えた。足音も聞こえない感じるのは殺氣だけのはずだ。神命は空気を踏みしめ無音でシェリーの背後に回り込む。

誰にも気付かれないはずの行動だった。が、

シェリーは何も無いはずの、透明化した神命しかいないはずの空間に身体の向きを変え、オイルパステルでその空間を一閃した。その軌道は神命の脇腹に直撃する。

「ぐほつ、痛え。くそ、何で居場所がばれた！？」

何も無いはずの地面にズサーンと音を立てて砂埃が舞い、その中か

ら疑問の声と共に神命がまるで空間から滲み出るかのように姿を現す。

（完全に気配は消したはずだ。相手の位置を探るような結界でも張つてたのか？）

普段の彼とは違い、少し動搖を見せている。セレベショリーが、「そんな巨大な力の束なんか引き摺つてたらどんな魔術師でも普通気づくわよ。お前、私を舐めているの？」

「力？ AIM拡散力場の事か？」

「そんな科学用語を魔術師の私が知つてるとでも思つているの？」

「じゃあ一体何なんだよ、と溜め息を付きながら神命は立ち上がる。

「あーもつ面倒臭え、地上へ出たほうが楽だったか。いやいつその事地上へ出るか……」

「いやいやいや言つてんじゃねえぞ、能力者ー！」

シェリーはすぐにオイルパステルを振り回し次の攻撃を繰り出す。

今度は神命のいる場所を挟み込むように両側の壁に描かれた魔方陣が作動し、壁や天井に亀裂が入る。そして大量の岩の塊が神命の頭上に降りかかる。

「だから効かねえって」

神命は一度瓦礫の山の中に消えたが、呆れたように頭を？きながら

すぐ」にその姿を現す。

「ああもつ」のままじゃ埒が明かねえ。とりあえず、この騒動を起した理由を聞こつか？まさか科学と魔術、双方のバランスが保たれているこの状況で、戦争を起こすつてのがイギリス清教全体の総意って訳じやないよな？」

神命の問いにシェリーはただ笑みを浮かべているだけ。そしてにやにや笑いながら、告げる。

「超能力者が魔術を使うと、肉体が破壊されてしまう。聞いたことはないかしら」

「ああ？」

質問と回答が噛み合つていない。そのことに神命は少し眉をひそめる。

「何故そんな事が分かったのか、その答えを貴方は知つているかしら？」

知らないわけがない。

神命がこの学園都市に来て、一番初めに『えられた実験内容だ。沢山の子供が傷付き、そして死んだ。沢山の子供が彼の目の前で呪文を口にする。口から血を吐き出し、手足に大きな傷跡を刻んだ。

そんな中で自分が生かされた、生かされてしまった。

それから行われる数多くの実験の為に、特別だといわれ続けた自分

の為に、

何の特別な才能も持たない多くの人間が犠牲になつて。

忘れてても忘れられるはずがない。

そんな遠い過去の思い出を口の中で噛み締めながら、神命は次なる問いを投げる。

「それはイギリス清教の一部の部署での出来事だらう。今はどうなつてる？」

「潰れたというか潰されたといつか。科学側と接触していた事が知れたその部署は、同じイギリス清教の者によつて狩り出されたわ。互いの技術・知識が流れるのはそれだけで攻め込まれる口実にもなりかねねえからな」

シェリーが一度間を空けた。それだけで彼我の間は静寂に包まれた。

「エリスは私の友達だった

張り詰めていた静寂の中で、彼女はポツリと言つた。

「エリスはその時、学園都市の一派に連れてこられた超能力者の一人だった」

エリスという名を聞いて、神命は再び眉をひそめた。エリスという名はあるの石像に付けられていた名だ。だとすれば、彼女はどんな心情を抱いてその名を口にしていたのだろう。それは神命が考えても出るはずのない答えだった。

「私が教えた術式のせいで、エリスは血まみれになった。施設を潰そうとやつてきた『騎士』達の手から私を逃がしてくれるために、エリスは棍棒<sup>メイス</sup>で打たれて死んだの」

その言葉は暗い地下鉄の構内に大きく響き、そして再び静寂が張り詰める。

シェリーはゆづくづとした口調で、

「私達は住み分けするべきなのよ。互いにいがみ合つだけでなく、時には分かり合おうとする想いすら牙をく。魔術師は魔術師の、科学者は科学者の、それぞれの領分を定めておかなければ何度も同じ事が繰り返されちまつ」

その為の戦争。

「そしてそれを防ぐために戦争を起こして、魔術師と科学者の両方に理解させようつて言つことか。互いが接触し合えば、これからも多くの犠牲が伴うと……」

だが、と神命は言つて話を続ける。

「お前の予感は的中しちまつたみてえだな」

「何?」

シェリーの笑みが止む。

「繰り返されたんだよ、あの実験は。ほんの十年前の事だ。学園都

市側でその実験は再開されたんだよ。この俺を使って……」

「あんた、一体何を言つて……」

「知らなかつたのか？二十年前の実験、俺は知つていたぞ」

「馬鹿な……もう科学側と手を結ぼうとする魔術師はいなくなつたはずよ」

シェリーの顔からどんどん余裕が失われていく。

「シェリー……シェリー＝クロムウェル。お前の名だが、俺が最初その名前を聞いたとき違和感があつたんだよ。どこかで聞いた事がある、とな」

そして神命は構内の右側の壁に手を向けて、

「ついでに言つておくと、俺はこのそちら中に描かれている魔方陣を見た事がある。正確には、これに似たようなものだがな。それは俺が十年前の実験に参加していた時のことだ。その場に魔術師がいたかどうかは分からぬ。だがその実験にお前の術式が使われていた事は事実だ」

「ならばこそ、余計に住み分けが必要なのよ。何故お前はそう思わない？」

「思ったよ。この世に魔術なんてものが存在し、科学と交差する度にこんな悲劇が繰り返されるなら交わる必要なんてないとな。だが無理だと気づいた。この街の長がどんな男なのかを知つてからな。だから俺は別の道を歩む。その道で世界を変える。残念だがお前の

考えは納得しかねるな

「別に賛同して欲しい訳じゃねえ。私は私の道を進む。その為にお前はここで終わってもらわなきゃ困るんだよ」

そう言って彼女はオイルパステルを空中に滑らせる。同時にこの空間全体が魔方陣の光で明るく照らされていく。

「地は私の味方。しからば地に囲われし闇の底は我が領域」

（こいつ自分もとも土に埋まつて、ここを墓穴とする氣か！？）

「全て崩れろ！泥人形のようごーーー！愚者を飲み込めーー泥の中へと練り混ぜろーー私はそれでテメーの身体を肉付けしてやるーー！」

最後のスイッチを入れるようシェリーは叫ぶ。

地下はその耐久性を失つたように亀裂が入り、土砂に押しつぶされそうになつてゐる。

しかし神命はその場から一歩として動こうとはしない。すでに対策はしてある。そしてその対策を施してゐる時から彼の勝利は確定しているようなものだ。

壁が、天井が、一斉に崩れ始める。その光景をシェリーは笑いながら見ている。

辺り一面が土砂と粉塵で覆われ、何も見えなくなつた。だが、

「お前は何も分かつちゃいねえ」

そう神命が叫びながらショリーの目の前に現われる。ショリーは驚き視線を神命に合わせ、オイルパステルを振り回すが遅かった。神命の放つた拳はショリーの腹に勢い良く突き刺さる。

髪もドレスも振り乱しショリーの身体が構内を一転三転と転がつていく。そして何mか吹き飛んだ末によつやくその動きを止めた。万策尽きたのか、その顔には余裕の一文字は微塵も感じられなかつた。

「……くわ、ちくしょう」

ショリーはよろめきながら立ち上がり、一步二歩と後退しながら恥々しそうに呟いた。

「戦争を、『火種』をおこさなくつちやならねえんだよ。止めるな！今のこの状況が一番危険だつてどうして気づかないの！？学園都市はどいつもガードが緩くなつていい。イギリス清教だつてあの禁書目録を他所へ預けるなんて甘えを見せてている。まるでエリスの時の状況と同じなのよ。私達の時でさえ、あれだけの悲劇が起きた。これが学園都市とイギリス清教全体なんて規模になつたら！不用意に互いの領域に踏み込めば、何が起きるかなんて考えるまでもないのに！」

ショリーの声は暗い地下を何度も反響し、神命の耳に何度も響いた。耳だけではない、心にもだ。

しかし、

「ぐだらねえ。お前の考えは古いんだよ。幻想殺しが、禁書目録が、風斬 氷華が、お前に一体何をした？お前は誰かを救おうとする前

に、誰かを傷つけようとしてるんだよ。怒るのだつていい。悲しむ事も俺は止めない。だがその感情の矛先を向ける方向は間違いだ。そもそも矛先を誰かに向ける事すらおかしいんだ。俺だつてお前と同じ様な感情を持つてる。今の状況をひっくり返したいと思つてゐるんだよ。だがお前が足搔いた所で、俺達が嫌う鬭いが起つちまうだけなんだよ。どうしてそれを理解しないんだ！！

こんな言葉でシェリーの何が変わるのだろう。たつたこれだけの言葉を並べただけで彼女の決意が、誓いが変わるとは思つてはいない。神命はただ、沸きあがつてくる感情を言葉で伝えただけだ。ならば何が彼女の心を変えられるのだろうか。

「……分かんねえよ」

シェリーはさきり、と奥歯を噛み締めた。

「ちくしょう、確かに憎いんだよ！エリスを殺した人間なんてみんな死んでしまえば良いと思つてるわよ！魔術師も科学者もみんなハつ当たりでふつ殺したくなるわよ！だけどそれだけじゃねえんだよ！本当に魔術師と超能力者を争わせたくないとも思つてんのよ！頭の中なんて始めつからぐぢやぐぢやなんだよ！」

相反する矛盾した絶叫が、暗い構内に響き渡る。

「信念なんか一つじやねえよ！いろんな考えが納得できるから苦しんでいるのよ！たつた一つのルールで生きてんじやねえよ！ぜんまい仕掛けの人形みたいな生き方なんてできないわよ！笑いたければ飛ばせ。どうせ私の信念なんか星の数ほどあるんだ！一つ一つ消えた所で胸なんか痛まないわよ！！」

対して神命は一言で、

「何で氣づかねえんだよ、お前

「……何ですって？」

「結局、お前が言いたいことは、お前が抱く信念なんてたつた一つしかねえじゃねえか。そんな事俺にだつて分かるぞ」

彼は言ひ。

彼女すら氣づかなかつたたつた一つの答えを、

「お前はただたつた一人の友達を守りたかつただけじゃねえか」

そうだ。

彼女の中に渦巻く星の数ほどある信念も、元はたつた一つの想い。全てはそこから発散し、全てはそこへ収束する。結局、今も昔も何も変わつてなどいなかつた、ただそれだけだった。

「それを踏まえてもう一度良く考えてみる。お前も見ただろ。上条達がどう互いに接していたかを。お前の田にはどう見えた？あいつらが争いを起こすように見えたか？ただ微笑み、触れ合うだけのあいつ等が。寧ろお前が望むのはああいう光景なんだ。住み分け？そんなもの必要ないな、少なくともあいつ等には」

シェリーが本来望んでいたのはそういうことだ。もう一生叶うはずのない願いはそういうもののはずだ。何者にも変えられない、変え

られるはずがない。

だからこそ彼は続ける。

「お前の手なんか借りなくても、この世界はちゃんと回っている。だからもうあいつの、上条の大切なものは奪うな。これ以上誰かの大切なものを奪うな。嘗てお前がされたように」

シェリー＝クロムウホールの肩が揺れた。いや、揺れたのは彼女の心なのかも知れない。

彼女の顔は苦痛に歪んでいた。だが進み続ける。それはたった一人の友のためだ。

「 我が身の全ては「き友のために！！」

放たれるのは魔法名。

たった一つの信念だけが刻まれた名。

「 いい名だ、覚えておこう

神命はそれだけ呟いた。

シェリーは壁にオイルペイントを走らせる。たとえそれが神命につの傷を与えるないと知っていても、彼女は止まらない。

崩れ始めるコンクリートに神命は目を向けたが、その前にシェリーが神命の懷へ飛び込んでくる。神命はそれに迎え撃つ、ある信念と共に。

「いいぜ別に。俺はもういろいろんなもんを背負つてんだ。一つや二つ背負うものが増えたつて変わりはしない。だから俺はお前のその信念も背負いきつてやる……」

そう言つて神命はシェリーの持つオイルパステルを拳で粉々に砕くと、その勢いを殺さずに彼女の顔面に拳を突き刺した。

さつきとは違い、彼女は何の抵抗もなくとも簡単に吹き飛び、地面を跳ね回った。神命は倒れたシェリーに近づいていく。どうやら気を失つているようだ。彼は仕方なくその場を後にする。ただこう呟いて、

「背負いすぎて進めなくならんなきゃいいけどなあ……」

神命は地上に出て、とある廃墟の前に立つていた。その近くには何かコンクリートや泥や土等の山が出来上がつていた。恐らくエリスの残骸だろう。彼が駆けつける前にこちらも決着が着いていたらしい。

神命はビルの屋上を見上げた。そこにはあの三人がいた。風斬は何

故か半透明になつてゐるよう見え、あのインデックスとかいう少  
女と会話しているようだ。それからしばらくすると会話が終わった。  
風斬は何故か哀しげな表情を浮かべている。

そして彼女が神命のいるビルの下を見た。神命には彼女と田があつ  
たのかどうかは分からなかつたが、一度だけ彼に微笑んだ。昼に彼  
女が上条と一緒にいた時のように。

そして消えた。彼女のいるべき場所に帰つていつたのだろう。

それから上条とも田が合つた。上条は何か話したそうな顔をしたが、  
今は話さなくともいいだろ。話さなくとも言いたい事は伝わる。

神命はビルに背を向け空を見上げた。太陽は西へ傾き空は朱色に染  
まつてゐる。月も既に暗くなり始めた空を照らし始めている。

「今日は歩いて帰るか」

彼は一言だけ呟いて歩き始めた。

第七学区には窓のないビルが建つていて。

「これで満足か？」

ドアも窓も廊下もエレベーターも通風孔すら存在しないビルの一室で、土御門 元春は空中に浮かんだ映像から目を離して吐き捨てるように呟いた。

巨大なガラスの円筒の中で逆さまに浮かぶアレイスターは、うつすらと笑っている。

「かくして人間は駒のように操られ、また一つ虚数学区・五行機関を掌握するための鍵の完成に近づいた、という訳だ。正直、オレにはお前が化け物に見えるぞ」

虚数学区・五行機関

「まさかその正体がAIM拡散力場そのものだなんて誰も思わないだろう。学園都市に住む二三〇万人も的学生の周囲に自然に発生する力が虚数学区を作つていいなどと。そしてそれを制御するための鍵こそが風斬冰華、という訳か。まったく、風斬については、あくまで虚数学区の一部分とはいえ、あんなものに人為的に自我を植えつけて実体化の手助けをするなど、正気の沙汰とは思えない」

と、それまで黙っていたアレイスターの口が開いた。

「これも虚数学区を御するための方策だ。『何をするか分からぬ無自我状態よりも、敢えて思考能力を与えた方が行動を予測できるし、上手く立ち回れば交渉や脅迫なども行える』

「そこまでして、虚数学区を制御する事に意味があるのか」土御門は、やがて問い合わせた。

「確かに虚数学区は学園都市の脅威だ。だが、脅威とは内側だけにあるものではないぞ。今回的一件によつて、世界は緩やかに狂い始めた。理由はどうあれ、イギリス清教の正規メンバーを警備員と能力者の手を借りて撃退したんだ。聖ジョージ大聖堂の面々はこれを黙つて見過ごすとは思えない。まさか、お前はこの街一つで世界中の魔術師達に勝てるなどとは思つていらないだろうな」

土御門の脅迫いた声に、しかしアレイスターは笑みを崩さない。

「魔術師どもなど、虚数学区を掌握できれば取るに足らん相手だよ」

「あれ、だと?」

アレイスターの言葉に土御門は眉をひそめる。ふと土御門は背筋に嫌な感覚が走り抜けた。

(待て、よ……)

もう一度、彼はAIM拡散力場の集合体、虚数学区・五行機関につ

いて考える。

それは赤外線や高周波のよう、そこにはいるのに見る事も聞く事もできず、

人間とは別位相に存在する、ある種の力の集合体によつて構成される生命体。

土御門元春は知つてゐる。

その存在を、魔術用語で述べるとどんな言葉になるのかを。

(まさか、天使)

いや、虚数学区の住人 風斬氷華を『天使』と表現するなら、  
彼女達が住んでいるとされる『街』とは、つまり……。

「アレイスター……お前はまさか、人工的に天界を作り上げるつも  
りか!?」

「さてね」

対して、アレイスターはつまらなそうに一言答えるのみ。

「ふん。これがイギリス清教に知れれば即座に開戦だな。今にして  
少し思う、オレはシェリー＝クロムウェルに同情すると。お前の言  
動を吟味する限り、ヤツのポジションは単なる悪役ではない。れつ  
きとした、自分の世界を守るために立ち上がったもう一人の主役だ  
らうぞ」

「馬鹿馬鹿しい妄想を膨らませるな。私は別に教会世界を敵に回すつもりは毛頭ない。そもそも君の考えにある人造天界を作るには、まずオリジナルの天国を知らねばならない。それはオカルトの領分だろう。科学にいる私には専門外だ」

「ぬかせ。お前以上に詳しい人間がこの星にいるか。そうだろう？だがこの一件、思わぬ邪魔が入ったようだな。第六位。奴の介入はお前のプランには入っていたのか？」

「いや。だが、彼の行動はプランに思わぬ躍進を『えてくれたよ』

「何！？」

「何を驚く？彼も第六位の座を『えられている身だ。私のプランに含まれていはないはずがないだろ？』」

「そうではない。思わぬ躍進だと？今回は幻想殺しにシェリー＝クロムウェルを倒させることに意義があつたんじゃないのか？」

「不満なのか？君が彼の何を知つているというんだ？それこそあの風斬という少女の事よりも知らないんじゃないのかね？」

「確かに、オレは奴の事をよくは知らない。ただ最高原石を先に見つけておきながら、そいつよりも先にこの学園都市に取り寄せられたお前のお気に入りの宝石だつて事くらいしかな」

「それはただの言い掛けりに過ぎん。手に入れられるものから手に入れた、それだけだよ」

土御門は、唇を歪めて、

「魔術師・アレイスター＝クロウリー」

土御門は一度そう言つて間を空け、二人の間に沈黙が走る。

「今回の一件で世界は緩やかに狂い始めた。イギリス清教のメンバーをわざわざこの街に招き入れ、撃退したんだからな」

土御門は、わずかに笑つて、

「オレにはお前が考へてゐる事など分からぬし、おそらく説明を受けても理解できないだろう。だが、あの幻想殺しを利用するといふなら覚悟しろ。生半可な信念ぐらいで立ち向かえば、あいつらはお前の世界を食い殺すぞ」

彼が告げると、ちょうどタイミングを計つたように空間移動能力者が部屋に入ってきた。

三〇センチ以上も背の低い少女にエスコートされ、土御門はビルから出て行く。

誰もいなくなつた部屋の中、逆さに浮かぶ男は一人呟いた。

「ふむ。私の信じる世界など、とうの昔に壊れています」



第一二三話 境界線上の闘<sup>ト</sup>の終結（後書き）

少し間が開いてしまいました。

とりあえず6巻分は完結。

これからも間が開くと思いますが宜しくお願ひします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4198x/>

---

とある科学の自由選択《Freedom Select》

2011年11月20日16時23分発行